

JUMP **j** BOOKS

ドラゴンボールスーパー

DRAGON BALL **超** SUPER

B R O L L Y

ブロリー

原作・脚本・キャラクターデザイン

鳥山明

小説

日下部匡俊

COVER ILLUSTRATION:
東映アニメーション

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる機種により、表示の差が認められることがあります。

DRAGONBALL SUPER

CHARACTER

SIDE: 地球



DRAGONBALL SUPER CHARACTER

SIDE: フリーザ軍



げんさく せいかくほん
原作・脚本・キャラクターデザイン

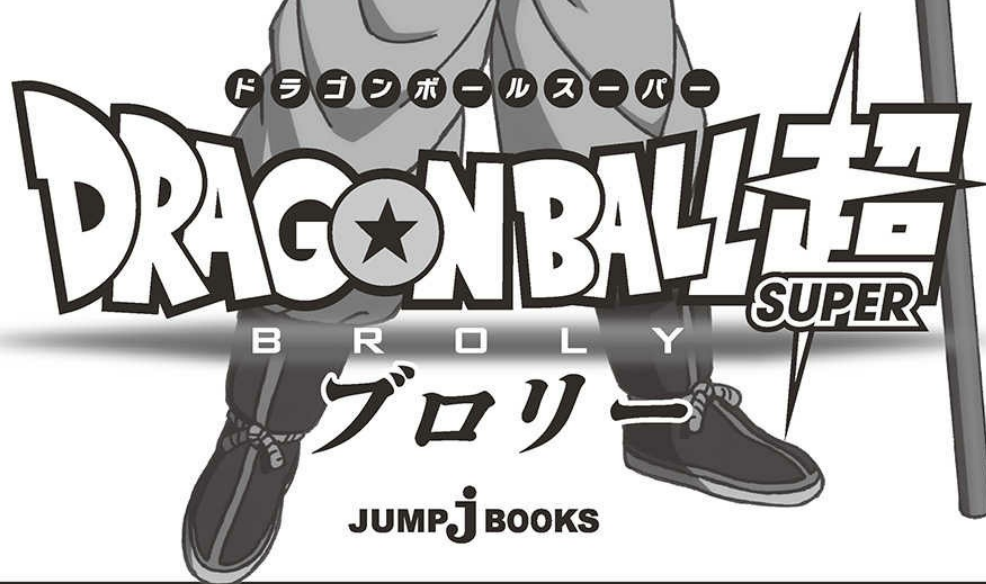
とりや まあきら
鳥山明

しょうせつ
小説

くさか べ まさとし
日下部匡俊

COVER ILLUSTRATION:

とうえい
東映アニメーション



ドラゴンボールスーパー

DRAGON BALL SUPER

B R O L Y

ブロリー

JUMP J BOOKS

CONTENTS

はなし
はじまりの話

ひく せい
惑星ベジータ

ふたたび
フリーザ再び

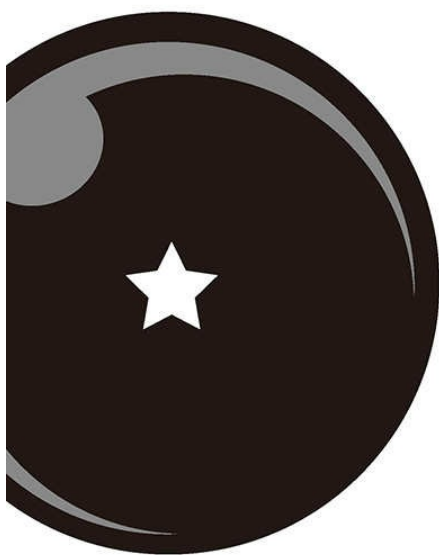
にん じん
3人のサイヤ人

ほ づよ
果てしなき強さ

じん ちやう けつ せん
ナイヤ人超決戦

じ どう きき
死闘の先は...

★この作品はフィクションです。さく ぴん 実在の人物・団体・事件などには、いっさい関係ありません。じつ ざい じん ぶつ だん たい し けん かん けい



其^{その}之^{いち}一

はじまりの^{はなし}話

DRAGONBALL SUPER





いまから少々昔のこと。

サイヤ人たちの故郷、惑星ベジータの空を無数の宇宙船が埋めつくしていた。

コルド大王軍の船団である。

事前の連絡もなにもなく、気まぐれで残酷な宇宙の王は、サイヤ人たちの前に突然姿をあらわしたのだった。

コルド大王の乗る大型船とその護衛の小型船の大群は、地表すれすれまで急降下すると、先導役の戦闘員たちを飛び立たせ、そのままベジータ王の城に向かって進みはじめた。

行く手には背の高い塔が建ち並んでいたが、コルド軍はそれらを突き崩しながらまっすぐ飛行していく。

「くそっ、ムチャしやがる!!」

空を見あげていたサイヤ人たちは、すぐ頭上を通り過ぎる無数の宇宙船に、声をあげてあたりを逃げまどった。

「無礼な！ このような訪問、なめられすぎだ！」

玉座の間に、いならぶ將軍たちの怒りの声が響く。

惑星ベジータの王、ベジータ三世もまた、これ見よがしに空を飛び回るコルド軍の戦士たちを宮殿の窓からにらみつけるように見あげていた。

「陛下、コルド大王がいらっしゃいました」

執事のひとりが静かに告げる。ベジータ王は目も向けず、苦々しげな声で答えた。

「……そのようだな」

コルド軍を先導してきた戦闘員ひとりひとは、サイヤ人でさえかなわない、恐ろしい戦闘力の持ち主たちだった。

最初に降り立ったのは、頭や腕から短いトゲを生やし、ごつごつとした岩のような体を持つ種族の大男と、緑色の長い髪の毛を一本にむすんでおさげにした背の高い優男だった。

このふたりは、コルド軍のなかでも精鋭として知られる戦士である。岩のような巨漢がドドリア、もうひとりの緑がかった青い肌をもつ人間型種族はザーボンという。

さらにその前に五つの人影が舞い降りた。奇妙な動きでポーズをとっている戦士たちは、ギニュー特戦隊と呼ばれる。この五人だけで、城内にいるサイヤ人の戦士たちが束になってもまったくかなわないほどの戦闘力があつた。

だが、本当に恐ろしいのは、彼らの向こうで、お付きを従えて宇宙船から降りてくるコルド大王だった。

頭から鋭い二本の角を生やし、白い肌に鎧のような表皮をまとったコルドは、ザーボンたちやギニュー特戦隊が、カプセル

を出たばかりの赤ん坊に思えるほどの力を持っていた。

「何者だ……あいつは」

ベジータ王がおさえた声でつぶやく。

コルド大王が宇宙船のタラップを降りてくる後ろから、小柄な人影がやってくるのが見えた。角が短く、体は小さいものの、姿形はコルド大王によく似ている。

戦闘員たちが左右にわかれ、道を作る。その間を、コルド大王とお付きの小柄な異星人たち、そして小さなコルドが、ベジータ王のもとにまっすぐ向かってきた。

コルド大王はベジータ王の数メートル手前で立ち止まり、いつもの人を見下した口調でこう言った。

「ひさしぶりだな、ベジータ」

背後にしたがえた将軍たちがひざまずくなか、ただひとり、ベジータ王は立ったままコルド大王たちを出迎えていた。

王たるものの、せめてもの誇りだった。なんといっても、彼はサイヤ人すべてを率いる王なのだ。宇宙の支配者を名乗っているコルド大王が相手だろうと、立場が対等であることを見せつけなければならなかった。

「コルド大王、ようこそ……」

コルド大王は、おずおずと差し出されたベジータ王の右手を不思議そうに見おろした。それから、その手を完全に無視して、横に立つ自分の小さなコピーをちらと振り返った。

「紹介しよう。わが子、フリーザだ」

フリーザと呼ばれたコルド大王の息子は、一步、父親の前に出ると、立ちつくすベジータ王に視線を向けた。

その目に見つめられたとたん、ベジータ王は思わず後ずさり、どさりと膝をついて頭を低く下げた。

「あ……こ、これははじめまして、フリーザさま……」

意識してやったのではなかった。ただ、フリーザと目が合ったとたん、体が勝手に反応したのだ。

誇り高きサイヤ人にとって、それは屈辱以外のなにものでもなかった。

「こちらこそはじめまして」

にやにやと笑みを浮かべて、フリーザは、ベジータ王の顔をのぞきこんだ。

怒りと屈辱のあまり震えだしそうな体を、ベジータ王は歯を食いしばっておさえこんだ。

「突然だが、オレは引退することにした!!」

コルド大王のその言葉に、ベジータ王ははっと顔をあげた。サイヤ人たちの間にも、ざわめきが広がっていく。

「これからはフリーザが軍を受けつぐ。つまりコルド軍は、フリーザ軍になる」

なんと答えればいいのかかわからず、ベジータ王はぼんやりとコルド大王の顔を見あげた。

コルド大王はフリーザの肩に手を置いて、ベジータ王を見おろしながらこう続けた。

「なにも変わらんさ。サイヤ人はフリーザ軍の命令通りに働けばいい！……少しだけ違うとすれば」

そこで言葉を切ってから、コルド大王は笑みをたたえてフリーザを見た。正面を向いたままのフリーザの顔は、どこか不機嫌そうだった。

「フリーザは、このオレよりさらに冷酷ってことぐらいかな」

その言葉が終わると同時に、フリーザは父親の手を振り払い、前に進みながら言った。

「ほーっほっほっほ、よろしく。サイヤ人のみなさんには、特に期待していますよ」

声や表情はにこやかだったが、その目に見すえられると、体の上に大岩でも乗せられたかのような圧迫感があった。息ができない。

ベジータ王は心の底から恐怖に震え、視線をそらすように深く頭を下げた。

コルド大王は強い。それこそ、ケタ違いの戦闘力の持ち主だった。だが、勝てない相手だとわかっていても、立ち向かうことはできた。

けれどもこのフリーザからは……底知れない恐ろしさを感じる。目の前に立たれるだけで、戦おうという気力そのものを根本的にへし折られる、そんな感覚があった。

フリーザは、目の前に運ばれてきたコンテナから、ひとつ小さな装置を取りあげた。

「きょうはわたしの就任を記念して、新しい戦闘アイテムを持ってきてあげましたよ」

手のなかの装置をもてあそびながら、フリーザは冷や汗をかくベジータ王に向かってこう続けた。

「これは、新開発のスカウターというものでしてね。これまで使っていた偵察用のスカウトスコープをコンパクトに装着できるようにしたもので、通信も同時に可能です」

スカウターは、小さな箱状の本体から小さい表示パネルが延びているというものだった。

フリーザがその本体を左耳に押しつけると、スカウターは吸いつくように耳もとに固定された。パネルはちょうど目のあたりにくるようになっていて、それを本体につないでいるフレームの根もとにはスイッチがついている。

フリーザはそのスイッチを押しながら、周囲を見回した。

「これまでのスコープと同様に、相手の位置と戦闘力、そして距離が表示され……おや？」

フリーザの顔が、宮殿の塔のひとつに向けられた。

「何人かのサイヤ人が、われわれを武器で狙っているようですが……」

「……………!!」

ベジータ王は顔を伏せ、思わず身をこわばらせる。

コルド軍の到来を知ってすぐ、ベジータ王は、腕ききの狙撃手たちを発着場の周囲にある建物に潜ませていたのだった。

薄笑いを浮かべたまま、フリーザは別の建物に目を向けた。

「あそこに隠れているサイヤ人の戦闘力は二〇〇〇……なかなか優秀ですね？」

穏やかな声で言いながら、フリーザは、右手の人差し指を視線の先にある建物に向けた。とたん、その建物の上部が、爆音とともに吹き飛んだ。

攻撃をした、という雰囲気ではなかった。フリーザは、ただ狙った場所を指さしているだけのように思えた。

だが、ベジータ王の目には、フリーザの指先から閃光のようなエネルギーが放たれるのが、はっきりと見えていた。

「ああ……」

そばにいたサイヤ人の将軍が、絶望のうめき声をもらす。ベジータ王自身は声をあげることはなかったが、怒りと屈辱で体が震えるのを止めることができなかった。

間を置かず、フリーザは最初に見た塔に指先を向け、光を放った。一瞬遅れて塔の最上階が爆発、炎上し、粉々に砕けて崩れ落ちていく。

さらに、フリーザは宮殿の周囲にある背の高い建物を、つぎつぎと撃ち抜いていった。

気がつくと、ベジータ王が命じて狙撃手を潜ませていた建物は、すべて正確に撃ち抜かれていた。それだけの攻撃を、フ

フリーザは、まばたきするほどの間にやってのけたのだった。

破壊された建物の粉塵^{ふんじん}が薄れていくのを、ベジータ王と将軍たちは声もなく見あげていた。

「こんな感じです。便利でしょ？」

フリーザはにこやかにベジータ王を見た。

「ぐ……」

戦闘民族を名乗るサイヤ人の誇りにかけて、コルド大王たちを隠れて暗殺するつもりなどなかった。これは、あくまでもしもの時の備え^{そな}だった。

サイヤ人はコルド軍の配下となっているとはいえ、一度は戦ったことのある相手である。まして、コルド大王は気まぐれな人物だった。最初は平和的な会見だったとしても、途中でどうなるかはわからない。

だが、そんな心配は必要ないことを、ベジータ王はいま、思い知ったところだった。

ありとあらゆる手段を使い、サイヤ人の戦士が全員で襲いかかっても、あの親子の怪物——ことにフリーザをどうにかできるなど、ありえないことだった。

「とりあえず五〇〇個ほどプレゼントしましょう。足らなかったら言ってくださいね？ では……」

それだけ言い残すと、フリーザはベジータ王たちに背中を向け、宇宙船へと引き返していった。その後ろ姿はまるでスキだらけだったが、ベジータ王はただ黙って見送ることしかできなかった。

フリーザたちが乗りこんだ船は、すぐに発着場から浮かびあがったかと思うと、すさまじい加速とともに飛び去っていった。護衛の船もいっせいに加速して宇宙へと消えていく。

それを見送りながら、ベジータ王は手にしたスカウターを思わず握^{にぎ}りしめていた。

「ぐ……ぐぐ……」

スカウターのスクリーンが、ビシッと音を立ててひび割れた。



サイヤ人は、生まれてすぐ育児カプセルに入ることになる。

生まれた赤ん坊はまず、スキャンされ、戦闘力を計測される。その数値でランク分けされ、育てられる場所が変わってくる。

最高の戦闘力を示した子供は、エリートを育てるための特別な施設に移される。

ベジータ王が向かったのは、城内にあるその特別養育施設だった。

フリーザたちが去ってから、何時間も経過していない。

DRAGONBALL SUPER



だが、ベジータ王はそこに行かずにはいられなかった。

「ほう、もうこんなに大きくなったのか」

この場所には、彼の息子、次の王となるはずの王子が預けられていた。

王子のカプセルは特別製だった。一段高い場所に置かれたその前に立って、ベジータ王は、なかで眠る息子に向かって両腕を広げた。

「自慢のわが息子よ！ おまえの潜在能力は天才的だ。宇宙の王になるのは、あんなフリーザなどという化け物ではなく、おまえだ」

王はカプセルに触れながら、口もとを歪めて笑った。

「成長を楽しみにしているぞ」

この王子は、ベジータ王の希望だった。

生まれた時から、戦闘力の数値には目をみはるものがあつた。過去にもここまでの数値を記録した赤ん坊はいなかったはずだ。しかも、成長するにつれて、日々その戦闘力はさらに上昇しつつあつた。

この子は、いままでのどんなエリート戦士より強くなる。王はそう確信していた。もしかしたら、王子こそ伝説の超サイヤ人かもしれない。そう考えてさえたのだつた。

わが子の姿を見つめていたベジータ王は、ふたたび厳しい顔に戻り、背を向けてカプセルの設置された一段高くなっている場所を降りはじめた。

その時だった。

「こいつは誰だ！」

ベジータ王が指さしたのは、階段を降りてすぐの場所に置かれたカプセルだった。

「なぜ、特別カプセルに入っている！」

振り返り、後ろに控えていた施設の所員をにらみつける。

「はっ、はい！」

制服を身につけた所員たちが、大あわてで駆けつけた。

「この子はブローリー、パラガス大佐のお子さまです」

言いながら、大柄な所員がスキャナーを取り出し、ブローリーと呼んだ赤ん坊の上にかざして見せた。

とたん、スキャナーの数値がすさまじい勢いで跳ねあがっていく。見る間に、スキャナーの測定限界を超え、エラーコードを表示して止まった。

だが、ベジータ王はスタッフの差し出すスキャナーを見ていなかった。

「なぜだ！ この育児室は、サイヤ人のエリートになるべき優秀な赤ん坊のために用意したもの！」

冷や汗を流しながら、スタッフがベジータ王の前にもう一度スキャナーを差し出す。

「はっ、はい、その……ブローリーの潜在能力が特別でして……」

ベジータ王は、いらだたしげにスキャナーを押しつけ、血走った目をそのスタッフに向けた。

「天才的なわが子の数値に、匹敵するとかのか！」

「は、はい、計測時にもよるのですが、王子さまの数値を超えるレベルでして……」

もうひとりのスタッフがうなずくのを見て、スキャナーを持ったスタッフはおずおずとそう答えた。

「そんなことはありえない……王子の数値でさえ過去最高なんだ！ 貸せ!!」

ベジータ王はむしり取るようにしてスキャナーを奪^{うば}い、乱暴にカプセルの上に手をつきながら、眠っているブロリーにそれを向けた。

カプセルを叩^{たた}いた音に、眠りを邪魔^{じやま}されたブロリーがかすかに目を開き、泣き顔になる。

とたん、スキャナーの数値がさっきとは比較にならない勢いで上昇する。エラーコードのかわりに、スクリーン上には意味不明な模様が走り回り、それから急激にスキャナー本体が持っていられないほど熱くなった。

「うおっ！」

ぼん、と音をたて、ベジータ王の手のなかのスキャナーが破裂^{はれつ}した。

「あ……ああ……」

呆然^{ぼうぜん}とブロリーを見やるベジータ王の背中から、あわてたようすでスタッフたちが声をかけた。

「も、申し訳ありません！ やはり、故障^{けい き}していたようです……早く新しい計器を」

「ただいまお持ちします」

それから、入念な測定が何度も行われ、所員のひとりが、測定結果を表示したスキャナーを見ながら、安心したように言った

「再測定の結果、数値が半分以下になりました。過去に異常な数値が出たことがあったのですが、やはり計器の故障でしょう」

「しかしそのような異常なデータ^{はいじよ}を排除しても、ブロリーの潜在能力は相当なものです」

別のスタッフが、手もとのデータを見ながら続ける。

それを見返すベジータ王の視線は冷ややかだった。だが、そのようすに気づいていないスタッフたちは、口々にブロリーがいかにすぐれた才能を持っているかについて語るのだった。

「このまま訓練を積みめば、すばらしい戦士に育ち、わが軍の強力な戦力に！」

「それこそ、伝説の超サイヤ人^ひにさえ——」

その言葉を耳にしたとたん、ベジータ王はざりりと音をたてて奥歯^かを噛みしめた。

パラガス大佐は、ベジータ王の玉座の間へと続く廊下を、なりふりかまわず走っていた。

ベジータ王の軍団のなかでも、大佐にまでなったベテランの戦士である。たくわえた口ひげや、以前の戦いで失った左目などからは、風格^{ふうかく}さえ感じられるほどだった。

それが、明らかにとりみだした表情で、城のなかを駆け抜けていく。

すれ違う兵士や召使^{めしつか}いたちが、そのただならぬ雰囲気^{めいふき}に驚いて振り返る。だが、パラガスはそれを気にするようすもなかった。

「パラガスさま」

玉座の間の手前まで来たところで、パラガスの行く手に、近衛兵^{このえ へい}たちが立ちふさがった。

「お待ちください」

かまわず通ろうとしたパラガスを、兵士たちは無理やりつかまえて引き留めようとする。

「ええい、離せ！」

パラガスは明らかに冷静さを失った声で叫びながら、信じられない力で兵士たちの手を引きはがし、無理やり彼らを押しのけて前に進んだ。

玉座の間の扉をこじ開け、パラガスは、どしどしと足音を響かせて広間に入っていく。

真正面の玉座には、将軍たちとなにごとか話し合う王の姿があった。

「ご無礼をお許してください」

玉座の前まで進み出ると、パラガスは、そう言いながら片膝をついて頭を垂れた。それからわずかに顔をあげ、ベジータ王の顔を見る。

「わ……わが息子ブロリーを、ポッドで辺境の星に飛ばすおつもりだとか……」

片肘をつき、顎を支える格好でパラガスを見おろしていたベジータ王は、つまらなそうにこう答えた。

「そうだ」

パラガスは一瞬言葉を失った。

「そ……それは下級戦士の役割……」

ようやくそれだけの言葉をしぼり出すパラガスに、返すベジータ王の声は冷たかった。

「星を制圧できるほどに成長すれば、さらに強力な戦士になるかもしれないだろう。星を支配して高く売る、それがわれわれ戦闘民族サイヤ人だ」

「目的地である小惑星バンパは、人間さえいない過酷なだけの星です……高く売れるとは思われませんが……」

パラガスは小心者だった。いかにも戦士という外見も、態度も、出世と人望を集めるために作りあげたものだ。正直に言えば、王とこうして直接話すだけでも恐ろしかった。

あの激しい気性と、サイヤ人の頂点に立つほどの戦闘力。へたなことを口にして怒りを買うようなことになったらと思うと、体の震えを隠すだけで精いっぱいだった。

だが、いまはそんなことを気にしている場合ではなかった。

「……おまえの息子の潜在能力は異常なまでに高すぎる。突然変異と言ってもいいだろう」

ベジータ王の言葉に、パラガスは心のなかで、そう、それなのだつづやいていた。

パラガスの身分では、現在の地位が出世の限界だった。飛び抜けた戦闘力があればそれも関係ないが、どんなに訓練しても四〇〇〇を超えるかどうかといったところだ。

そこへ、ブロリーが生まれた。ブロリーの潜在能力なら、きっと最強の戦士として軍の頂点にも立てるに違いない。

ブロリーは、パラガスにとって最後の、最大の希望なのだ。

パラガスをもの思から現実に戻すように、ベジータ王は続けた。

「いずれ正常な精神状態は保てなくなり、わがベジータ軍はおろか、宇宙そのものを危険にさらすことになる。命を絶たずに、星に飛ばしてやるだけでもありがたく思え」

パラガスは耳を疑った。そんな話など聞いたこともなかった。

「そ……そんな……」

パラガスは、思わずベジータ王の前で立ちあがっていた。そして、震える指先を王に向け、嘲りの笑みを浮かべてこう言った。

「あ……あなたは、王子より高い潜在能力を持ったブロリーに嫉妬し、亡き者にしようと——」

パラガスは完全にわれを忘れていた。もともと小心で、慎重な男である。それが、プロリーというケタ外れの才能を持った息子が葬りさられそうになって、完全に冷静さを失っていたのだった。

「それ以上口を開いてみろ。きさまは死ぬことになるぞ」

ベジータ王は生粋の戦士である。いくつもの修羅場をくり抜けた強戦士のその言葉は、パラガスの虚勢を一撃で打ち砕いていた。

「あ……ああ……」

返す言葉を見つけれず、パラガスは思わず一歩退いていた。そのまま視線をそらすように、下を向く。

じつは、パラガスの指摘は正しかった。いわれのないことなら、ベジータ王はパラガスを一撃で殺していただろう。それができなかったのは、王子こそ最強であってほしいと思う自分を恥じる心がどこかにあったからだった。

ベジータ王は固い表情のまま、こう続けた。

「それにもう遅い。ポッドはいま発射した」

その言葉とほぼ同時に、玉座の間の巨大な窓の外から、どん、と衝撃が伝わってきた。

目を見開き、はっと顔をあげたパラガスは、その方向に顔を向けた。

「な……」

間違いない。あれは、ポッドを発射するときのものだ。

そう悟ったパラガスは、窓に向かって駆けだしていた。床から高い天井まで届きそうなステンドグラスを突き破り、パラガスはまっすぐに宇宙船の発着場へとかけつけた。

もはや、パラガスにまともな判断力は残っていなかった。ただ、王への失望と怒り、そしてプロリーを失うかもしれないという恐怖が、彼を突き動かしていた。

発着場では、多くの作業員たちが忙しげに動き回っていた。

パラガスは、そのなかにふわりと舞い降り、なにげないふうをよそおって、すぐに乗りこめそうな宇宙船を探してあたりを見回した。

「どけい！」

通りかかった作業員を押しわけ、パラガスは目についた宇宙船へと向かっていった。

その宇宙船では、ビーツという名の作業員がエネルギー補給を行っていた。開け放たれたハッチのすぐ横で、補給作業を行っていたビーツは、宇宙船に乗りこむパラガスを見て、あわててそのあとを追った。

なかに入ると、すでにパラガスは操縦席で起動操作を行っているところだった。

「お待ちください、発進許可は出ていません——！」

だが、パラガスはビーツを無視して、操縦桿を引いた。

「うわっ！」

船体がぐらりと傾き、離陸するのがわかる。

『貴船の飛行は許可されていない！ ただちに帰投せよ、繰り返す、直ちに帰投せよ』

すぐにスピーカーから管制官の声が聞こえてきたが、パラガスは気にするそぶりも見せず、操縦を続けた。

「す、すぐにお戻りください！」

なんとか立ちあがったビーツが、必死で声をかける。だが、パラガスは振り返りもせず答えた。

「そうはいかん、息子を助けねば」

ビーツは事情がのみこめず、聞き返そうと口を開きかけたが、突然襲いかかった急激な加速に、近くにあったシートにしがみついた。

ようやく加速が落ち着いたところで、パラガスは、ビーツにいままでのいきさつを語りはじめた。

「……そんな、ベジータ王が？」

信じられないという表情を浮かべたビーツに、パラガスはうなずいた。

「ベジータ王は、同時期に生まれた王子の天才的な能力が自慢だった……その能力を超えてしまったわが息子ブロリーの存在が、気に入らなかったんだ」

ビーツは、パラガスの話に神妙^{しんみょう}な顔で耳を傾けていた。その話を信じたのか、それともあきらめたのか、もう引き返せとは言わなかった。

「ボッドの目的地は、辺境の星だったとか」

ビーツの言葉に、パラガスはスクリーン上に穴だらけで荒れた惑星の映像^{うっ だ}を映し出した。

「九四番^{こう せい}恒星を廻る、バンパという小惑星だ」

「なぜ……あのあたりに人間のいるような星はないはず」

「王の目的は、星を手に入れることじゃない！ わが息子ブロリー^{まつ さつ}の抹殺だ」

怒りに体を震わせながら、パラガスはそう吐き出した。

「……そ、そんな」

パラガスは自動操縦のセットを終え、変更できないようにロックしてから、航行中眠って過ごすための睡眠カプセルの入り口に向かった。そして、不安げな視線を向けてくるビーツを振り返り、言った。

「心配するな、ビーツ。ブロリーを救出したら、オレたちはどこか別の星で暮らす。おまえはオレたちを星に降ろして、惑星ベジータに帰れ」

「あなたは帰らないんですか？」

パラガスは自嘲^{じ ちよう}気味^{きみ}に笑った。

「当然だろう。帰っても、処刑^{しゅ けい}されるだけだ」

そこまで言う前から、パラガスは鋭^{す ず}く目を細め、虚空^{こ くう}をにらみつけた。

「オレは、ブロリーを最強^{ふく しゆう}の戦士に育て……いずれ、ベジータ王に復讐^{ふく しゆう}をする！」

最後の言葉は、ビーツに向けられたものではなかった。見る者を怖気^{おそ け だ}立たせる表情を浮かべ、パラガスはカプセルのなかに消えていった。



長い旅路を終え、その小さなポッドは、バンパと名づけられた星に落下した。

地面にめりこんだポッドは、表面にスパークが走り、煙をあげていたが、やがてそれもおさまると、ゆっくりとハッチを開きはじめた。

ポッドが落ちた場所は、ちょうど夜明けを迎えるあたりだった。夜通し吹き荒れた嵐がおさまり、つかの間晴れた空にぽかりと満月が浮かぶ。その光が、開いたハッチのなかに差しこんだ。

ポッドのなかで、力なく横たわっていたブローリーの上に、月の光が降りそそぐ。

「うっ……」

薄く開かれていたブローリーの目が、うめき声とともに大きく見開かれた。体に巻きついてきたシッポの毛が針のように逆立ち、全身が剛毛に覆われていく。

無人の小惑星に、獣の吠え声が轟いた。

「あれが小惑星バンパですか」

睡眠カプセルから身を乗り出して、ビーツが窓の向こうに浮かぶ荒廃した星をさして言った。

「計算では、ポッドのほうが二日ほど前に着いているはず……」

すでに起きだしていたパラガスは、操縦席に座り、窓の外に目を向けた。

「生きていろよ、ブローリー。すぐに助けてやる……！」

バンパに降下するとすぐ、船はすさまじい嵐に遭遇した。自動操縦では追いつかず、パラガスは操縦席で必死に船を操らなければならなかった。

「あのあたりのはずだ……」

ポッドの着陸した予想ポイントは、その嵐のどまんなかにあった。風はますます強くなり、危険を感じるほどの揺れがパラガスたちを襲う。

「く……」

「光の当たっているところは穏やかそうでした！　そこに着陸しましょう！」

補助座席にしがみついたビーツが叫ぶ。

「いや、強行する……!!」

どうやら、昼の部分では嵐はおさまっているようだった。だが、安全な場所からでは、距離がありすぎる。ブローリーがどんな状態かわからない以上、一刻も早くたどり着きたかった。

だが、目標ポイントまであとわずかと迫ったところで、船は叩きつける暴風にあおられ、岩山に接触してひどく乱暴に着陸することになった。ほとんど墜落したようなものだったが、ふたりはなんとか無事だった。

パラガスは衝撃から立ち直るとすぐ、自動では開かないハッチを蹴り開け、外のようにすうかがった。

ハッチの入口は、地面から何メートルか浮いた位置にあった。

そこから、捜索用の装備が入ったコンテナを下に落とし、パラガスは振り返って言った。

「さっそく探しに行く、ついてこい！」

「オ、オレですか!?!」

驚くビーツに、パラガスは地面に飛び降りながら答えた。

「そうだ。探しているうちに、飛び立たれては困るからな」

「そんなことしませんよ、信じてください」

ビーツの言葉を背中で聞きながら、パラガスは、落ちて散らばったコンテナの中身のなかから、拾ったマスクを口に当て、つぶやいた。

「ふん、信用できるサイヤ人なんているのか？」

上空ほどではなかったが、地上でも歩くのが困難なくらいには風が吹き荒れていた。ライトであたりを照らす、それだけではほとんど先が見えない。

パラガスは装備品のなかにあった小型カメラのようなものを目に当て、周囲を見回した。

「そのスカウトスコープ、新型になったらしいですよ。フリーザっていう新しい総帥が持ってきたとか……」

「知っている」

パラガスはそう答え、スカウトスコープと呼ばれる装置を生命探知モードに切り替えた。

画面上に、いくつかの光点が浮かびあがる。どうやら、この星にも生命はいるようだった。それも、かなりの数が。

遠くで密集している光点の方向をズームすると、スコープは自動的に戦闘力を計測しはじめる。

ふたりは、とりえず光点の集まっている方向に進みはじめた。

「とんでもなくすごいヤツらしいですよ、フリーザって」

ライトであたりを確認しながら、ビーツがパラガスの背中越しにそう言った。

「もう、オレには関係ない」

答えたパラガスは、風に乗ってなにかが近づいてくる音が聞こえたような気がして、足を止めた。

「な、なんでしょう？」

不安げなビーツの声には答えず、パラガスはスカウトスコープで周囲を探った。

周囲でこれほど風が吹き荒れていなければ、ここまで気づくのが遅れることはなかっただろう。だが、突風に逆らって、姿勢を低くしながら進んでいたせいで、パラガスはスカウトスコープの発する警告を見落としていたのだ。

「な……」

アラーム音とともに、スカウトスコープの画面上に無数の光点が浮かびあがる。ひとつひとつの戦闘力は驚くほどのものではなかったが、この数はまずい。

スコープが光点のひとつに焦点を合わせる。それは、巨大なクモ——いや、ダニのような生き物だった。それが、群れをなしてパラガスたちのもとに向かってきている。

思わず後ずさるパラガスの背中に、おびえたビーツの体が触れる。

「ひっ……」

別の方向から感じた気配に振り向くと、そこにはパラガスが見ていたものとは違う巨大ダニが立ちふさがっていた。

ビーツの向けたライトの向こうで、折りたたまれた口もとが開かれ、なかからひとかかえもありそうな大きさの針のついた管が飛び出してきた。

「うお！」

とっさに避けなければ、パラガスはその針に串刺しにされていただろう。腰を抜かしたビーツが悲鳴をあげ、バランスを崩したパラガスは、地面の上を転がりながら腰の武器をまさぐった。

パラガスは、手に触れた光線銃^{にぎ}を握り、乱射しながら駆けだした。そのあとを、及び腰のビーツが追う。

想像よりも素早い動きで、巨大ダニはふたりの後ろを走ってくる。さらにその向こうから、何匹ものダニが続くのが見えた。

「な、なんですか！」

マスク越しのくぐもった声で、ビーツが叫んだ。

「冗談じゃない、オレは戦闘員でもなんでもないのに」

すぐ近くに岩場の裂け目^{さめ}がなかったら、ふたりはダニの集団に追いつかれていただろう。とっさに飛びこんだ穴の底で、ふたりは息を殺して怪物たちをやり過ごした。

やがて、周囲が明るくなりはじめた。同時に、ふたりは、あれほど吹き荒れていた風がおさまっていることに気がついた。

スカウトスコープで近くにダニがいないことを確認してから、パラガスたちは裂け目から姿をあらわした。そのまま、力を解放して宙に舞いあがる。

「夜と嵐はワンセットみたいですね……いまは暑いけど」

ビーツは、自分のスカウトスコープを目に当て、あたりを観察していた。

「あの星は衛星^{えいせい}かな？　ちょうど満月ですよ」

空の一角に浮かぶ月にスコープを向け、ビーツが間延びした声でそう言った。

「あまり長く見るんじゃない。大猿^{おおざる}になるぞ」

パラガスの警告に、ビーツはあわてて月から目をそらした。

「え？　あ、はい……オレ、大猿になったことないんですよ」

「大猿はわれを失ってしまう。あれになるのは、追い詰められてどうしようもなくなったときだけだ」

そう言ってから、パラガスは遠くのダニたちがどこかに向かって移動していくことに気がついた。スコープが拡大した行く先には、円形に広がる緑の草原があった。

その丸い草原は、地面のそこかしこに点在していた。どうやら、岩場が丸くえぐれていて、その底に広がっているものらしい。

ふたりはダニたちの上を飛び越え、草原のひとつに降り立った。

「な……なんだ？」

地面に降り立ったパラガスは、踏んだ地面の手ごたえのなさ、思わずバランスを崩しそうになった。

ビーツがかがみこみ、足もとの地面に触れながら言った。

「地面がやわらかい……これ、草でもなさそうですよ」

パラガスは、例のダニたちがこの場所^{かこ}を囲む崖^{がけ}の上に姿を見せたことに気づいた。距離はある。襲ってくれば、飛んで逃げればよいと考えてようすをうかがった。

だが、ダニの目的はパラガスたちではないようだった。ダニたちはいっせいに口を開き、あの針のついた管を緑の地面に向かって打ちこんだ。

「あいつら……なにかを地面から飲んでみたいですね」

ビーツがそう口にした瞬間だった。

「わあっ！」

突然地面が大きく波打ち、立っていられなくなる。とっさに空中に舞いあがったふたりは、彼らの立っていた地面がぐにやりとゆがんで、小山のように盛りあがるのを見た。

「なんだ!？」

盛りあがった草原に見えるものの中から、巨大な獣^{けもの}の頭が突き出るようにあらわれた。細長く延びた鼻先^さが裂けるように上下に開き、中にはぎっしりと並んだ鋭い^{すど きば}牙^めがのぞいている。その上には見開かれた大きな眼がふたつあって、周囲を見回してぎろぎろと動いていた。

さっきまで地面に針を突き立てていたダニたちが、いっせいに後ずさる。巨大な緑色のそれは、大顎を開いてダニたちの上に覆いかぶさった。そうして、地面ごとかじり取り、ばりばりと音を立てて噛み砕^{かくだ}いていく。

「……あれは草原ではない。巨大な獣だ」

パラガスが低くうめいた。

「あの怪物たちは、緑の獣の血を吸って生きている……獣は、その怪物を食って生きている……」

眼下^{がん か}では、すさまじい生存競争がくりひろげられていた。それは、戦いの日々^{から}に身を置くサイヤ人にとってさえ、胸の悪くなる光景だった。

「き……気持ち悪い星ですね」

うんざり顔でそう言ったビーツは、降り立った小さな岩山の上で、はっと顔をあげ、自分の見ている方向を指さした。

「あ！ ポッドだ！ あそこにポッドがありますよ！」

パラガスはその声にはっと振り返り、ビーツのさし示した方向に転がる球形の物体を見つけた。

「いない……どこに行ったんだ」

開け放たれたハッチのなかは、もぬけの殻^{から}だった。

「食われちゃったとか？」

あたりを見回し、ビーツがおびえた声を出す。

パラガスはそれを見回して、取り出したスコープで周囲を見回した。

スコープのなかに、単独の光点が浮かぶ。モードを通常に切り替えると、そこには洞窟^{どう ぐつ}のある岩山があった。

「あっちだ！」

薄暗い洞窟のなかには、大きな卵がいくつも産みつけられていた。サイズから考えて、おそらくあの巨獣にたかるダニのような寄生虫のものだろう。さらに奥に進むと、例のダニが、ばらばらになって転がっていた。

ビーツが、口もとをおさえて情けない声^{なさ}をあげる。

「うええ……た、たしかにここですか？」

ダニの胴体にスコープを向け、生命探査モードに切り替える。画面に反応はなく、そこに生命力は残っていなかった。完全に死んでいるらしい。

と、なにかがこすれるような小さな物音が聞こえた。

パラガスが、スコープの探査範囲を広げる。広がったフレームの端^{はし}に、光点が映し出された。そのまま通常モードに戻し、光点の位置をズームアップする。

そこにあったのは、ちぎれたダニの脚^{あし}だった。それが、がさごと動いている。

声もなく見守るパラガスたちの目の前で、ちぎれた関節の端からのぞいたのは、小さな子供のものらしい手のひらだった。

「お、おお……」

手に続いて、子供の上半身が姿を見せる。汚れた口もとを手でぬぐいながら、小さな顔がパラガスのほうを向いた。

「ブローリー!!」

叫ぶや、パラガスはブローリーに向かって飛び出した。

「怪物を襲い、脚を食べていたのか……さすがだぞ！」

だが、ブロリーは手にしていた肉を投げ捨てると、身を低くして身がまえた。明らかに警戒している。

「あれがブロリー……」

それを端^{はた}で見ていたビーツは、深く考えずに自分のスコープをブロリーに向けていた。ピピッと音を立て、ブロリーの戦闘力が表示される。

「せ、戦闘力九二〇！ オレより強いじゃないですか！」

だが、パラガスはかぶりを振った。

「いくら戦闘力が高い天才児^{きようじん}といっても、九二〇ではあの怪物は倒せない」

言いながら、パラガスは一瞬でブロリーの背後に回った。気づいたブロリーが暴れようとするが、すでにパラガスの手はブロリーのシッポをつかんでいた。

サイヤ人のシッポは、強^{きよう}靱^{じん}な肉体を持つ彼らの数少ない弱点^{きわ}だった。尾をつかまされると、よほど鍛えていなければ力が抜けてしまう。

「見てみる……スーツが少し伸^のびて、ブカブカになっている」

ブロリーを抱えたパラガスは、息子の戦闘服がゆるくなっているのを見せた。

「あの満月を見て、大猿になったんだろう」

パラガスは、そう言って天に浮かぶ満月にちらと目をやった。

ブロリーを保護したあと、荒れ狂う怪物たちの間を抜け、宇宙船のもとに戻ることができたころには、すでにあたりには夕闇^{ゆうやみ}が迫っていた。

あれだけ穏やかだった空模様は、分厚^{ふあつ}い雲に覆われ、空気も冷たくなりはじめている。

「急いでこの星を離れましょう」

船にもどったビーツは、操縦席に陣取り、さっそく点検をはじめている。

「けっこう壊れているな……」

船は、崩れた岩にひっかかって斜^{なな}めになったままだった。思ったよりも損傷^{そんしょう}はひどく、岩山に接触した際に受けたい^{せんてい}らしい傷が、船底を中心に大きく広がっている。

船内も、衝撃でパネルが外れたり、配線のショートでそこかしこ^こが焦^こげていた。

パラガスはマスクを取り、空いている座席^あに放り投げながら、備品を確認するために船内の倉庫に入っていた。

「そ……そんな……」

ビーツの声に、パラガスは倉庫から身を乗り出した。

「どうした？」

ビーツは操縦パネルの下をのぞきこみ、青ざめた顔をしていた。

「メインのフローターが割れている……」

ビーツの足もとには、船の推進力^{すいしんりよく}を発生するために必要な、フローターと呼ばれる部品があった。そのまんなか、大きなひびが走っている。

フローターは、船の底にはめこまれた巨大な結晶体^{けつしょうたい}だった。船内から見られるのはそのごく一部だったが、それがこれだけ大

きくひび割れているということは、見に行かなくても、どのくらい傷ついているか想像できた。

「まさか……直せないのか？」

ビーツはパラガスを振り返り、かぶりを振った。

「絶対に無理です。新しいフローターがないと」

「なんだと！　ここを動けないということか？」

ビーツは頭を抱えた。

「こんなとこじゃ、無線で助けも呼べないですよ……」

その言葉をかき消すように、嵐の前触れの風が、びょう、と音を立てて吹き抜けていく。

捕らえられたブローリーは、気絶させられた状態で、船の外に転がされていた。そのブローリーのまぶたが、ぴくぴくと動き、ゆっくりと開かれる。

意識を取り戻したブローリーは、虚ろな目で、闇に覆われつつある空を見あげた。

その耳に、パラガスたちの言い交わす声^{い か}が響いていた。

「食料と水は、一〇日分ある」

水の入った瓶^{びん}を手^てに、パラガスは倉庫を振り返った。

「たった一〇日で見つけてもらえると思いますか？　やっぱり、強行着陸するべきじゃなかったんだ」

ビーツの言葉に、パラガスはじっと押し黙った。

「これで、ひとり分の食料は助かる」

短い沈黙の後、パラガスはひと言そうつぶやいた。そうして、腰のホルスターから銃^{じゆう こう}を取り、銃口をビーツに向ける。

気配に気づいて、ビーツがぼんやりと顔をあげた。一瞬遅れて相手の意図^{い と}に気づき、ビーツが身をかわそうとする。

短く銃声が響いた。

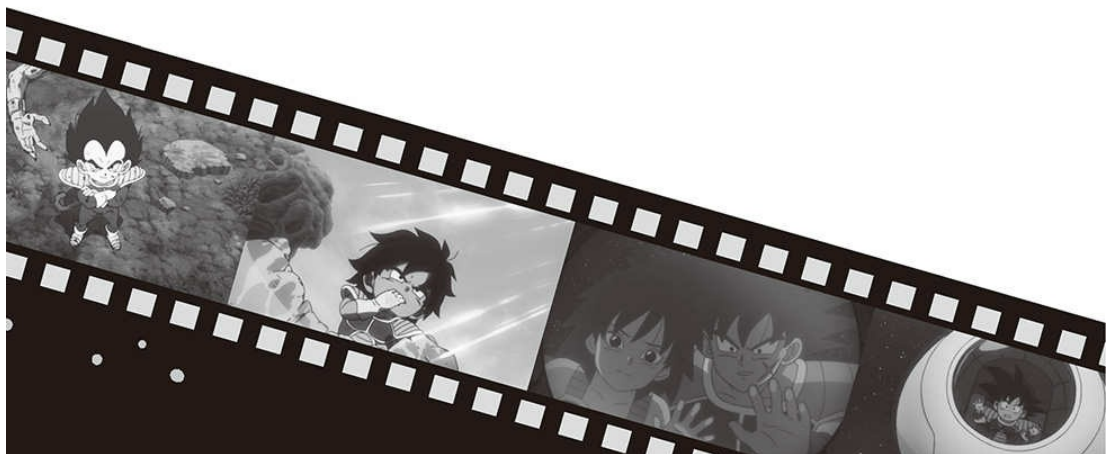
口を開きかけたまま、ビーツの表情が凍りつく。胸のあたりにこげた穴^あを開け、ビーツの体は、座席の上からごろりと床に転がった。



其^{その}之^に二

惑^わ星^くベ^せジ^いータ

DRAGONBALL SUPER





ブローリーが小惑星バンパに追放されてから、五年ほど過ぎたころ。

サイヤ人の戦士バーダックは、故郷へと帰還する宇宙船のなかにいた。

「バーダックさん……」

自分の名を呼ぶ声を聞いて、バーダックは浅い眠りからゆっくり目覚めていた。

「バーダックさん」

「……なんだ？」

バーダックを呼んでいたのは、隣で船を操縦していたリークだった。

「そろそろ惑星ベジータですよ」

その言葉に、はっきりと目を覚ましたバーダックは、正面の窓越しに近づく惑星ベジータを無言で見つめた。

「ひさしぶりですねえ」

「……ああ」

実際、今回はずいぶん長く家を空けたような気がする。若いころは何年も転戦することも珍しくなかったが、ギネと所帯を持ってから、年単位で星を離れることは少なくなった。

家族を持ったことで、バーダックのなかでなにか変化が起きたらしい。戦いに身を置き、戦いのためだけに生きるというサイヤ人の本質は、変わっていないように思うが。

「どういことですかね、サイヤ人は急いで惑星ベジータに集まれだなんて」

着陸に備えてモードを切り替えながら、リークがいぶかしげな口調でそう言った。

「フリーザの野郎の命令らしいけど……」

「スカウターを取れ。聞かれるぞ」

「あっ」

バーダックに指摘され、リークはあわてて左耳からスカウターを外す。

リークは、つけることがすっかり習慣化したその装置を、両手で持ったままじっと見おろした。

スカウターは、装着すると強制的に通信機能が作動するようになっている。名目上は、戦闘時の通信を常時記録するためということだったが、戦闘員の監視が本当の目的なのは明らかだった。

リークはスカウターを操縦席の物入れに突っこんでから、窓の向こうに目をやった。

「見てくださいよ、みんなも続々帰ってきてます」

周囲には、宇宙船の航行灯がいくつも浮かんでいるのが見えた。拡大すると、そのほとんどがサイヤ人の使う宇宙船だった。

それらを目で追っていたバーダックは、すうっと目を細め、身を乗り出して言った。

「あそこを見てみる」

リークはバーダックの視線を追って、その先にあったものにはっと息をのんだ。

「フリーザの船だ……」

バーダックの言葉に、リークが不安げにつぶやく。

「まだ時間があるのに、もう待機しているのか」

フリーザが、サイヤ人に集合をかけた日時は、まだもう少し先だった。

そもそもサイヤ人を見下しているフリーザが、そのサイヤ人とかわした約束を守ることなどまずないと言ってよかった。それが、こんなに早く姿を見せるとは。

「おかしいと思わんか」

フリーザの船が待機する軌道を横切り、惑星ベジータへの降下に移ったところで、バーダックがふたたび口を開いた。

「話があるなら、わざわざ星に帰らせなくても無線ですむ」

リークの目が、かすかに見開かれた。

「新兵器を渡したいなら、急いで集める意味もない」

バーダックがそう言ったところで、船に軽い衝撃があった。大気圏に入ったのだ。

「……こいつはやっぱり、なにか裏がありそうだ」

「え……なんですか、裏って……」

リークが、不安げな顔を向けてくる。

「もともと、星を征服して売るのは、オレたち戦闘民族サイヤ人の生業。それを、フリーザの父親コルドは、強引に力でねじ伏せ、配下にしやがった……」

「昔のことじゃないですか」

おどおどと返すリークに、バーダックは逆に聞き返した。

「いまはうまくいってると思うか？」

「そりゃあ、フリーザが好きなサイヤ人なんていないけど……」

リークは答えながら、慣れた手つきで船を着陸態勢に移していく。やがて、軽い浮揚感と小さな衝撃があって、船は宇宙港の発着場の外れに着陸した。

バーダックは、座席から立ちあがりながら、こう続けた。

「フリーザも、サイヤ人をそう思ってるはずだ……」

「えっ？」

おなじく立ちあがろうとして、リークがバーダックを見あげ、一瞬固まった。

「いまやフリーザ軍は大きくなった……うっとうしいサイヤ人がいなくても、なんとかなるだろう」

宇宙船の天井部にあるハッチからふわりと舞いあがり、地上に降りたバーダックたちは、そのまま歩きながら話を続けた。

「ま、まさか、オレたちを絶滅させるつもりだっていうんですか!？」

背後からのリークの声に、バーダックは手にしたバッグを、くると跳ねあげ、肩にかけてから、にやりと笑って振り返った。
「もしかしたら、な？」

リークはきよんとなったが、頭をかきながら苦笑を浮かべた。
「いっ、いやだなあ、バーダックさん」

「よう」
聞き覚えのある声に、バーダックは振り返った。

「バーダック！ 生きて帰ってきたか」
そこに立っていたのは、古い戦友のタロだった。

「おい、この召集命令の理由を知っているか？」
タロはかぶりを振った。

「さあな。よほど大物の星を見つけたんじゃないか？ オレたち全員じゃないと、征服できないようなさ」
タロのいかにもサイヤ人らしい考えに、バーダックは小さく肩をすくめてみせた。

「そうか！ それですよ！」
リークが大きくなずく。本当にそうなら、無線で指示すればこと足りることは、さっき船のなかで言ったはずだが。

「そういえば、フリーザ直属の連中が、超サイヤ人について聞き回ってたな」
ふとタロの発したその言葉に、バーダックは足を止め、旧友を振り返った。

「超サイヤ人？ 伝説の、か？」
バーダックのなかの疑念が、確信に変わっていた。
「それだ……」

惑星ベジータ上空に浮かぶ船の上で、フリーザはお付きの科学者であるキコノの報告を受けていた。
戦闘力はないに等しかったが、先代のコルドから仕えてきたこともあって、知識が豊富で、頭が回る種族だった。もちろんフリーザが他人を信用することなどなかったが、キコノは役に立つうえに、見ていても腹が立たないのでそばに置いている。
「超サイヤ人に、超サイヤ人ゴッド……調べましたが、ただの伝説のようですね」
「……そんなことだろうと、思っていましたけどね」

ツボのような形をした、お気に入りのフローターポッドの上で、フリーザはいつものように傲慢な微笑を浮かべていた。
「このわたしには、一抹の不安もあってはならないので、念のためですよ」
「では、攻撃は中止に？」

フリーザは鼻で笑った。
「おっほほ……ご冗談を」
きよんとなるキコノの後ろで、世話役のベリブルが、底意地の悪そうな顔でうなずく。
フリーザは、窓の外に広がる惑星ベジータに目を向けたまま、楽しげな声で続けた。
「せっかく集まってもらっているんですよ？ 星ごと消えていただく、絶好の機会じゃないですか」
邪悪な笑みを満面に浮かべ、フリーザはじっと目の前の惑星に見入るのだった。

「お帰りなさい、バーダックさん」

「おう」

顔見知りからの挨拶^{あいさつ}に手をあげて返しながら、バーダックは自宅への道を急いでいた。

街^{まち}なかは、いつになくどこも賑^{にぎ}わっていた。

バーダックの妻はギネという。商店街にある、肉屋で暮らしを立てている。

その日も、ギネは大きな肉切り包丁^{ばうちょう}を振るい、仕事に精を出しているところだった。

「よう、帰ったぞ、ギネ」

バーダックの声に、ギネがさっと顔をあげる。

「バーダック！」

バーダックは荷物を地面に落とし、駆け寄ったギネを抱きとめた。

「街はずいぶん^かにぎやかだな？」

「ああ、みんな帰ってきてるからね」

ギネはそう答えてうなずいてから、バーダックから少し身を離して、調理用^{はず}の手袋を外した。

「ラディッツは？」

ギネの肩に手を回しながら、バーダックは店の奥に目をやった。

「もう、戦闘員だよ。ベジータ王子と組んで星に行ってる。まだ帰ってきてないけどね」

バーダックの眉^{まゆ}がひそめられる。

「ベジータ王子か……やっかいなヤツと組まれたな」

そうつぶやいてから、バーダックはギネの顔を見た。

「カカロットは？ まだ保育カプセルのなかか？」

その問いに、ギネはうれしそうに笑った。以前のバーダックは、こんなに子供のことを気にかけたりしなかったからだった。

「ああ、もうそろそろ出すけどね。見るかい？」

長男のラディッツ^{くら}に比べると、カカロットは小さい体で生まれてきた子だった。戦闘力も平均より低く、バーダックの見立てでは戦士としての見こみはあまりないように思われた。

「小さいな……」

店の奥^{しつら}に設えられたカプセルのなかで、カカロットは静かに眠っていた。

「成長が遅いタイプみたいだ。でも、あんたにそっくりだろ？ 特に独特な髪型がさ」

だが、カカロットを見るバーダックの表情は、なにか考えこんでいるかのように、ひどく真剣なものだった。

長い沈黙の後、バーダックは口を開いた。

「夜になったらポッドを盗んでくる。こいつを星に飛ばしてやるんだ」

ギネの顔から笑みが消えた。

「ええっ、冗談だろ？」

「いや、本気だ」

ギネに向けた顔から、バーダックが冗談を言っているわけではないことがすぐにわかった。

「なんでいま、わざわざそんなことするんだよ！ まだ、言葉も教えてないのに！」

「どうせカカロットの潜在能力^{せんざい}じゃ、飛ばされる運命だ。だったら、少しでもましな星に飛ばしてやる」
「でも、まだ早すぎるよ……」

言いかけて、ギネは気づいた。バーダックが、気まぐれでそんなことを言っているわけではないことに。
「時間がないかもしれないんだ」
「時間が？」

バーダックはギネにうなずきながら、カカロットに目をやった。
「フリーザは、伝説の超サイヤ人^{スーパー}の出現を恐れている……」

「超サイヤ人^{スーパー}？ そんなの、ただの作り話じゃないか!!」

バーダックは、うなずきながら苦笑を浮かべた。
「ああ。だがヤツは気になってしょうがない。そして、よからぬことをたくらんでいる」
「はあ？」

ギネは、バーダックの言おうとしている意味を察して、小さく驚きの表情を浮かべた。
「オレには、死の予感がするんだ」
バーダックは、そう言いながら顔をあげ、考えこむようにじっと前に目をやった。

その夜、町外れ^{あれち}の荒地を走るふたつの人影があった。
バーダックとギネだった。

「やっぱりようよう、こんなこと」
「心配するな。オレのカン違いだったら、すぐ助けに行ってやる」
個人用のポッドを肩にかついたバーダックが、すぐ後ろを走るギネを振り返る。
ポッドのなかからは、かすかな泣き声とバンバンと手のひらを打ちつける音が聞こえていた。
「だったらさあ、三人でどこかに逃げようよ」
さすがに言うギネに、バーダックはかぶりを振った。
「ダメだ……オレたちは、スカウターですぐに見つかってしまう」
「でも、なんでそこまでして？」
ギネは、バーダックの背中に問いかけた。

「男が子供の心配をするなんて、サイヤ人らしくないよ」
バーダックは足をゆるめて、前を向いたままその問いに答えた。
「いつも戦いのなかでいて、気まぐれでなにかを救いたくなつたのかもな……とくに、下級戦士と判定されたわが子を」
バーダックは肩からポッドを降ろし、すこし寂しげに笑った。
ポッドが地面に置かれ、動きが止まると、なかで続いていた泣き声がやんだ。ハッチにはめこまれた小窓に、カカロットの涙でべたべたになった顔がのぞく。

「地球という遠い星をプログラムしておいた。技術力も、戦闘レベルも低い人間のいる星だ。おまえでも生きていけると思う」
バーダックの言葉が聞こえているのか、カカロットが窓に両手を押しつけ、顔をあげた。

「それに、たいした価値がないので、フリーザ軍に狙われる可能性も低い」
そう言ってバーダックがポッドから身を離すと、入れ替わるようにギネが身を乗り出す。

「バーダックの考えすぎだったら、すぐに迎え^{むか}に行くからね」

「いいか、絶対^い生き延び^のるんだぞ！」

「また会おうね」

バーダックは、ポッドの窓越しにカカロットに向けて手を差し出した。

「じゃあな」

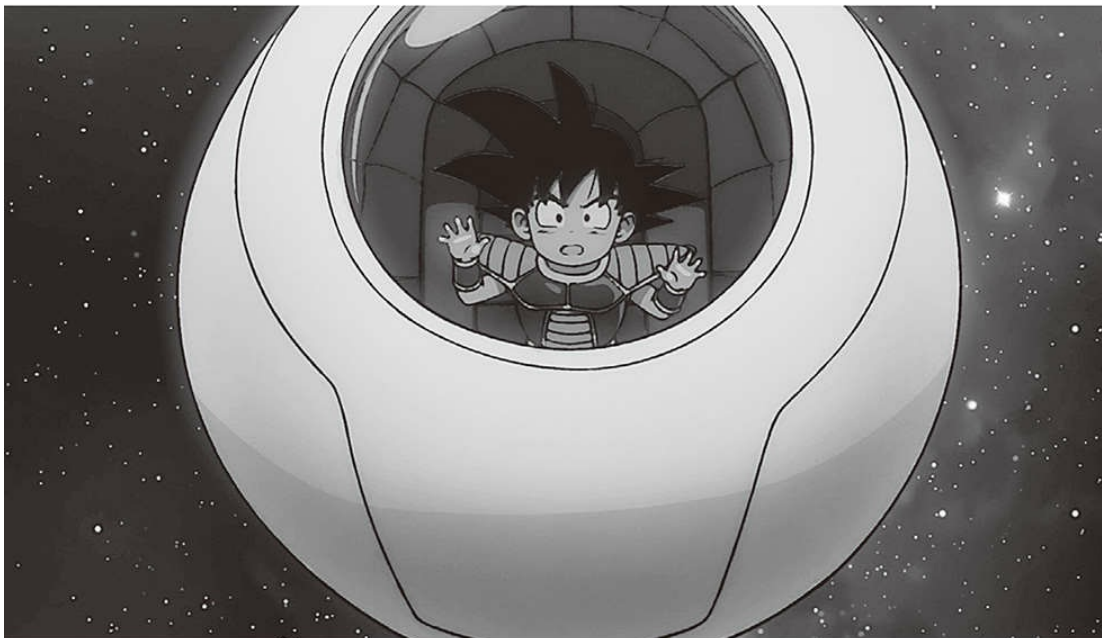
つかの間、カカロットの手とバーダックの手が重^{かさ}なる。カカロットは父親の手をつかもうとするかのように、手を握^{にぎ}りしめた。

ふわり、とポッドが舞いあがった。

最初、空中を漂^{ただよ}うように浮かんでいたポッドは、すこしずつ速度を増し、星空のなかへとまぎれていく。

「カカロットオー！」

DRAGONBALL **S**UPER



ギネはこらえきれなくなったか、すでに光の点になったポッドを追って走りだしていた。

ポッドが輝きを増した。^{すいしん}推進エネルギーを全開にして、一気に加速する。

カカロットを乗せた小型ポッドは、天を横切る流星となって、宇宙のかなたへと消えていった。

「ああ……」

顔をおさえ、くずおれるギネの肩を、バーダックがそっと抱き寄せる。

それからふたりは、ポッドの飛び去った方向をじっと見やるのだった。



フリーザが、サイヤ人に集合を命じた時刻となった。

キコノは惑星ベジータに目をやりながら、神経質な口調で言った。

「サイヤ人がいなくなると、兵力が半減してしまいますが……」

「それぐらい、なんとでもなりますよ。彼らはしかたなく従^{じゆうじゆん}順なふりをしていますが、いつ牙^{きば}をむくとも限りません」

キコノは、驚いた顔でフリーザを見あげた。

「なんといっても、戦闘民族ですからね……ホコリが舞いあがる前に、お掃除^{そうじ}しておかねば」

フリーザの船の上部にあるハッチが、ゆっくりと開いていく。そのなかから姿を見せたのは、フローターポッドに乗ったフリーザだった。

目を細めて惑星ベジータをながめていたフリーザは、悪意をこめた笑みを浮かべたかと思うと、人差し指を立てた右手をゆっくり持ちあげた。

その指先に、小さく、まばゆい光^{とも}が灯る。そうして、指先が高く差しあげられるとともに、指先の光は、突然その大きさを何倍にも増していった。

フリーザの作り出した巨大な光球^{こうきゆう}は、惑星ベジータの地上からもはっきり見えるほどだった。

それがどういふものか、サイヤ人たちは最後の瞬間まで理解することができなかった。

その、おぞましい力^{かたまり}の塊の前に、バーダックはいた。

いまや視界の大半を占める大きさになった光球が、ゆらりと動いた。と、それは見る間に加速して、惑星ベジータに迫ってくる。

見ただけで、体がすくみあがりそうなエネルギーがそこにあった。

だが、バーダックは不思議^{ふしぎ}に落ち着いていた。

「おおおおおおおおお!!!」

全身の力をかき集め、渾身のエネルギーを両手にためていく。

あの光球を撃ち抜いてやる。

バーダックは、上下に合わせた両手のひらを、獣の吠え声にも似た気合いとともに、一気に前へと突き出した。

「はあっ!!」

轟音とともに解放されたエネルギーは、光の束となってフリーザの放った光球へとまっすぐに向かった。

短い間があった。迫る光球の表面に、一瞬、輝きが広がる。

だが、それはまさに一瞬のことだった。まがまがしい光の球は、バーダックのエネルギーを飲みこんで、そのまままっすぐ向かってきた。

バーダックは、目の前に迫ったエネルギーの塊を、両腕を広げて受け止めようとした。

とたん、すさまじい力がバーダックの全身に襲いかかる。

「ぐ……ぐああああああ!!!」

すでに力を使い果たしていたバーダックは、長くそれに耐えることはできなかった。

襲いかかっためちゃくちゃな力の奔流に押し流され、バーダックは、光のなかにその姿を消していった。

フリーザは、惑星ベジータが、自らの放った光弾によって消滅していくさまを、宇宙船の上からながめていた。

中心核を撃ち抜かれ、形を保てなくなった巨大な惑星が、ゆっくり崩壊していく。やがてバラバラになった惑星の破片が、爆発の閃光とともに飛び散るのを見届けると、フリーザは満面に笑みを浮かべた。

「これですっきりしました」

フリーザのスカウターには、惑星ベジータ全体の戦闘力数値が表示されていた。それは惑星が崩壊すると同時にみるみる減少し、そして警告音とともにゼロとなった。

そこは、惑星ベジータから遠く離れた戦場だった。

「なんだって!？」

サイヤ人のナッパは、仲間のひとりがスカウターに手を当て、驚きの声をあげるのを聞いた。

「どうした？」

「フリーザ軍から連絡が……惑星ベジータに隕石が衝突して……しょ、消滅したと」

「な、なんだと!？」

驚きを隠せないナッパの隣で、別の仲間が天を仰いだ。

「ほとんどのサイヤ人は、全滅ってことか……なんで隕石の接近がわからなかったんだ」

ベジータとラディッツは、少し離れた場所で、大人たちの話を聞いていた。

「ラッキーだったっすね。オレたち、フリーザの集合命令を無視して」

ラディッツの言葉に、果物をかじっていたベジータは、不機嫌そうに吐き捨てた。

「ちっ……ベジータ王になりそこなったか」

「ベジータ、弟がいただろ」

ナッパが、ベジータたちのもとに近づいてきた。

「そーいやあいつ、どうしたんだろうな。ま、興味もないが……」

仲間のひとりが、ラディッツを見る。

「ラディッツにも弟が」

「へん……あいつは下級戦士って判定だったから、家庭用の育児カプセルのなかですよ。みっともない」

ラディッツはそっけなかった。

ナッパが、他の仲間たちと顔を見合わせる。

「あっ……母さんから、ポッドで飛ばされたって連絡があったか……どうでもいいっすけどね」

ラディッツはそう言いながら、ついでに片づけた異星人たちの死体を見回す。

「ふん」

ベジータは空を見あげ、つまらなさそうに鼻を鳴らした。

カカロットを乗せた小型ポッドは、はるかな距離を飛び越え、地球へと到着しようとしていた。

それからいくつもの出会いと別れ、そして戦いがあり——地球で悟空と名づけられたカカロットと、ベジータ、そしてフリーザたちが会おうまでには、それからさらに長い歳月が必要となった。

そして、すべての始まりから数えて四〇と一年の後。

一二の宇宙を巻きこんだ、『力の大会』が終わってしばらくたったある日、西の都から南にはるか離れた孤島から、物語の続きは始まった。



其^{その}之^の三^{さん}

フリーザ^{ふた}再び

DRAGONBALL SUPER





「だりゃっ！」

悟空の気合いとともに、空気を切り裂く鋭い音が、立て続けに響く。

同時に、ベジータの息吹があたりを震わせた。

「はあああっ！」

近くの浜辺から、爆発したように砂が舞いあがる。ひとつ、ふたつ、みっつ。四つめからは水柱に変わって、さらに沖へと続いていく。

その水柱を吹き飛ばしながら、からみ合うふたつの影が、疾風のように海の上へと移動していった。

ドン、ドドンとなにかが破裂するような音とともに、空中で白濁する空気の球がいくつも生まれ、消える。わずかに遅れて、静かな海面が大きくえぐられたようにへこみ、それがいくつも形作られて、まるで嵐でもきたかのように大きな波が生まれ、砂浜に叩きつけてきた。

ブルマは生まれて間もない娘、ブラを乗せたベビーチェアの隣に座って、ふたりの手合わせを慣れた顔で見あげていた。

ブルマと破壊神ビルス、そしてその付き人のウイスは、テーブルや椅子、サマーベッドまで持ち出して、新築の別荘の前でくつろいでいるところだった。

「はぁ～、食べ物、空気！ほんと素敵すぎる別荘です！」

ウイスは特別製のケーキに舌つづみを打ちながら、うっとりと言った。

ひょろりと背の高い、すこしなよとしたこの人物が、宇宙最強の破壊神よりさらに強いとは、いまだに信じられなかった。それでも、ウイスが時間を巻き戻したり、星の爆発から助けてくれたりしたことを考えれば、まあウソではないのだろう。

「ねえ？ブルマさん」

同意を求めて無邪気な笑顔を向けてくるウイスを、ブルマは自慢げな表情で見た。

「いいでしょ～」

ビルスは、ブルマたちと並んで、サマーベッドの上で横になっていた。見た目は猫型の異星人だが、彼は破壊神——鼻歌まじりに星を吹き飛ばす力の持ち主だった。

「……………」

どうやら、悟空たちの戦う音がカンに障るらしい。ビルスはもともと、いつも不機嫌顔なのだが、今日は特に機嫌が悪そうに見えた。

ビルスが見あげた先では、悟空とベジータの修業がさらにエスカレートしていた。

「だあっ！」

ベジータの一撃が、ついに悟空をとらえていた。かわせない^{さと}と悟った悟空は、腕を頭上で交差させて、ベジータが振りおろす^{うで}腕を受け止めた。

ベジータが突き放すと、悟空はそのまま後方へ飛んで、不意をつくように突然空中でブレーキをかけた。すかさず^{こぶし}拳を打ちこんでくるベジータを、ぎりぎりまで引きつけて、攻撃を止められないところで見切ったかわす。

ベジータはその勢いのまま、海へと突っこんでいった。

水柱をあげて水中に消えたベジータを追って、悟空が波立つ水面^{お た}に降り立つ。そこへ、水中に身を隠していたベジータが飛び出してきた。

水の上^{すべ}を滑るような動きで拳を打ち合わせる悟空とベジータは、はたから見てもひどく楽しげに見えた。

「何年も前から作っていたのよ」

立て続けにあがる水柱をにこにこながめながら、ブルマが続けた。

「西の都から南に一六〇〇キロ、このなんにもない島なら、すこしくらい暴れても大丈夫」

沖で、特大の水しぶきがあがった。ブルマはそれを見ながら、苦笑^{くしやう}ぎみに肩をすくめて見せた。

「あいつら、そのうち西の都^{こわ}を壊しかねないからね」

ふたりは激しく打ち合っていた。かわす動きを捨てて、ひたすら渾身の攻撃を叩きこむ。まともにくらえばただではすまない一撃ばかりだったが、悟空とベジータは、互いの攻撃を受けきることをまるで楽しんでるかのよう^{く かえ}に繰り返している。

「はああっ！」

水面すれすれまで身をかがめたベジータが、悟空に向かって伸び上がるようにアッパーを叩きこむ。

「ぐあっ」

すさまじい勢いで後方に吹っ飛ぶ悟空だったが、気合いとともに空中で動きを止め、前に飛び出しながら、攻撃^{はな}を放ったばかりで無防備な状態のベジータに、全力の蹴^けりを打ちこんだ。

「ぐおっ!!」

派手^{はで}に水切りの波をたてながら、ベジータが後ろに吹っ飛んでいく。

浜辺に、雨のように水しぶきが降ってきた。

「があああああっ!!」

ビルスだった。ベッドから立ちあがり、どかどかと足音を響かせながら浜辺に歩いていくと、肩をいからせて大声で叫んだ。

「うるせ——っぞ!!!」

次に向けて身がまえあっていた悟空とベジータは、キレたビルスの声に思わず動きを止めた。

「もうちょっと!! 静かに戦ええっ!!」

こめかみに血管を浮かびあがらせたビルスが、バンバンと足^{ふ な}を踏み鳴らした。

結局、そこで今日の修業は終わりになった。

「はーらへったー！」

席に着くなり、悟空は出されたスイーツを、いつものようにガツガツとほおばりはじめた。

「修業のあとは腹減^{はら へ}ってしょうがねえ。それにしてもうめえな、これ」

「ところで悟空さん」

ウイスだった。彼は食事の手を止め、細めた目で悟空を見た。

「なぜ、これ以上の強さを求めるのですか？」

ベジータは、その時ひとり離れて海を見ていた。それが、ウイスの言葉に反応したか、悟空たちのほうに向き直る。

ウイスは続けた。

「もしかして、破壊神の座を狙っているのでは？」

「ん？」

悟空はもぐもぐと口を動かしながらも、顔をあげてウイスを見た。

「なんだと？ それは聞き捨てならんな」

ビルスが身を起こし、悟空を見る。

声は不機嫌そうだったが、不思議に表情はさっきよりもましに見えた。というより、どこか興味深げにも感じられる。

「違うよ～」

悟空は、ビルスに向かってあわてたように両手を振って、席から立ちあがった。

「なりたかねえって、そんなの」

「そんなので悪かったな」

とたんにビルスが不機嫌な顔に戻る。

悟空は席を離れ、ベジータの立つ方向に歩きだしながら、言った。

「このまえの全宇宙の大会でさ、他の宇宙にはまだとんでもねえヤツがいるってわかったから、オラ燃えてんーだっ！」

その言葉と同時に、悟空の髪の毛が金色に変わり、音を立てて全身から気が噴き出した。

ベジータが鋭い視線を向ける。

「きさまの目は、すでにほかの宇宙に向いているってことか……」

そう言ってから、ベジータはムスツとなって横を向いた。

「あいかわらず、おめでたいヤローだ」

悟空が超サイヤ人を解く。同時に、今度はウイスがベジータにたずねた。

「では、ベジータさんは、なぜこれ以上の強さを求めるのですか？」

「フリーザだ！」

ベジータは、悟空を押しつけて身を乗り出した。そうして、悟空に向かって指を突きつける。

「ここにいるバカヤローが、よりによってあんな悪魔を復活させやがったからな!!」

「なんだよ、フリーザがいなかったら、オラたちの第七宇宙はなくなっちまったかもしれねえだろ」

口をとがらせて言い返す悟空に、ブルマが驚いた顔を向けた。

「あら、そうなの？」

「ああ、あいつに助けられた」

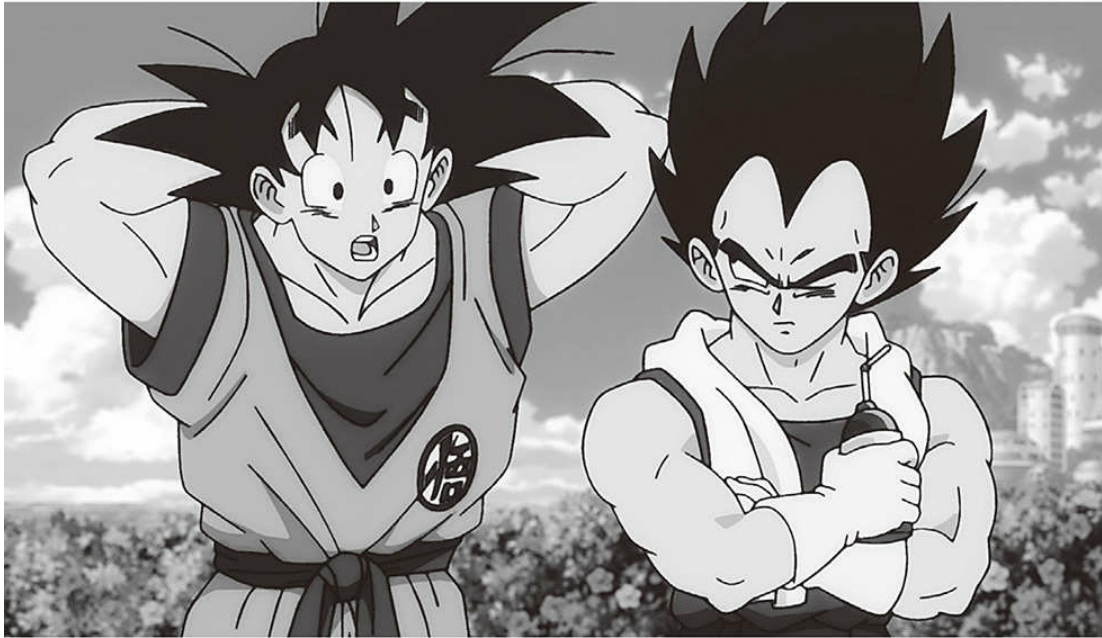
うなずく悟空の横で、ベジータが吐き捨てる。

「バカめ!! あれは、自分のことを考えてやっただけだ」

ベジータの脳裏に、金色に輝くフリーザの姿が浮かんでいた。

「このまえ、地球にやってきたフリーザを見ただろう。ヤツは、短期間でそこまで仕あげてきた……」

DRAGONBALL SUPER



「さらに力をつけて、またオラたちを倒し^{たお}に来るっていうのか？」

「間違いくな」

顔をしかめて答えるベジータに、悟空は首をかしげ、間延^{まの}びた声で言う。

「そうかなあ？ 生き返らせてやったのに？」

ベジータは悟空に向き直り、口から泡を飛ば^{あわ}して怒鳴^{どな}った。

「バカめ！ あいつが、そんなことで恩を感じるとでも思っているのか!!」

ベジータの勢いにたじたじとなりながら、悟空も不満げに返す。

「おめえ、何回バカって言うんだ？」

ベジータのなかで、なにかブチンと切れた音が聞こえた。

「何度でも言ってやる!! ヴァアアアアカアアア!!」

いつもどおりの微笑^{ほほえ}ましいやりとりを見ていたブルマは、腕の通信機がアラーム音を鳴らしていることに気がついた。

「トランクスだ」

ブルマが腕時計型の通信機をのぞきこむと、息子^{むすこ}のトランクスの顔が小さなスクリーンにあらわれた。後ろで飛び跳^とねてい
るのは、悟空の次男^{こてん}の悟天のようだった。

「なに？」

『研究室に泥棒が入ったみたいだよ』

「えっ？ なにを盗られたの？」

『監視カメラを見ってみるね』

トランクスは、腕の通信機を操作して、監視カメラからの映像を映^{うつ}し出^だした。明らかに室内は荒らされていて、あちこちに
物が散らばっている。

『えっと……』

タイムバーを操作して、映像を過去にもどす。トランクスは、荒らされる前の研究室までさかのぼってから、現在の映像と比
較した。即座に画面が解析^{かいせき}され、その場にはないものの輪郭^{りんかく}が表示される。

『ママが集めていたドラゴンボールと、ドラゴンレーダーだね』

「なんですってー！」

ブルマは、通信機に顔を向けたまま、そう叫んで突然立ちあがった。

『うわっ!!』

画面の向こうのトランクスと悟天が、驚いてのけぞった。

「だから言っただろ。おまえはセキュリティが甘いんだ」

ブルマの横へ来て、通信機のスクリーンをのぞきこんでいたベジータが、しかめっ面^{つら}でそう言った。

『あのね、ママ』

通信機の向こうから、トランクスが言った。

「ん？」

『映^{うつ}ってた犯人^{うつつ}なんだけど』

言いながら、トランクスは画面を監視カメラの録画に切り替えた。

『パパみたいな服を着てるよね』

そこに映っていたのは、天井からロープ^{つた}伝いに降りてくるふたつの人影だった。顔を隠そうとしているのか、ほおかむりのようなものをしているが、身につけている戦闘^{せんとう}服は間違いなくフリーザ軍のものだった。

「あっ!!」

ブルマとベジータが、同時に声をあげた。

ブルマとベジータが目を合わせ、うなづく。事情が飲みこめならしく、悟空はひとりきょんとした顔でふたりを見た。ベジータが、イラついた顔で悟空を見る。

そんなふたりに苦笑^{くしょう}しながら、ブルマは通信機に向かった。

「サンキュー、トランクス」

『へへ』

ブルマの声に、スクリーンの向こうでトランクスがにこにこ手を振った。そのまま、画面が消える。

ベジータは、悟空に目をやった。

「犯人はフリーザ軍だな……オレたちに気づかれないように、わざと戦闘力の低い連中を使ったんだ」

「フリーザのヤツ、しつこくドラゴンボールを狙^{めが}ってたんだ……」

ブルマが厳^{まじ}しい顔でつぶやく。

「あいつ、いまさらどんな願いがあるんだろ」

悟空は腕組みをして、眉^{まゆ}をひそめた。

「神龍^{シエンロン}の力を超える願いはできねえから、宇宙一強くしてくれっなのは、無理だし……」

「決まってるだろ、あいつの願いは死なないことだ」

ベジータが、なにを言っているという調子で悟空を見た。

「でもさあ～、死ななくても負けたら意味ねえだろ」

「それでもあいつは、いつかオレたちを超える可能性がある!!」

悟空はあいかわらず危機感のない顔で、首をかしげた。

「そっかあ？」

ベジータはさらになにか言おうとしたが、悟空をにらんだまま黙りこんだ。

「あたしが持っていたドラゴンボールは六個よ。最後の一個を求めて、その場所に行くはずだわ」

ブルマの言葉に、ベジータがさっと顔を向ける。

「どこだ？」

「氷の大陸よ。寒い^{にがて}の苦手だから、後回しにしてたの」

「氷の大陸？」

すぐ後ろから首を突き出す悟空に微笑^{びしょう}を返ししながら、ブルマはウイスとビルスを見た。

「あなたたちも行く？」

「ふん、ボクは昼寝をする」

ビルスはブルマを見返してから、腕枕をしてベッドに横になった。

「ああら、面白^{おもしろ}そうじゃありませんか」

ウイスが言うと、ビルスは横になったまま片目を開けた。

「うまいものあるか？」

ブルマが、肩をすくめて答える。

「それは期待できないわね」

「じゃあ、やめとく」

「よかったあ〜。じゃあ——」

ブルマはブラを抱えると、手早く抱っこヒモに乗せてから、ビルスの肩に結びつけて言った。

「ブラの面倒見て!!」

赤ん坊を抱えて呆然と見あげる破壊神を尻目に、ブルマたちを乗せた小型ジェットが上昇していく。

「よっろしくねー！」

「おっほほほ、行ってきまーす」

頭上から、ウイスの楽しげな声が響く。

「おい！ こら———!!」

上機嫌のブラにまといつかれながら、ビルスは飛び去る小型ジェットに向かって握った拳を振り回した。



「氷の大陸は寒いわよ〜」

ジェットの操縦席で、ブルマが陽気な声をあげた。

「途中で防寒着を買わなきゃ」

「なんでブルマは、ドラゴンボールを集めてたんだ？」

貨物スペースであぐらをかいて座っていた悟空が、突然そうたずねた。

ブルマはしばらく黙ったあと、不機嫌そうに言った。

「うるさいわね……」

「教えろよー」

悟空はしつこく聞いてきた。

短い間のあと、ブルマはきまり悪げに答えた。

「若返ろうとしたのよ……五歳くらいね……」

「そんなくだらねえことで、ドラゴンボールを!？」

驚いて立ちあがる悟空を、操縦席から振り返ったブルマが怒鳴りつけた。

「やかましい!! あんたたちサイヤ人にはわからないわよ！」

ベジータといえば、自分は関係ないという顔で悟空のいる貨物スペースの反対側に座っていた。それが、若返りの話を耳にして、ちらとブルマに目を向ける。

「ふん……」

それから不機嫌そうに鼻を鳴らし、ベジータはむつつりと目を閉じた。

イライラと操縦桿^{かん}を握るブルマの顔を、副操縦席のウイスがのぞきこむ。

「なんで五歳なんですか？ どうせならもっと——」

「一気に若返ったら不自然でしょ！」

ブルマはふくれっ面^{つら}で前を向いた。

「きっと言われるわ……あら、ブルマさん、急にお若くなったんじゃない？ もしかして整形かしらー、とかね」

悟空が笑った。

「さてはおめえ、ちょくちょくドラゴンボール使ってんな」

ブルマは冷たい目で悟空を振り返ると、いきなりジェットのスロットルを全開にした。

「うわっ!!」

突然の加速に、完全に無防備だった悟空が思いつき後ろに吹っ飛んでいく。荷物の山に突っこんで、崩れた山^{くず}のなかから驚き顔の悟空が首を突き出した。

「あはははははは」

楽しげに笑う悟空の顔を見て、ベジータはむすっと横を向いた。

「フリーザさま」

司令室に入ってきたキコノが、司令席のフリーザの横に立ち、報告した。

「ベジータの妻が、ドラゴンレーダーとともに、すでに六個ものドラゴンボールを所有していたようで。それを入手し、最後の一個を求めて現在向かっているようです」

フリーザは、微笑を浮かべてキコノを見おろした。

「それはすばらしい報告ですね」

「では、地球に向けて船を発進させましょうか？」

「いえ。七個すべて見つかったからでいいでしょう」

フリーザは正面に向き直り、答えた。

「あせって到着するのは危険ですよ。ヤツらはスカウターがなくても、高い戦闘力の接近がわかるようですから」

「わかりました」

なるほどとうなずくキコノに、フリーザは続けて言った。

「願いのかなえ方は、メモしてありますね？」

「はい、抜かりなく……ところで——」

「なんですか、キコノ？」

キコノは恐縮して身を縮めながら、おそろおそろたずねた。

「その……ドラゴンボールが集まったとして、フリーザさまはどのような願いをかなえられるおつもりなのかと……。以前から言っ

ておられた、不死身^{ふじみ}の肉体ですか？」

フリーザは機嫌がいいらしく、答える声に苛^{いら}立ちは感じられなかった。

「ほーっほっほっほ。違いますよ」

「え？」

意外そうな表情を浮かべるキコノから窓の外に視線を移して、フリーザは静かに続けた。

「地球の地獄というところで、動けなくされてわかりました。死ななくても動けないんじゃ、苦痛なだけだと……」

話すうち、フリーザの眉^み間に深くシワ^{きざ}が刻まれていく。よほど嫌^{いや}な経験をしたらしい。

「では……たとえば、ダメージを受けないとか」

フリーザは、かぶりを振りながらふたたびキコノを見た。

「それじゃあ、ゲームが面白くなりません」

キコノは、顎^{あご}に指を当てて考えこんだ。

「うーん……なんでしょう……」

フリーザは愉快^{ゆかい}そうに笑った。

「ほほほほ、当たりませんよ」

そこで口を開いたのは、それまで黙^{かたむ}って話に耳を傾けていたベリブルだった。

「身長^のを、伸ばしたいのでございましょう？」

世話役の老婆を振り返ったフリーザは、大きく目を見開いていた。

キコノは顔を青ざめさせ、思わず身を引いていた。

「べ、ベリブルさん!! なんてことを……」

だが、ベリブルは平然と、変わらぬ口調でこう言った。

「陰^{かげ}でフリーザさまをチビと言っていた兵士を、何人も消されていますからねえ」

フリーザは、引きつった苦笑を浮かべ、ベリブルから顔をそむけるようにしながら答えた。

「さすがですね、ベリブルさん。正解です」

「えっ、正解なんですか!？」

驚きのあまり身を乗り出すキコノに、フリーザは笑みを消した顔を向けた。

「誰にも言わないと、約束できますか？」

「も……もちろんです！」

キコノは、ちぎれそうな勢いで首をタテに振った。

フリーザは、少しきまり悪げな顔で、指を五本立てて見せた。。

「身長を、五センチ伸ばしたいんです」

「えっ……で、でしたら、第二形態あたりの変身のままであれば、十分な身長が——」

「いいえ、わたしは、普段^{ふだん}や最終形態で大きくなりたいんです」

フリーザの顔は、真剣そのものだった。

「では……なぜ、わずか五センチ……」

フリーザは、キコノをにらむように見おろす。その顔には、汗が浮かんでいた。

「一気に大きくなったんじゃ、不自然でしょ!!」

キコノは、フリーザの頬^{ほお}のあたりが、ちょっぴり赤く染まっているような気がしたが、賢明^{けんめい}にもそれは口にしなかった。

「まだ成長している感じにしたいんです」

「な……なる……ほど……」

キコノには、それだけ答えるのがやっとだった。

へんきよう
辺境の宇宙を飛ぶ宇宙船があった。

フリーザ軍の所属を示すマークのついたその船には、緑色の肌をした白い髪^{はだ}の少女と、赤い肌のひよろりとした老人が乗っていた。

「こんなところ、誰もいねえって」

窓から浮遊する岩をながめながら、少女——名前をチライという——がぼやく。

「ましてや、最低でも戦闘力ー〇〇〇のヤツなんて、なかなかいないぞ」

「しょうがないだろ。軍の再生のために、ひとりでも多くの戦闘員を探してこいって命令だ」

赤い肌の老人——レモが、操縦席から振り返りもせず答えた。

「戦闘員、いっぱいいたんだろ？」

チライの声に、レモはかぶりを振った。

「ウワサじゃ、ふがいない戦いをしたから、フリーザさまに全員殺されたらしい」

「なんだよ、それ」

「チライ、おまえはなんでフリーザ軍に？」

レモの後ろの座席に座りながら、チライが答える。

ぎん が
「銀河パトロールの宇宙船を、盗んだのがバレちゃってさ。フリーザ軍なら、ヤツらも手を出さないだろ？」

あき あお
レモは、呆れ顔で小さく天を仰いだ。

「クズだな」

「まあね～」

悪びれもせず、チライは笑った。

「レモさんは、ずっとフリーザ軍だったんだろ？ 会ったことあるのか？ フリーザさまに」

レモは肩越しにチライを振り返った。

「オレは戦闘員じゃない。ステーションで見かけたことがあるだけだ」

チライは身を乗り出した。

「ちっちゃいらしいね」

レモは目をむいた。

「二度と、そのことを口にするんじゃないぞ。生きていたいんならな」

レモの言葉から、ただならぬものを感じたチライは、神妙^{しんみょう}な声になって答えた。

「わかったよ」

くさ
「息が臭^{くさ}いだけで、殺されたヤツもいるんだぞ」

言葉だけなら冗談にも思えたが、レモの口調は真剣そのものだった。

「しかし、じいさんと女を使うようじゃ、フリーザ軍もそろそろヤバイかもね」

その時だった。

船内に、アラーム音が響いた。チライが、驚いてあたりを見回す。

「え……なんだ？」

レモはモニターに表示されたメッセージに目をやった。

「救難信号だ……しかも、ずいぶん古いタイプのフリーザ軍の信号だぞ」

チライもモニターをのぞきこむ。メッセージの発信先が特定され、表示された。

「あそこに見える星だ……」

チライがさしたのは、窓の向こうに浮かぶ荒廃した小さな惑星だった。

「助ければ、特別ボーナスがもらえるかもしれんぞ」

「おおー！」

チライがガッツポーズで身を乗り出す。

レモはチライをちらと見上げてから、前を向いて操縦桿を握りなおした。

「よし、さっそく行こう」

降下する宇宙船に気づいたのは、パラガスだった。

歳をとっていた。サイヤ人は長い間若い肉体のままで生きる種族なのだが、それでも、パラガスにとって四〇年あまりの時間は、十分に長かった。

言葉にならない声をあげながら、パラガスは洞窟から飛び出した。

この数年、めっきり衰えたと思っていたが、どこにそれほどの力が残っていたのか、パラガスは全盛期を思わせる速度で、宇宙船の着陸地点まで駆け抜けていた。

「お……おお……!!」

宇宙船は幻ではなかった。難破したパラガスの宇宙船のそばに、たしかに実体のある船が着陸して、なかから人影が降りてくるのが見える。

「フリーザ軍か！ ——うわっ!!」

パラガスは手を振りながら、あらん限りの声で叫んだ。あまりに相手の注意を引くことに気を取られたため、岩の裂け目に足を取られてしまうほどだった。

「!？」

帽子をかぶった赤い肌の人影が、パラガスに気づいて銃を向けるのが見えた。彼は近くにいた緑の肌の人影に声をかけ、パラガスのもとに向かってくる。

銃を構えたまま、警戒するように岩場を越えて近づいてくる帽子の男は、起きあがろうとするパラガスから伸びるシッポを見て、驚いたように立ち止まった。

「それ、シッポか……？ あんた、ま、まさかサイヤ人か？」

男の声に、緑の肌の女が反応した。

「……サイヤ人？」

「ああ……オレはパラガス。フリーザ軍のサイヤ人だ」

パラガスはなんとか自分を落ち着かせながら、ようやくのことでそう言った。

帽子の男がげげんそうにたずねる。近くで見ると、かなりの年齢のようだった。

「救難信号は……」

「ああ、オレだ。宇宙船が故障したんだ」

女が、スカウターのボタンを押すのが見えた。

それにかまわず、パラガスは続けた。

「信じられないほど、長く待ったぞ……やっとな……助かった……」

パラガスの言葉を無視して、女が声をあげた。

「戦闘力四二〇〇……！ いいぞ」

男のほうは年寄りだったが、逆に女のほうは子供と言ってもいいほど若く見えた。

「あんたひとりか？」

たずねる男に向かって、パラガスは背後を振り返りながら答えかけた。

「いや、もうひとり……」

そこまで言ったところで、突然、パラガスの古い宇宙船が大きく揺れた。

パラガスは内心舌打ちした。大ダニが近くにいる可能性をすっかり忘れていたからだだった。

「う、うわああー！」

目の前のダニが、例の吸血用の針きゆうけつを突き出すのが見えた。

パラガスは叫んだ。

「ブロリー——！」

その声からわずかに遅れて、はるか遠くでなにかが爆発したように見えた。さらに数瞬のあと、弾丸のように飛んできたものがあった。

ブロリーだった。

四〇年あまりの歳月を経て、すっかり大人へと成長していた彼は、そのままの勢いで、大ダニの一体を蹴り飛ばした。

巨大な怪物が、軽々と吹っ飛んで岩場に激突する。鎧のような体表を砕かれ、にごった体液をまき散らしながら大ダニはバタバタと暴れ、やがて力つきて動かなくなった。

ブロリーは、敵が動かなくなったことを確かめると、三人の目の前に降り立った。

穏やかな顔の青年だった。髪の毛は伸び放題、上半身はむき出しで、ボロボロのズボンの上には、汚れた緑色の毛皮が巻きつけられている。

パラガスは、その隣に立って、満足げな表情で言った。

「オレの息子……ブロリーだ」

パラガスと名乗った男の言葉を無視するように、チライはブロリーにスカウターを向け、ボタンを押した。ピピピピと、計測中を示す音を響かせて、スクリーンに浮かんだ数値が猛烈な勢いでカウントアップしていく。

「うっそ……そんな……」

やがて数値は上限に達し、エラー音とともに計測不能というメッセージが表示された。

「なんだ？」

驚きのあまり体を震わせるチライに、レモが声をかける。

「せ……戦闘力が計測できねえ」

「バカな、そんなことはありえな——」

ボタンを押しこんだままの格好で、レモは言葉^{かつこう}を失った。それから短い間をおいて、パラガスたちに向き直り、身を乗り出すようにこう言った。

「乗ってくれ！ フリーザさまがお喜びになるぞ！」



レモたちの宇宙船が、惑星バンパを飛び立ってしばらくしてのことだった。

携帯食料を取り出して食べはじめたチライは、自分をじっと見つめるブロリーに気がついた。

「え……つと」

まっすぐに自分に向けられるブロリーの視線に、居ごちの悪さを感じて、チライはとっさにこう聞いていた。

「なんて言ったっけ、あんた」

ブロリーはチライの手もとにまっすぐ目を向けたまま、不思議に気だるげに見える表情で答えた。

「ブロリー……」

チライは、そこでようやく、ブロリーが見ているのは自分の手のなかの食べ物だということに気がついた。

「これ、食うかい？」

チライは、膝^{ひざ}の上にあった手をつけてない食料を取りあげ、ブロリーに差し出した。

「ブロリー、うまいぜ、ほら」

ブロリーはぼんやりと食料を受け取り、そして、中身を包んでいるフィルムごと口に運ぼうとした。

チライはあわてて身を乗り出し、ブロリーの手から食料を取りあげた。

「おわ！ 包みを破くんだよ！」

チライは音を立てて包みを破り、ふたたび差し出す。

ブロリーは、目の前の棒状に固められた食料を、不思議そうにながめた。

「いだけ」

パラガスの言葉に、ふんふんと匂^{にお}いをかいでいたブロリーは、チライの手からもぎ取るようにして食料を受け取った。

狭い船内に、がらがらとかぶりつく音^{せま}が響く。

「ははっ、どうだ、うまいだろ？」

ブロリーは、チライの声がまるで耳に入っていないかのように、食料を口に放りこんでいた。

「なんだ、礼もなしかよ」

^{あき}
呆れ声でチライが言うと、パラガスがむっとりとうながした。

「おれを言うんだ、ブロリー」

その声にはっと顔をあげ、ブロリーがチライを見る。そうして、ちらちらとパラガスに目をやりながら、小さく頭を下げた。

「ありがとう、ございます」

「固いな」

チライはそう言って、親指と人差し指で輪を作り、残りの指を立てながら、ブロリーの目の前に差し出した。

「サンキューでいいよ」

ブロリーは、食事を忘れたかのように、ぼんやりとチライの顔を見返した。

「サ……サンキュー」

^{ふ き よう}
そして不器用そうに、チライの指の^{ま ね}真似をする。

「おう」

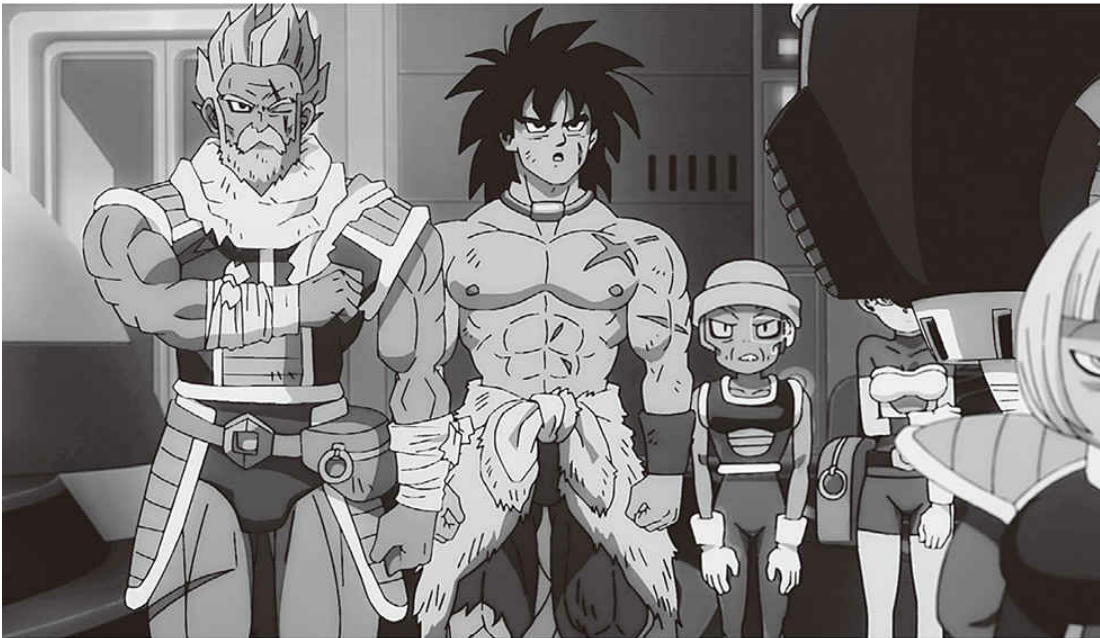
チライは、笑みを浮かべてブロリーを見た。

長い飛行の末、ブロリーたちを乗せた宇宙船は、ようやくフリーザのいる艦隊のもとに到着していた。

「お連れしましたよ、フリーザさま」

ベリブルの声に振り返ったフリーザは、ブロリーの姿を見て感嘆^{かんたん}の声をあげた。

DRAGONBALL SUPER



「ほおお……あなた、本当にサイヤ人ですか？」

ブロリーは、もの^{めずら}珍しそうに、しきりと司令室のなかを見回していた。

「シッポがないようですが……」

「はい、サイヤ人の特徴である、大猿^{おおざる}に変身する影響で、われを失ったことがありまして……それで、わたしがシッポを」

部屋のなかに浮かんでいるフリーザのポッドに興味を持ったらしく、しきりにつついているブロリーを横目で見ながら、パラガスが腰を折り、深く頭^{こし}を垂れる。

ブロリーが、短い間とはいえ、たったひとりあの環境で生き残ることができたのは、バンパの月を見て大猿に変身したおかげだった。

とはいえ、ブロリーが変身した大猿は、とてもパラガスの手に負^おえるものではなかった。何度か死にそうな目にあいながら、パラガスはブロリーのシッポが再生するたびに切り落としてきたのだった。

「以後はありましたか？ われを失うことは」

「はい、めったには……」

パラガスの答えに、フリーザはピクリと片方^{まゆ}の眉をあげた。そうして、目を細め、静かにたずねる。

「ということは、たまにあるのですね？」

パラガスはあわてて、ベルトにつけたポーチをまさぐった。

「ご、ご安心ください。その場合は、このリモコンでブロリーの首につけている輪に電流が流れます」

パラガスがリモコン^{かか}を掲げる。それを見たブロリーが、おびえた声^もを漏らしながらあとずさった。

そうして、ブロリーは、首にかかった輪に手をかけ、引きちぎろうとするように何度も力を込める。だが、その首輪はびくともしなかった。

「強い電流ではありませんが、抑制^{よくせい}はできます」

ブロリーのおびえ方から見て、パラガスが言うようなものではないことは容易^{ようい}に想像がついた。

そばで見ていたチライとレモは、眉をひそめて顔を見合わせた。

「なるほど……」

フリーザは、ブロリーに近づいて、下から見あげながらたずねた。

「あなた、お名前は？」

「……」

ブロリーはぼんやりとフリーザを見おろしたが、パイと横を向いてしまった。それ以上目を合わせようとしないブロリーのかわりに、パラガスが答える。

「ブロリーでございます」

ブロリーは、心ここにあらずといった雰囲気^{ふんいき}で、不思議そうにあたりを見回している。

そのようすを見つめていたフリーザは、ひとつうなずいてからつぶやいた。

「まだ、とてつもない戦闘力を秘めていますね……」

「かならずや、フリーザさまのお役に立てると確信しております」

パラガスを無視するように背を向けると、フリーザは窓の前にもどって小さく笑った。

「これは思いがけない収穫です。ベリブルさん、見つけたおふたりに報奨金^{ほうしょうきん}を差しあげてください」

レモとチライは、手渡された報酬^{ほうしゅう}の量を見て、驚きの声をあげた。

「こ……こんなに！」

それから、ふたりはこの場に残る理由がないことに気づいて、あわててドアの前に立って一礼した。

「ありがとう、ございました」

背後でドアが開くと、レモたちはすばやく後ずさり、閉じるドアの向こうに姿を消した。

「長い間、なにもないような星から、脱出できずにいたようですね」

レモたちが出て行くと同時に、フリーザはパラガスを振り返って言った。

「はい……」

「帰るべき惑星ベジータは、すでにもうないことをご存じですか？」

フリーザは、にやにやと口もとに笑みを浮かべ、パラガスに向かってたずねた。

パラガスは、上目遣い^{うわめづか}でフリーザの問いに耳を傾けていたが、ひとつなずいてから答えた。

「はい、ここに来る最中^{さいちゅう}に聞きました……。しかし、そんなことは、どうでもいいんです……。ただ……」

復讐^{ふくしゅう}、ですね？」

パラガスは、フリーザのその言葉にも押し黙ったまま、厳しい顔でなにも答えなかった。

「……パラガスさん。ベジータ王の息子、ベジータ四世はまだ生きていることをご存じですか？」

パラガスが顔をあげた。

「なっ!!」

皺深い^{しわぶか}パラガスの顔が、みるみる紅潮^{こうちよう}していく。

「ベジータ王子が……お……おのれ、ベジータめ……！」

フリーザは、パラガスにむかって、よこしな笑みを浮かべた。

「あなたの復讐に、力を貸してさしあげましょう。ベリブルさん、おふたりにシャワーを浴びていただいたら、戦闘服を用意してあげてください」

フリーザのそばに控えていたベリブルが、フリーザの指示に一礼する。

「はい」

ベリブルに連れられて部屋を出て行くブローリーたちを見送って、フリーザはほくそ笑んで低くうつぶやくのだった。

「今回は、戦うつもりはなかったんですがねえ……。これは面白^{おも}くなってきましたよ」

レモとチライは、船内にある食堂で祝杯をあげていた。ふたりが陽気に騒^{さわ}いでいると、入り口から大きな人影が入ってくるのが見えた。

「よう!!」

チライが手をあげ、声をかける。

ブローリーだった。

「さっぱりしたじゃないか！」

その声に気づいたか、ブローリーが足を止め、チライたちを見る。そのすぐ横には、あいかわらずいかめしい顔のパラガスもいた。

「こっちで食えよ！」

手まねきするふたりのテーブルに、ブローリー親子が近づいてきた。

ブローリーは、薄いシャツは着ていたものの、戦闘服は身につけていなかった。

「ブローリー、あんた戦闘服は？」

チライの問いに、チライの横に立ったブローリーは、むっつりと答えた。

「あれは……動きにくい」

「着ちゃうと、そうでもないんだぜ」

言いながら、チライは自分の戦闘服の端をつかんで引っ張って見せた。固そうに見えたそれは、ゴムのように伸びて、放すとぱちんと音を立ててもとに戻った。

「まあ、好きにすりゃいいけどな」

そう言って笑いかけるチライに、ブローリーは不思議そうな目を返した。

それからチライは、いまだに座ろうとしないブローリーの腰もとに目をやった。そこには、緑色の毛皮が巻きつけられていた。たしか、バンパからずっと身につけていたもののはずだった。

「でも、腰の毛皮はもう捨てちゃえよ。汚れてるし、臭いよ」

そう言いながら、毛皮をつかんで引っ張ったその時だった。

ブローリーが、初めて感情をあらわにした。髪の毛が逆立ち、顔が怒りに歪む。

「ダメだ!!」

雷鳴のような声に、チライは驚いてつかんでいた手を放した。

食堂じゅうの目がブローリーに向けられる。

「そ、そうか、大事なもんだったんだな……」

チライは、すまなそうにそとブローリーの腰の毛皮に手を触れた。

いつの間にか無表情に戻ったブローリーが、それを見おろしながら口を開いた。

「これは……オレの……」

「ブローリー」

対面に座っていた、パラガスの容赦のない声が飛んだ。

「食事に来たんだ。話をしに来たんじゃない」

その言葉に、ブローリーは言葉を止め、じつとうつむいてしまった。

見かねたチライが声をはさむ。

「あんたさあ、いいじゃないかこれくらい」

パラガスは、にらみつけるようにチライを見た。

「よけいな口出しはしないでくれ」

チライはパラガスをにらみ返すと、だん、とテーブルに手をついて腰を浮かせた。

「ああ？」

「まあまあ」

そこにレモが割って入った。にらみ合うパラガスとチライの間に身を乗り出し、取りなすように交互にふたりを見る。

「おい」

そこへ、大きな影がぬうと入ってきた。

「おまえ、新入りか？」

プロリーの横に、明らかによっぱらったようすの^{おお がら}大柄な戦闘員が立っていた。

その言葉が自分に向けられたものだ気づいて、チライはうさんくさそうな目で、その声の^{ぬし}主を見あげた。

「なんだ？ いま大事な話の最中なんだけどな」

だが、その異星人は、チライの言葉を見向きもせず続けた。

「こんなシケた連中といっても、楽しくないだろ。この船に乗ってる、まともな戦闘員はオレだけなんだぜ？ ほら、来いよ」

チライはいらだたしげに、肩をつかんできた相手の手を払った。

「放せよ、イヤだって言ってんだろ」

ムツとした顔で、戦闘員の男はチライの腕をつかもうとする。

そこに、^こ媚びるような笑顔を浮かべたレモが声をかけた。

「なあ、今日のところはオレが一杯おごるから——」

「うるせえ、じじい」

男は乱暴に振り返り、すぐ後ろに立っていたレモを突き飛ばす格好になった。

声をあげながら^{しり}尻もちをつくレモと入れ替わるように、プロリーが前に出る。

「やめろ、プロリー！」

パラガスの声も耳に入っていないようすで、プロリーは男の前に立った。

「なんだ、文句でもあるのか？」

「ある」

プロリーは感情の読めない顔で、そう答えた。それが、よけいに相手の神経を逆なでしたのだろう。

「ん、だとお！」

うなり声とともに、男は丸太のような腕を振りあげて^{なぐ}殴りかかった。

岩を殴ったような重い音が響いた。異星人の拳は、プロリーのシャツの上にシワを作っただけで、その胸板の上でぴたりと止まっていた。

「な……」

驚きの声をもらしながら、男はふたたび拳を叩きつけた。だが、やはりプロリーは平然としている。

男はおびえた目でプロリーを見たが、うなり声とともにプロリーの胸を連打した。

「くそっ、くそっ！」

プロリーは、打ちこまれる拳を右手で受け止め、左手で相手の^{のど}喉もとをつかんだ。

「ぐっ！」

あわてて男は首に手をやった。だが、プロリーの手はいくら引きはがそうとしても、びくともしなかった。

プロリーは、そのまま相手を持ちあげた。自重で首がしまり、じたばたともがく男の口から^{あわ}泡が吹き出す。

「プロリー！」

パラガスが叫びながら立ちあがった。その顔は、心なしか青ざめているように見えた。

プロリーは、いつしか怒りに顔を歪め、全身を細かく震わせながら、^{けもの}獣じみた声をあげていた。

「ぐう……があああ……」

パラガスが短く舌打ちする。同時に、腰のポーチに手を突っこんで、なかからさっきフリーザに見せたリモコンを取り出した。

それをブロリーに向けて差し出し、表面のボタンを押す。リモコンのランプが点灯すると同時に、ブロリーの首輪が同じようにちかちかと光を放ったと思った瞬間だった。

「がああああ!!」

首輪から発生したスパークが、ブロリーの上半身を包みこんだ。

苦痛に悲鳴をあげるブロリーは、たまた相手の喉をつかんだ手を放していた。床に転がったその戦闘員は、顔をひきつらせ、四つんばいの格好で離れていった。

ブロリーはというと、襲いかかった電撃に苦悶^{くもん}の声をあげながら、首もとに手を伸ばそうとした格好のまま全身を硬直^{こうちよく}させた。

パラガスは、そのさまをしばらくの間見つめていた。チライは、その口もとにかすかな笑みが浮かんでいることを見逃さなかった。

パラガスがスイッチを切ると、ようやく苦痛から解放されたブロリーは、ぐったりと床に膝をついた。ぼたぼたと音を立てて、床に汗がしたたり落ちる。

「あ……ぐうう……」

チライは席を立ち、ブロリーのところに行ってかがみこんだ。

「大丈夫か？」

ブロリーは顔をあげ、青ざめた顔でチライと、遅れてやってきたレモを見た。

パラガスは冷たい目でブロリーをちらと見てから、手のなかのリモコンをポーチに放りこんだ。

「あんた!!」

チライは立ちあがり、パラガスに詰め寄った。

「やりすぎだよ！ あんなことするなんてさ!!」

激しい口調で抗議するチライに、パラガスはおさえた声で答えた。

「止めなければ、殺していたかもしれんぞ」

ブロリーが、悲しげな顔でうつむくのが見えた。それに気づいたチライは、パラガスの鼻先まで顔を近づけ、言った。

「あんた、どんな育て方したんだい」

パラガスは、チライを見下すように応じた。

「ふん、恩人ではあるが、話が合わないようだ。今後、息子には近づかないでくれ」

チライは、その言葉に怒りの表情を浮かべた。だが、その右手は、まったく別の動きを見せた。表情や言葉で相手の耳目^{じもく}を引きつけつつ、パラガスのポーチに手を突っこんでいたのである。

さも悔しげな顔で身を離しながら、チライは盗み取ったリモコンを、気づかれずに腕を組んで隠した。

「パラガスさん……フリーザさまが呼びですよ」

入り口にあらわれたベリブルに、パラガスは即座に反応して振り返った。

たったいままでの、チライを見下すような態度はなりをひそめ、ていねいな物腰^{ものごし}でベリブルに向き直る。

「フリーザさまが！ はい、すぐ行きます。ブロリー！」

そこで、ベリブルは、パラガスを制して言った。

「パラガスさんだけでけっこう……」

「え、そうですか？ ブロリー、すぐに来る、待っている」

そう言い残し、パラガスは、ベリブルに連れられて食堂を出ていった。

立ち去るパラガスを見送って、レモは吐き捨てた。

「オレの死んだクソオヤジだって、あいつよりマシかも」

毒づくレモに、チライがにやりと笑って見せた。

「へへへ……」

不思議そうに見返すレモに、チライが差し出したのは、さっきまでパラガスが手にしていたリモコンだった。

「パクったのか！」

「こんなの、こうしてやるよ！」

チライはリモコンを床に叩きつけ、それから思いきり踏みつけた。固いものが碎ける音がして、チライの足の下には、^{こな こな}粉々になったリモコンだったものが転がっているだけになった。

ブロリーは、^{ひと け}人気のない船内の倉庫のなかで、あぐらをかきながら山積みの携帯食料を夢中でほおばっていた。

チライは、壁の棚の上に腰をかけ、ブロリーの食べっぷりをにこにこながめていた。そうして、例の感謝のサインを作って見せた。

「ブロリー、さっきはサンキュー」

チライが目に入っていないかのように、ブロリーは食べ続けた。

やがて、ブロリーは足もとに置いてあるフタつきの容器に気がついたようだった。なかには水が入っていたが、フタが閉まっているせいで、持ちあげて傾けても水は出てこなかった。

「う、うう」

「なんだ、水が飲みたいのか？ 貸してみな」

^{こん ね}困惑したように容器を振るブロリーを見かねて、そばに座っていたレモが手を差し出した。ブロリーが差し出す容器を受け取り、フタを取ってもどす。

ブロリーは、受け取った容器の中身をひと口飲んで、目を見開いた。

「これは、なんだ」

「え？ ただの水だよ」

チライは、^{と まじ}戸惑うようにブロリーの顔をのぞきこんだ。

「あんた、水も飲んだことなかったのか」

ブロリーは、手にした容器から水を一気に飲み干してしまった。それから、ブロリーは容器を床の上に置いて、感激したようにつぶやいた。

「はあ……うまかった」

そのような見守るふたりに、ブロリーは腰の毛皮に手を触れ、静かに語りはじめた。

「これはバアの耳だ……」

最初、チライには『バア』の意味がわからなかったが、すぐに気づいてうなずいた。

「ああ、その毛皮の話か」

「オレはバアと仲がよかったんだ。バアは、大きな大きな、この船より大きなケダモノだ。バアと鳴くから、オレはそう呼んだ」

ブロリーは懐かしげに表情を緩めながら、緑色の毛皮に目を落とした。

「バアは恐ろしいが、毎日毎日バアの攻撃を避けるトレーニングをしていたら、仲がよかった……とても仲よかった……」

ブロリーの言うバアとは、あの緑の草原に見える巨獣のことだった。あの獐猛な獣が、はたして他の生き物に心を許したのかどうかはわからないが、訓練を繰り返すうちに、ブロリーが近くにいるだけでも襲わなくなったことだけは確かのようにだった。

「初めての友だちってことか……」

レモがしみじみとつぶやいた。

「でも、お父さんは怒った。バアと仲よくなると、トレーニングじゃない。それで——」

そこまで言ったところで、ブロリーの顔から表情が消えた。

「お父さんは、銃でバアの耳を撃って、バアを怒らせた。二度とバアはオレと仲よくなってくれなかった。だから、オレは……バアの耳と一緒にいることにした……」

チライは、腰かけていた場所から降りて、ブロリーのすぐ横に並んでしゃがみこんだ。

「いっぱいしゃべったね、ブロリー」

ブロリーの表情は変わらなかったが、チライの言葉に顔をうつむかせる。

「ここで、そんなピュアな話を聞いたのは初めてだ……おまえ、マジで純粋なんだな」

レモはそう言って、ブロリーに笑いかけた。

チライはブロリーにさらに顔を近づけ、言った。

「もしかして、ホントは戦うの好きじゃないんだろ？」

レモがチライの言葉を引き継ぐ。

「なまじ戦いの才能がすごかったから、親父さんに無理やりトレーニングされちゃったんだな……」

チライはふうっとため息をついて、腰に両手を当てて立ちあがった。

「あんたの父親さあ、あんたをただの強力な武器としか思っていないんじゃないか？ 復讐と出世のためのさ」

「だろうな。おまえさんの親父は最低だよ。あんなヤツの言うこと、聞く必要ないぞ」

レモとチライの言葉を、ブロリーは顔をうつむかせ、黙って聞いていた。しばらくして、ブロリーは小さくかぶりを振って答えた。

「お父さんのこと、悪く言うのは、いけない」

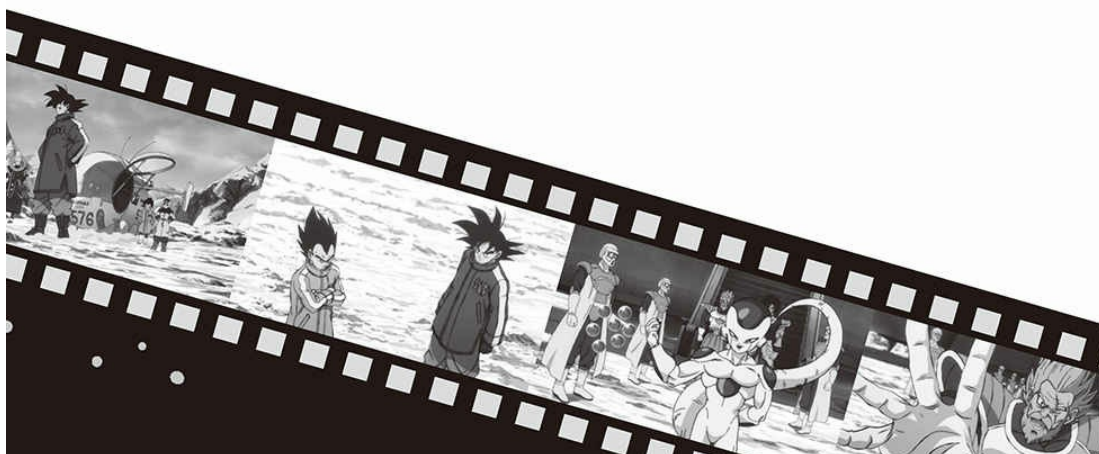
チライは呆れ顔でブロリーを見おろした。その横で、レモはこの青年が気の毒でしかたがないと感じていた。



其^{その}之^の四^{よん}

3^に人^んのサイヤ人^{じん}

DRAGONBALL SUPER





あたりは、見渡す限り雪と氷に覆^{おお}われていた。

ブルマの研究室からドラゴンボールを持ち出した兵士たちは、レーダーに映^{うつ}った光点に向かって歩き続^{つづ}けていた。
「このあたりのはず……」

レーダーに注意を奪^{すべ}われていたその兵士は、背後で仲間が足を滑^{すべ}らせたことに気づ^きくのが遅^{おそ}れていた。姿勢^{くず}を崩^{くず}した仲間の兵士が、背中からもろにぶつかってくる。

「うわっ！」

勢^{いき}いよく突き飛ばされ、兵士は目の前の崖^{がけ}から空中に飛び出^でていた。

「うおおおお！」

さいわい、それはほんの一瞬^{しゅん}のことだった。

手首^{てくし}をつかまれる感覚^{かんかく}があつて、同時にガクンと強い衝^{しょう}撃^{げき}が襲^{おそ}う。見あげると、必死^{きし}の形相^{ぎようそう}の仲間が、彼の手首^{てくし}をつかんでひっぱりあげようとしているところだった。

「バカ野郎^{やろう}！ 早く引きあげろ！」

「すまねえ！」

仲間の手を借りて、その兵士はなんとか崖^{はし}の端^{はし}までよじ登^{のぼ}ると、岩^{いわ}の突起^{とつ}に足をかけて一氣^{いっ}に体^{てい}を持ちあげた。とたん、突起^{くず}が崩^{くず}れ、なにかが下に落ち^{おち}ていくのが見えた。

それに気づいた仲間が、声をあげる。

「あ」

「え？」

その兵士も、思^{おも}わず間^ま抜け声^{こゑ}を出^でていた。

それは、探^{さが}していた最後のドラゴンボールだった。ボールはゆっくりと弧^こを描^{えが}いて、崖^{がけ}の下に消^きえていっ^いた。

「あつた！ あつたぞ！」

たったいままで落ち^{おち}そうになっていたことも忘れ、兵士は崖^{がけ}下^{した}に向かって叫^{こゝろ}んでいた。

フリーザのもとに呼び出^よされたパラガスは、地球^{ちきゅう}へと向^{むか}うことを告^つげられていた。

「これから行く地球^{ちきゅう}という星^{せい}に、ベジータともうひとりのサイヤ人がいます。ブローリーのパワーを見せていただきますよ」

「ブローリーの強^うさは生まれながらの超^{ちやう}天才^{てんさい}。長^{なが}年の恨^{うら}みを晴^{はら}らしてみせます」

パラガスは、軍人らしい直立の姿勢のまま、強い口調でそう応えた。

フリーザは笑みを浮かべたまま続けた。

「ところで、ベジータはお好きにしても構いませんが……」

パラガスが顔をあげる。フリーザは、パラガスを見ていなかった。

「もうひとりの孫悟空というサイヤ人のトドメは、わたしにまかせてくださいね」

どこかあらぬ方向に目を向けながら、フリーザは言った。その表情から笑みは消え、殺気をともなった恐ろしいものに変わっていく。

「孫悟空を殺すこと。それが、わたしの長い間の夢ですから」

気圧されたパラガスは、思わず一歩退き、深く腰を折った。

「……承知いたしました」

そこへ、キコノが、息を切らせて駆けこんできた。

「フリーザさま、ドラゴンボールが七個そろったようです！」

「おお、それはすばらしい！」

フリーザの顔に笑みが広がった。

ブルマたちの小型ジェットは、氷の大陸の上空にさしかかっていた。

「ん？ あそこ！」

最初に、着陸した宇宙船を見つけたのはブルマだった。そのすぐそばに、見覚えのある戦闘服を身につけた人影がふたつ見える。

「フリーザ軍よ」

ブルマのすぐ後ろに立って、ベジータが舌打ちする。

「ちっ、もう最後の一個を見つけやがったか……」

宇宙船に乗りこもうとした寸前、すぐそばに着陸する小型ジェットに、ドラゴンボールを抱えた兵士たちが、おびえた顔を向けていた。

「あの飛行機、ヤバイんじゃないか？」

「キコノさまの言っていた、サイヤ人じゃないだろうな……」

彼らの見守るなか、ジェットのドアが開いていく。

最初になかから飛び出してきたのは、防寒用のコートに身を包んだ悟空だった。

「うひゃー！ こりゃさみい！」

続いて、同じように防寒着を身につけたベジータやブルマ。そしていつもと変わらぬいでたちのウイスも姿を見せた。

「ウイスさんは、よく平気ね」

防寒用のスーツばかりか、ヘルメットまで着けているブルマに、ウイスは余裕の笑みを浮かべて答えた。

「宇宙空間は、もっと寒いですからね」

兵士たちは、宇宙船の陰でスカウターを使って、悟空たちの戦闘力を測定していた。ボタンを押した瞬間から急激に数値がはねあがり、警告音とともに、たちまち測定不能のエラーメッセージが表示される。

「スカウターの数値が振り切ったぞ！ サイヤ人だ！」

「逃げるぞ！」

ふたりは、大あわてで宇宙船に乗りこみ、エンジンを全開にして発進させた。

それに気づいたベジータは、無造作に持ちあげた腕から、急速に離れていく宇宙船に向けて 気 弾^{エネルギーだん}を放った。

輝くボールが飛んでいった向こうで、わずかな間^まを置いて、閃光^{せんこう}が走る。それからしばらくして、ドン、という爆発音が聞こえてきた。

遠くに、黒い煙を引きながら、宇宙船が落ちていくのが見える。

「ふん」

ベジータは、つまらなそうにひとつ鼻を鳴らしてから、悟空とともに墜落した宇宙船のもとへと向かった。

宇宙船は、深い雪の吹き溜まり^{ふだ}のなかに突っこんで煙をあげていた。ベジータはそのすぐ横^おに降りて、宇宙船の端^{はし}をつかんで雪のなかから引きずり出した。

なかの兵士たちは、船ごとベジータに高く持ちあげられ、パニックになっていた。それを悟空がのぞきこむ。

「ひい！」

「おいこら、出てきてドラゴンボールを返せ！」

悟空の声に、兵士ふたりは震えながら船の奥で身を寄せ合っていた。

「ど、ど、どうする？」

「ど……どうするって、返さないとこいつに殺される」

「返すとフリーザさまに殺される」

突然、悟空が表情を変え、空を見あげた。

ほぼ同時に、ベジータも顔をあげる。

ふたりの見あげた方向に、降下^{こうか}しつつあるフリーザの宇宙船があった。上部にあるハッチがゆっくり開くと、なかからフローターポッドに乗ったフリーザが姿をあらわした。

「ふふ……」

それから、フリーザは小さな光の浮かん^{たま}だ手のひらを持ちあげた。手のなかで、光の球が輝きを増すのと同時に、フリーザは手を地球に向かって押し出した。

フリーザの放った光球^{こうきゅう}が、地上に向かっていく。それが眼下^{がんか}を覆う^{おほ}ふ厚い雲に触れたとたん、エネルギーを解放した。

雲は一瞬で蒸発^{しょうげき}し、衝撃波^はで地上を覆った雪が吹き飛ばされていく。

悟空とベジータは、平然とそのなかに立って、空の一点を見つめていた。

「やれやれ、フリーザの登場だ」

悟空が、にが笑いを浮かべる。

その横で、ベジータがすうと目を細め、つぶやいた。

「なんだ……？」

「フリーザだけじゃねえぞ……なにか……とんでもねエヤツが……」

おなじく、違和感を覚えた悟空の顔から笑みが消える。

フリーザの船は、悟空たちのすぐそばに着陸した。ハッチが開き、なかから戦闘員たちが降りてきて整列する。その後ろから、見慣れないふたりの人影とともに、フリーザが姿を見せた。

そのうちのひとり、フリーザ軍の戦闘服を身につけ、腰に緑色の毛皮を巻いた背の高い男が悟空たちに目を向けた。とたん、その男のほうからごうっと強い風が吹き抜ける。その風の勢いに、整列した戦闘員たちが姿勢を崩した。

ベジータは、船を降りたところに立つふたりを見つめたまま、となりの悟空に言った。

「あいつら、サイヤ人じゃないか」

悟空も無言でうなづく。

その視線を感じたパラガスは、前方に立つベジータに気づいた。

「——ベジータ!!」

そこには、この四〇と一年、一度も忘れたことのなかった男に生き写しの顔があった。

「間違いない、王にそっくりだ」

その言葉と同時に、ベジータがブロリーと同じように気を放ってくる。それはブロリーに負けない勢いと強さで、パラガスたちに叩きつけてきた。

噛み締めた奥歯がざりりと音を立てる。握り締めた拳に力が入り、パラガスの表情が陰しさを増していく。

「なにしにきたんだ、フリーザ！」

前に出るフリーザに、悟空の声が響いた。

「もうご存じなんでしょ？ ドラゴンボールで願いをかなえるためですよ」

悟空たちの目がフリーザに向けられているスキを見て、例の兵士たちは、ドラゴンボールを持って逃げだそうとしていた。

それに気づいたフリーザが、視線を向ける。すると、ドラゴンボールは兵士たちの手を離れ、フリーザのもとへ引き寄せられていった。

「フフ……」

ドラゴンボールを手にしたフリーザは、悟空たちに不敵な笑みを向ける。

だが、悟空もベジータも、すでにブロリーへと注意を移していた。

「あの球みたいなやつ、なんだ？」

チライは、レモとともに船の展望デッキから外のようにすを見おろしていた。

「さあな……」

「誰かに聞いてみるよ」

首をかしげるレモに、チライはいらだたしげにそう言った。なににせよ、戦いの場にブロリーがかり出されることに、チライは不安を隠せなかった。

ブルマは、フリーザたちとにらみ合うベジータと悟空に向かって、大声で叫んだ。

「ちょっとー！ ドラゴンボール取り返してよー！」

「それどころじゃないですよ」

隣に立つウイスが、興味深げにそう言った。

けげんそうに見るブルマに、ウイスはにこやかに続ける。

「戦闘民族の性というべきでしょうか——」

そこでブルマも気づいた。悟空たちが、強い相手と相対した時に見せる、独特の雰囲気を持っていることに。

悟空は、ブロリーとパラガスに目を向け、言った。

「フリーザ！ そのふたりは？」

フリーザは、悟空に目を向けたままで答える。

「こちらは新しくフリーザ軍に加わった、ブロリーさんとそのお父さまの——」

「パラガスだ！」

パラガスはフリーザの隣に進み出て、ベジータをにらみながら大声で名乗った。

「だ、そうです。お気づきのように、あなたたちとおなじサイヤ人ですよ」

フリーザの言葉に、ベジータがむっつりと答える。

「そんなヤツは知らん」

「あなたが幼いころに、このブロリーさんとパラガスさんは、あなたの父親であるベジータ王からひどい仕打ちを受けて、いままで、見知らぬ過酷な星から脱出できずにいたそうですよ」

その話の間中、ベジータは、フリーザをただじっとにらみつけていた。

パラガスとブロリーもまた、無言でベジータを見つめている。

ブルマでもわかるほど、両者の間に、一触即発の緊張感が高まりつつあった。

パラガスは、ベジータに普通ではない恨みを持っているようだった。そしてあのブロリーという若者は、フリーザが連れてきた以上、相当の力を持っているのだろう。

そうやって向かってくる相手に、ベジータが反応しないはずがない。

重苦しい空気が、この場を支配しつつあった。

「フリーザ」

悟空だった。張り詰めた緊張が、さらに高まる。

フリーザが悟空に顔を向けた。その顔から、つかの間笑みが消える。

悟空が重い間をおいて、ふたたび口を開いた。

「カコクって、なんだ？」

その場にいたほぼ全員が、示し合わせたかと思うほど見事にズッコケていた。

なにもかも台無しだった。

その場で姿勢を崩さずにいられたのは、たぶん話を聞いていなかったパラガスとブロリー、当の悟空とウイス、それからフリーザだけだった。

もちろんベジータは思いつき氣勢をそがれて、がっくりと肩を落としていた。

「厳しすぎる……ってことですよ」

引きつった笑いを浮かべ、フリーザが答える。

「へへへ……あんがとな！」

笑顔で礼を言う悟空の横で、ベジータが顔をしかめて吐き捨てた。

「このバカめ！」

どうやら、パラガスは、この一連の流れを自分への侮辱と受け取ったようだった。

ぎりりと歯を鳴らしながら、ベジータをにらみつけ、叫ぶ。

「くっ！ おまえだけは、絶対に許さんぞ！ ベジータアッ！」

ふたたび、ベジータの目がパラガスに向けられる。

「オレたちは、その復讐に来たんだ！」

怒りを隠そうともせず叫ぶパラガスを目にして、ブロリーもまた怒りをたぎらせはじめていた。パラガスが怒っている相手は、ブロリーにとっても憎い敵なのだ。

「ふざけるな！ オレの知ったことか！」

ベジータにしてみれば、まったく身に覚えのないことで逆恨みされるのは、不快以外の何物でもなかった。

「そんなの関係ねえだろ」

まったく空気を読まない、悟空の気楽な声が響いた。

「おんなじサイヤ人同士なんだ、なかよくやろうぜ」

だが、一度怒りにとりつかれたブロリーは、そのなかで破壊的な衝動がますますふくれあがりつつあった。拳を握った腕は筋肉が盛りあがり、逃がしどころのない力に小刻みに震えはじめている。

パラガスは暗い笑みを浮かべてそれを見やってから、フリーザに視線を向けた。

「フリーザさま」

フリーザはブロリーをちらと見て、そしてパラガスに向かってうなずき返す。

「ガマンできないようですね。いいでしょう。どれほどの実力か、見せてください」

「承知しました」

パラガスは、そう答えてから、ベジータに目を向け、腕を突き出して叫んだ。

「よし、ブロリー！ やれ！」

ブロリーの獣じみた声が響きわたった。

「おおお！」

整列していた戦闘員たちを吹き飛ばしながら、ブロリーが前へ飛び出した。

「わあああ!!!」

平然と立つフリーザと、パラガスの間を通過して、ブロリーは一気に悟空たちのもとへ向かう。

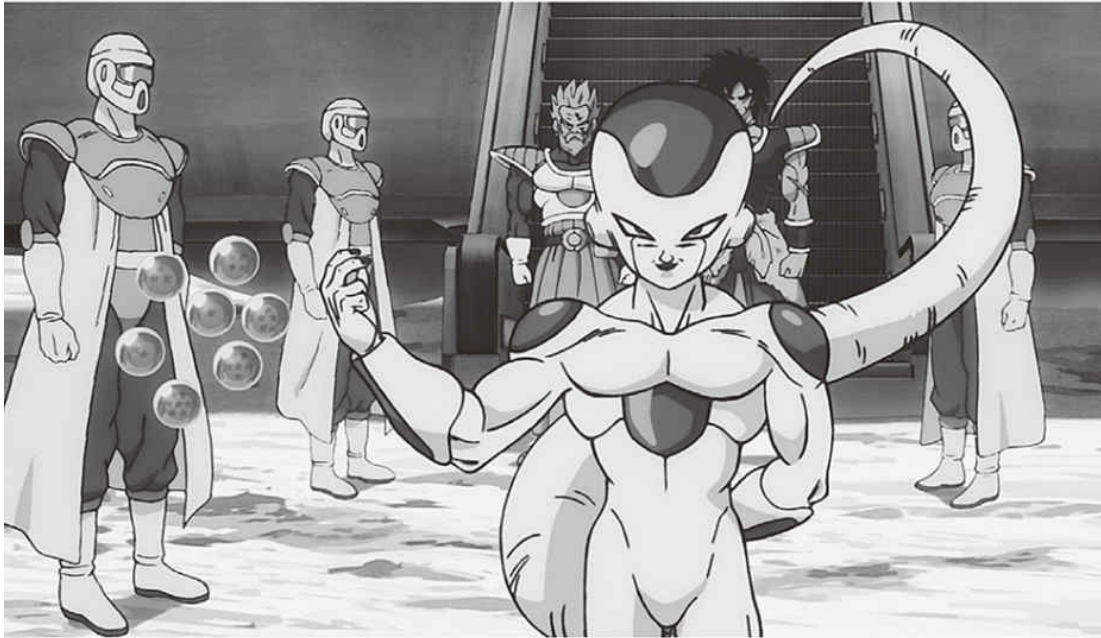
ブロリーが選んだのはベジータだった。悟空の横にいたベジータが、ブロリーが通り過ぎるとともに姿を消す。

はるかかなたに移動したベジータが、繰り出されたブロリーのパンチを交差した腕で受け止めていた。

「はああ……」

髪の毛を逆立たせたブロリーが、ベジータをねめあげながらためこんだ息を吐く。

DRAGONBALL SUPER



「ふっ」

ベジータは、ブロリーの^{どう もう}獯猛な顔を見おろし、不敵に笑った。



ブロリーは、重いパンチを何発も^{く だ}繰り出した。

ベジータは、それを余裕でさばいていった。一発一発は重く、威力が^{い りよく}あったが、ベジータにすれば楽にかわせるものだった。

何発目かのパンチを受け流し、スキだらけの胴に^け蹴りを入れる。ブロリーはもろにそれを食らったが、^{よ ば}四つん這いになって着地し、さらに氷を割りながら体を滑らせて受けた打撃の勢いを止め、ふたたびベジータに襲いかかった。

恐るべきスピードだったが、ベジータは繰り出されたパンチを余裕の表情でかわした。

「やるじゃないか。ようやく体があつたまってきたぜ！」

気合いの息吹^{い ぶき}とともに、ベジータのカウンターがブロリーに^{たた}叩きこまれる。

「ぐうっ」

タフな相手だった。ベジータのパンチに顔を歪^{ゆが}ませながらも、強引に振るった腕がベジータを襲う。

それを寸前でかわし、ベジータは頭から地面に突っこんでいった。激突の寸前、突き出した両腕で着地、反動を使ってブロリーの腹に蹴りを入れる。

「ぐっ！」

もろに食らったはずだったが、ブロリーはそれにも耐えた。

そこへ、間髪^{かん はつ}をいれずベジータの足払いが決まる。姿勢を崩^{くず}すブロリーの脇腹^{わき ばら}に、さらに重い蹴りが打ちこまれた。

「ぐわっ！」

弾丸のように吹っ飛んでいくブロリーに、ベジータは一瞬で追いついて、さらに追撃しようとする。

が、そこでブロリーの動きが変わった。

瞬時に反応して身をかわすベジータの目の前を、衝撃波^{しょうげき は}をともなったパンチが通り過ぎる。

「くっ、こいつ——」

パンチの向かった先の地面が、数十メートルの距離があつたにもかかわらず、ポコンと音を立てて大きくえぐれる。そうしたパンチが、立て続けに何発も^{はな}放たれた。

それらをすべて一瞬のうちに見切り、受け流すことができたのは、ベジータの経験のたまものだった。だが、ブロリーの攻撃は、それすら上回りつつあった。

「速い！」

攻撃をかわして回りこんだベジータの前に、両腕を広げたブロリーが立ちはだかった。

「はああ！」

打ちこまれたパンチは、腕で受けることしかできなかった。明らかにブロリーのスピードがあがっている。

「力の使い方を学習しているのか！」

交差した腕を跳ねあげ、ブロリーのパンチを弾いて、次の攻撃に移ろうとしたベジータは、しかし、下から叩きこまれた膝蹴りを受けるのがせいっぱいだった。

さらにパンチがくるところを受け流し、ブロリーが一瞬見せたスキをついて蹴りを入れる。だが、ブロリーはそれを防いでみせた。

ふたりは、互いに攻撃を繰り返しながら上昇していく。常人の目には、その攻防はあまりにも速すぎてとらえることはできず、ただ、衝撃音とすさまじいパワーの生み出す空気のゆらぎが見えるだけだった。

その光景を見あげるパラガスの顔は、心なしか青ざめて見えた。

「ベジータのヤツも、そうとう鍛えたようだな」

「彼らは、いろいろな修羅場をくぐっていますからね」

パラガスはフリーザを見た。フリーザは笑みを浮かべながら、静かに言葉を続けた。

「それに、まだ慣れていないようですから。ブロリーさんは、人間とは戦ったことがないんでしょ？」

「わたしとシミュレーションは……」

フリーザは鼻で笑った。

「あなた程度の戦闘力じゃ、ほとんど意味がありません」

パラガスは言葉を失った。フリーザは戦いに目を戻し、言った。

「ご心配なく。徐々に慣れてきていますよ……」

実際、ブロリーの戦闘技術は、このほんの数分の間にベジータすら驚くほどの進歩をとげていた。

もはや、ベジータとブロリーの間に、明確な力の差はなかった。パワーでは明らかにブロリーが勝り、ベジータはそれを食わないようにするために細心の注意を払わなければならなかった。

スピードはわずかにベジータが勝っていたものの、その差も埋まりつつあった。

「はああ！」

両手を頭上で組み、ベジータが振りおろす。ブロリーは空中で腕を交差させてそれを受け、その勢いを利用して着地、そのまま地面を蹴って、ベジータに突っこんだ。

身構えたベジータの目の前で、ブロリーの姿が消える。背後だと気づいた時には、ブロリーの裏拳が顔に食いこんでいた。

「ぐう……」

吹っ飛ばすベジータを、さらに加速したブロリーが追う。噴き出した気が、ぼんやりとした輝きを放ちながら、ブロリーの全身を覆いはじめていた。

「いいぞ、ブロリー！」

興奮したパラガスの声が響く。

組み合ったベジータとブロリーの手が、空中で激しく押し合った。力負けを感じたベジータが、いらだたしげにうなり声をあげ

る。

「ぐぐ……！」

おさえていた気がほとばしった。ベジータの手が一瞬金色の光を放ち、ブロリーの手にゆっくりと指先を食いこませはじめる。

「！」

ベジータの異変に気づいたブロリーが、表情を変えた。苦痛に表情をゆがめ、なんとか手をもぎはなそうと腕を引く。

「ぐっ！　ぐっ！　ぐっ！」

だが、余裕の笑みを浮かべたベジータは、明らかに増したパワーであっさりブロリーを引き寄せた。

「うっとうしいヤツだ……!!」

目の前で呆然と見返すブロリーに、ベジータは反り返った姿勢から頭突きを食らわせた。

岩をぶつけたような低い音とともに、ブロリーの体がのけぞった。

「ぐっ！」

ベジータは、固めた拳をブロリーの顔に叩きこんだ。渾身の一撃に、ブロリーはたまらず後方へと吹っ飛んだ。

そこにあった氷山に突っこみ、ブロリーの姿が消える。崩壊する氷山のなかから、顔をしかめながらふたたびあらわれたブロリーの目の前に、ベジータが降り立った。

「ふん」

ブロリーが、じっと見あげるなか、ベジータは両拳を腰に構え、ためこんだ息を気合いとともに吐き出した。

「はああああ!!!」

ドン。

ベジータを中心に、衝撃波が広がった。

叩きつけてきた圧力に、ブロリーが目を見開く。

ベジータが金色に輝いていた。

「なっ、なんだ、あれは!!」

それは、パラガスのまったく知らない姿だった。

「おや、ブロリーさんはなれないんですか？　超サイヤ人に」

フリーザが、不思議そうに振り返る。

「ス……超……サイヤ人……!?　まさか……」

パラガスにも、あれがこけおどしではないことがわかった。

「伝説の!？」

あれほどの距離があって、はっきりと感じられるほどの圧力が、ベジータから放たれている。

ブロリーは強い。全盛期のベジータ王でさえ、絶対にはかなわないだろう。パラガスにはその確信があった。

だが、いまのベジータは、完全にパラガスの想像の外にあった。

金色の光に包まれたベジータが、ブロリーをねめつける。

「ぐう……」

ブロリーは、本能的にベジータのパワーアップに気づいていた。だが、押し寄せる恐怖は、ブロリーを逆に戦いへと駆り立てた。

「がああ!!」

氷山の残骸を蹴って、ブロリーがベジータに飛びかかった。

平然と見返すベジータの目の前、ほんの鼻先ほどの距離まで迫ったところで、突然ブロリーの姿が消える。そこからさらに加速して、ベジータの後方に回りこんだのだ。

だが、ベジータは驚いたようすもなく、後ろも見ず右拳を背後に向けて振り上げた。

「ぐ！」

ベジータの裏拳をもろに食らって、ブロリーはまるで巨大なハンマーで殴られたかのように、すさまじいスピードで吹き飛ばされた。

ブロリーは途中でブレーキをかけ、反転してベジータに突っこんでいく。

「！」

ブロリーが急ブレーキをかける。さっきまで遠くにいたはずのベジータが、突然目の前に出現したからである。おなじ技をブロリーも使ったが、ベジータのそれははるかに上回っていた。

ベジータの蹴りが、ブロリーの腹部にもろに決まる。

「ぐ……！」

衝撃を殺しきれず、ブロリーが地面に激突、跳ねあがったところに、瞬時に移動してきたベジータが再び蹴りを入れた。

吹っ飛ばされたブロリーは、空中でベジータを迎え撃った。ぎりぎりまで引きつけ、パンチを繰り出す。だが、ベジータはそれを完全に見切って、カウンターで拳を打ちこんだ。

顔を歪ませ、ブロリーは大ダメージを受けながらさらに吹っ飛んだ。

だが、ブロリーは闘志を失っていなかった。空中で動きを止め、ベジータに打ち合いを挑む。攻撃の正確さ、手数、ともにベジータが上回っていたが、それでもブロリーは手を止めなかった。

ベジータの一撃を食らい、吹っ飛ばされたブロリーが、なおも燃えるような目を向けながら空中でブレーキをかける。

ベジータはそれを冷静に見おろし、突き出した手のひらから気弾を放った。

直撃を受け、ブロリーの姿が爆煙のなかに消える。ベジータは、まっすぐブロリーのいるはずの場所へと突っこんでいった。

腕を振るい、ブロリーが煙をはねのける。そこへ滑りこんできたベジータに、うなりをあげるパンチを繰り出すが、ベジータにはやはり通用しなかった。何度目かのカウンターが決まり、ブロリーが後退する。

だが、それだけだった。それまでに負けない一撃を打ちこんだはずだったが、受けたダメージが明らかに少なく見える。

ブロリーが蹴りを繰り出してきた。

ベジータはそれを受け止め、至近距離で気弾を撃ちこんだ。手加減のない、なみの相手なら致命傷になりかねない一撃だった。

ブロリーは爆発の衝撃で吹っ飛んだが、目を疑う俊敏さで姿勢を立て直した。

向かってくるブロリーに、ベジータが拳を打ち返す。ブロリーはそれをかわさず、顔面で受けたまま押し返してきた。

「な、なんだこいつは！」

一瞬のスキがあった。オーラをまとったブロリーの拳が、ベジータを直撃した。

「ぐっ！」

今度は、ベジータが吹き飛ぶ番だった。

氷山に叩きつけられ、動きの止まったベジータに向かって、さらにブロリーが襲いかかった。かわす間もなく食らったパンチで、ベジータは氷山を砕きながらさらに吹き飛んでいく。

「成長のスピードが速い！」

まるで、これでは戦いながら稽古をつけてやっているようなものだった。ベジータの繰り出した技や動き、状況判断を、あのブロリーは急速に自分のものにしていっている。

ベジータは、自分が次第に押されつつあることに気づいていた。攻撃より、防御の回数が増えているのがわかる。

はじめは通用した攻撃が受けられ、流され、果ては返されるようになり、圧倒していたパワーもほとんど対等か、押されるま
でになっている。

「くっ、こいつ！」

ガードを押し破られ、ベジータはまともにパンチを受けて姿勢を崩していた。とっさに作り出した気弾をブロリーの腹に押しつけ、爆発の反動で目くらましをかけると同時に距離を取る。

ブロリーは、ベジータに向けて気弾を撃ってきた。ベジータはそれをかわしつつ、逆にブロリーに突っこんでいった。

意表を突かれたのか、ブロリーの攻撃が一瞬遅れる。そのスキをついて、ベジータはブロリーの脇をすり抜け、全速力で引き離しにかかった。

悟空は、ベジータとブロリーの攻防を見あげながら、驚きと期待に声を弾ませた。

「すげえヤツだ！ 素のままで、互角に戦いはじめたぞ！」

その悟空のすぐそばを、必死の形相のベジータが通り抜けていく。その一瞬後、ブロリーも氷原の氷を削り、巻きあげながら飛び去っていった。

逃げながら、ベジータは必死で気を練っていた。超サイヤ人から、さらに次元の違う力を引き出すためである。

上空に舞いあがったベジータの全身から、赤い気がしみ出るように広がっていく。それが全身を包みこんだとたん、ベジータの雰囲気が変わった。

「はあっ！」

気合いととも、ベジータの髪が赤い光に染まる。超サイヤ人とは明らかに異なる気を放つベジータに、ブロリーは急ブレーキをかけ、呆然とベジータを見あげた。

ベジータが変身してみせたのは、超サイヤ人ゴッドと呼ばれる状態だった。サイヤ人が自ら生み出した、神——ビルスのよ
うな——に等しい存在である。

もちろん、ブロリーがそんなことを知るはずもなかった。だが、それがどういうものか、本能的に感じ取ったのだろう。それまでの闘気はなりをひそめ、ベジータの前に無防備な姿をさらけ出すことになった。

「ああ……あ……」

怒りしかなかったブロリーの表情に、初めておびえの色が広がる。

ベジータは静かにブロリーを見おろし、手のひらをかざした。次の瞬間、ブロリーが見えない力に殴りつけられたように、大きく後方へと押しやられる。

「ぐっ！」

ベジータは、ありあまるパワーを手のひらに集中し、衝撃波として放っていたのだった。

DRAGONBALL SUPER



表情ひとつ変えず、さらに続けて手のひらを突き出すと、必死で防御の姿勢をとるブロリーの体が大きく弾き飛ばされる。
「ぐっ！　ぐっ！　ぐっ！」

はっと顔をあげたブロリーが、防御を解いて身をかわす。そのすぐそばをかすめた特大の衝撃波が、ブロリーの背後にあった山を吹き飛ばしていた。

「ぐわーっ！」

破れかぶれになって、ブロリーはベジータのもとに突っこんでいった。

だが、必死で振り回すブロリーのパンチは、ベジータにかすりもしなかった。悲鳴に似た声をあげつつ、さらに二発、三発と繰り出すが、ベジータは完璧にそれを見切っていた。

「がああっ！」

渾身の力がこもったブロリーのパンチを、ベジータは掲げた手で軽々と受け止めた。

驚きに顔を歪めるブロリーの目の前で、ベジータがゆっくりと拳を引いていく。ブロリーは、それを黙って見つめるだけだった。動けなかったのだ。

「はっ！」

さほど力が入っていないように思える動きとともに繰り出されたパンチは、しかし、ブロリーがいままで受けたどの攻撃よりも重く、速かった。

数キロの距離があったはずの氷山に、ブロリーは一瞬のうちに突っこんでいた。勢いはそれでは止まらず、その氷山を貫いてさらに吹っ飛んでいく。

いくつもの氷山を完全に破壊し、海上を漂っていた巨大な流氷に叩きつけられて、ようやくブロリーは止まっていた。

激突したブロリーを中心に、氷の島と言ってもいいほどの流氷が大きく陥没し、亀裂が全体に広がっていく。

パラガスは、膝から崩れ落ちた。

「ベ……ベジータが、ここまで腕をあげているとは……」

フリーザがつまらなさそうに言う。

「おや、もう限界ですか？」

「は……はい」

パラガスは力なくなだれた。

それまで、楽しんでたように見えたフリーザの顔から、表情が消える。くると背を向け、宇宙船に向かって歩きながら、パラガスに言った。

「まあ、いいでしょう……今日のところは、引きあげるとしますか」

「はい……」

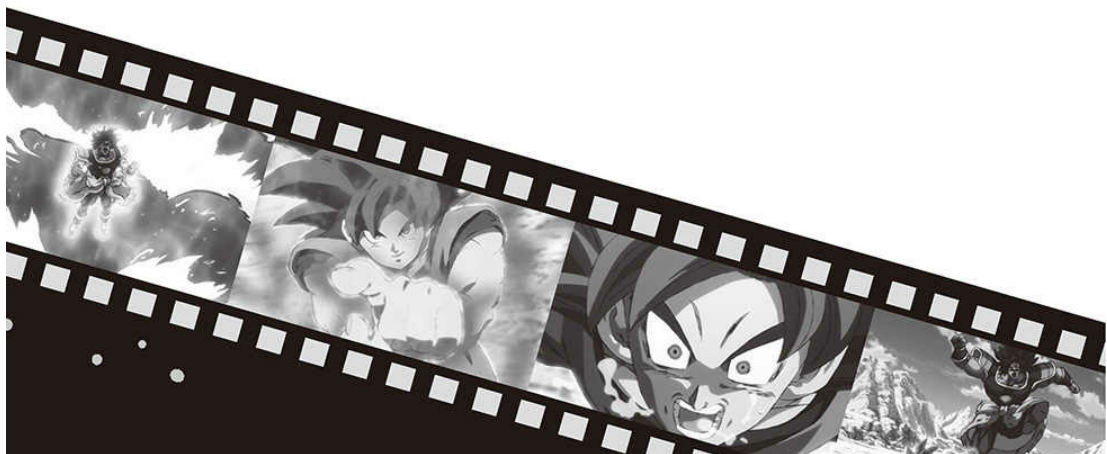
のろのろと立ちあがったパラガスは、その時、異変に気づいた。

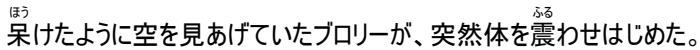


其^{その}之^こ五

果^はてしなき強^つさ^よ

DRAGONBALL SUPER





「なんだ？」

「い、いかん、ブロリー!! 今日はここまでだ!!」

「やめろ！ 戻ってこい！」

「くっ！」

「なっ、ない！ リモコンがない！ そんな！」

「ブロリー!! やめろと言っているんだ!」

「<<<.....」

「オレの言うことが聞けないのか——っ！」

「はっ……」

「くだらん」

「や、やめろ、ベジーターツ!!」

超サイヤ人ゴッドのパワーで放たれた ^{エネルギーだん} 気 弾は、^{けた ちが} 桁違いの破壊力だった。流氷だったものは、今度こそつぱみじんに破壊

され、ふくれあがる光のなかにブローリーの姿が消えていく。

すさまじい爆発が巻き起こった。

意識を薄れさせながら、ブローリーはゆっくりと海底へと沈んでいった。

だが、それは終わりではなかった。

「！」

爆発がおさまったと思われたその時、悟空は海の中で信じられないほどの気が爆発的に高まるのを感じた。悟空は飛びあがり、ベジータの近くから強烈な気を感じる方向を見おろした。

ベジータも、同じようにブローリーが消えた方向に目を向ける。ついでしたがたまで浮かべていた余裕の表情は、そこにはなかった。

ざあざあと音を立てて、海が波立ちはじめる。海水が白く濁っているのは、波のせいだけではなかった。

「うおおおおお————!!!」

ブローリーの叫びが、おそろべき気のうねりとなって悟空たちに叩きつけてくる。

海水が沸騰し、でたらめに波打っていた海面が大きな渦を巻きはじめた。渦は次第に勢いを増し、中心が深く沈んでいく。と、その中心が閃光を放った。

ベジータの気弾が作り出した爆発に匹敵するか、それ以上の爆発が巻き起こった。

豪雨のように叩きつける海水の向こうに、ブローリーが浮かんでいた。

放出する気の圧力のせいで、海水が退けられ、円形の水の壁の中心に立っているかのようだった。

「うぐぐぐ……」

猫科の獣を思わせるうなり声とともに、ブローリーはためこんでいた力を解放した。

「うおおおおおおお!!!」

ブローリーを中心に、全方向に向けて衝撃波が放たれた。

ベジータの一撃もかくやと思われるパワーに、悟空が驚きの声をあげる。

「うそだろ……!?!」

それは攻撃ではなかった。ブローリーが潜在能力を解き放ったせいで生じた余波にすぎない。では、ブローリーが本気で攻撃してきたら、どんなことになるのか。

「な……」

ベジータも同じように、力を解放するブローリーを驚きの目で見ていた。

「見たことあるか、あんなサイヤ人」

悟空の声に、ベジータは眉間に深くシワを寄せた顔を向けた。

「おい、仙豆を持ってきているか？ カカロット」

「持ってきてねえ」

ベジータは腕を交差させ、なおも押し寄せる衝撃波に耐えながら、ふたたびブローリーを見た。

「これは、遊んでいる場合じゃあ、ないな！」

ブローリーはなおも力を放ちながら、身を震わせ、苦しげな声をあげて、ゆっくりと顔をうつむかせていった。

「ううう……うおおお!!!」

不意に、その顔が持ち上げられる。カッと開かれた口からは、まばゆい光がもれていた。

「わわっ！」

ブロリーの口から、閃光^{せんこう}が放たれた。高密度の気がビームとなって、海水を蒸発させ、まっすぐに悟空に向かってくる。

完全に不意^{ふい}を突かれた格好^{かつこう}で、悟空はそれをギリギリでかわすことしかできなかった。

悟空をかすめた気のビームは、はるか後方にある冰山^{つらぬ}を貫いて、さらにその向こうの山をまんなかあたりから削り取り、はるかかなたの空中で大爆発を引き起こした。

いまの一撃で、完全に地形が変わっていた。

「げげ！ あんなのが地面に当たってたら……」

振り返った悟空が、顔を引きつらせる。

「くっ……」

やはり、その破壊力に驚きの目を向けていたベジータが、キッとブロリーをにらみつけた。

「はあっ！」

気合いととも、ベジータが全身に赤いオーラをまとう。同時に、空気を切り裂いて、一瞬のうちにブロリーとの距離を詰め、十分に力の乗ったパンチを打ちこんだ。

どうだとはかりに顔をあげたベジータは、頬^{ほお}にわずかに拳^{こぶし}を食いこませただけのブロリーが、自分をにらみ返していることに気がついた。

「——なに」

ベジータはうめいた。眼前^{がんぜん}に、巨大なパンチが迫る。とっさに腕を交差し、受け止めるが、体が大きく後方に飛ばされるのを止めることはできなかった。

距離を取るため、飛ばされた勢いをいかしてそのまま後ろ向きに加速するベジータだったが、ブロリーはわずかな時間で追いつき、パンチを繰り出してきた。

それを見切ってかわし、スキだらけのブロリーの脇腹^{わきばら}を蹴る。ブロリーはきいたようすも見せず、そのままパンチを放ってきた。

それをまたベジータがかわし、今度は後頭部^{こうとうぶ}めがけて蹴りを入れる。ブロリーの上半身がわずかに前のめりになるが、それだけだった。続いて振り回されるブロリーの腕を、ギリギリの距離でかわすベジータだったが、その動きからは明らかに余裕がなくなっていた。

フリーザが、明らかに興奮したようすでパラガスにたずねた。

「なんですか、あれは！」

パラガスは、わずかに青ざめた顔でその問いに答える。

「あ……あれは、サイヤ人^{おおざる}が大猿^{にぶ}になった時のパワーを、動きの鈍い大猿になることなく、人間のまま変身できるようにしたらしいのですが……」

フリーザは小さく首をかしげた。

「なにか問題でも？」

「そ……それが……」

パラガスは言いよどんだが、フリーザに先をうながされ、続けた。

「自分でも……コントロールがきかないようで……」

「ぐわあああ!!!」

ブロリーが、組んだ両手を頭上に振りかぶり、叫び声とともに振りおろす。

ベジータは、両腕を頭上で交差させ、ガードの姿勢をとった。だが、ブロリーのパワーは予想以上だった。

「ぐわ！」

ガードの上からダメージを食らい、ベジータは姿勢を崩^{くず}して吹っ飛ばされた。

氷の塊^{かたまり}を突き破り、地面に激突しながら、なんとか体勢を立て直す。ベジータは、ゆっくりと立ちあがりながら、目の前の氷山^{お た}の上に降り立つブロリーを、いらだたしげに見あげた。

「くっ！」

その視線を受け、ブロリーが姿勢を低くする。いまにも飛びかからんばかりに力をためたところで、不意にかけられた声に動きを止めた。

悟空だった。

「おい、おまえ！」

ブロリーの目が、ぎろりと悟空に向けられる。

「そろそろ、オラとやろうぜ」

悟空は、防寒用の上着^{ぼう かん}を脱ぎすて、準備運動のように小さく、軽く跳ねはじめた。

首をくると回し、肩をほぐしながらステップ^ふを踏み続ける。その顔は、これからあの怪物のようなブロリーと戦うとは思えないほど、落ち着き、微笑^{ほほえみ}すら浮かべていた。

「ぬううう……」

ブロリーは悟空に目をすえたまま、低くうなり声をあげ続けていた。それは闘志を燃やしているというよりは、とめどなく噴^ふき出す^だ力に苦しんでいるようにも見えた。

DRAGONBALL SUPER



悟空の表情が変わる。同時に、踏んでいたステップがぴたりと止まった。

そうして、悟空は、こちらを見つめるブロリーに、真正面^{ま しょうめん}から視線を返した。

「ぐおおおおお!!!」

手で触れられそうな密度のパワーが、ブロリーの全身から噴き出した。全身の筋肉がふくれあがり、巻きつけられたコントロール用の首輪が弾け飛ぶ。

悟空の表情がぎゅっと引き締まった。同時に、半身^{はん み}になり、片腕を前に突き出すいつもの構えをとる。

「ふうううう……」

悟空が息を吐き出しながら、深く腰を落とした。

それに反応したか、ブロリーは一步退きながら、両腕を交差する構えをとった。

「ぬうううん！」

爆発したかのように、ブロリーから気が放出される。

それが合図になったかのように、悟空が飛び出していた。

わずかに遅れて、指をカギ爪のように曲げ、ブロリーも氷山を蹴って前に出る。

「はああああ！」

ほぼ同時に、ふたりの繰り出す拳が交差した。もろに打撃を食らい、悟空が吹っ飛んでいく。

空中で踏みとどまった悟空は、素早く^{す ばや}ブロリーに接近して反撃の拳を突き出した。

だが、スピードはブロリーが上だった。悟空の攻撃は届かず、ブロリーのパンチだけが悟空を打ちのめす。

「ぐっ！ はああ！」

それでも、悟空は打撃の反動を利用して蹴りを放った。それに対し、ほぼ本能だけでブロリーが応じる。ブロリーの蹴りが、悟空の蹴りを受け止め、激突したパワーが稲妻^{いな ずま}に似た閃光^{せん こう}を放った。

「があああああ！」

「ありやりやりやりや!!」

そのままお互い至近距離に踏みとどまって、ふたりの目にもとまらぬ攻防がくりひろげられた。

激しい打ち合いの末、両者の間にわずかな距離^あが開く。そこに、素早く蹴りを打ちこんだのはブロリーだった。

「ぐわああ」

かろうじてガードしたものの、ブロリーのパワーを受け止めきれず、悟空の体が大きく吹っ飛ばされる。だが、吹っ飛ばされながら、悟空は両手を上下に重ね合わせるように後ろに引き、かめはめ波の構えをとっていた。

「はあああああああっ！」

完全に不意を打つ攻撃だったが、ブロリーは紙一重でそれをかわしていた。さらに、残像^{ざん ぞう}とともに姿を消す。

悟空は迷わず振り返り、気弾をばらまいた。同時に出現したブロリーは、驚くほどの俊敏^{しゅん びん}さでそれをかわし、避けきれないものを腕^{はじ}で弾き飛ばす。

「がああ！」

悟空が横に飛んだ直後、ブロリーの放った気弾が襲いかかる。数発を腕で弾いてかわしながら、反撃のスキをうかがうが、その時にはすでにブロリーが横に回りこんでいた。

気づいた悟空がガードするより早く、ブロリーの拳が顔面に食いこんだ。

「ぐあああああ！」

きりきりと回転しながら、悟空が近くの氷山に突っこんでいく。氷の斜面に大穴を開け、それでも勢いが止まらずに、なんとか手足を踏ん張ってブレーキをかけたところで、目の前に、すでにブロリーが迫っていた。

悟空は反射的に頭をガードしていた。それをあざ笑うように、ブロリーが悟空の腹部にパンチをめりこませる。

「ぐ……ぎぎ……」

なんとか踏ん張ろうとした悟空だったが、こらえきれず、体をくの字に折って吹っ飛んだ。かすむ目でブロリーを見やると、^{もう}猛然と加速しながら拳を固め、こちらに向かってくるのがわかった。

「ぐあああああっ!!」

あっという間に追いついたブロリーが、もう一度悟空にパンチをぶちこむ。氷の斜面を突き抜けて吹っ飛びながら、悟空は、緑色に輝く炎のようなオーラが氷山の山頂を吹き飛ばす光景を見た。

そのオーラの中心には、^{たけ た}猛り立つブロリーの姿があった。

「ぬうおおおお……!!」

ブロリーの^{お たけ}雄叫びが、大地を揺さぶる。

「ありやあ！」

気合いとともに、悟空が手足を広げて空中で止まった。

こうして手合わせしてみても、はっきりとわかった。強い。とんでもなく。

悟空の手足に、^{とり はだ}鳥肌が立っていた。

「ふっ……」

体の芯から震えがきた。とても恐ろしい相手のはずなのに、悟空はなぜか笑っていた。

悟空は両手を腰に構え、体を折るようにして気合いをこめはじめた。

「ぬううう……はあああああああ!!」

悟空の周囲の空気が、爆発的にふくれあがる。同時に、^{さか だ}逆立った髪の毛は金色に輝き、^{ひとみ}瞳が黒から薄い青に変わり、強烈なオーラがその周囲を取り巻いた。

「はっ!!!」

^{スーパー}

超サイヤ人となった悟空は、ブロリーに向かって猛然と飛びかかった。

ブロリーもまた、悟空の変化に気づいていた。突然出現した巨大な氣に反応して、接近する悟空に飛びかかっていく。

すれ違う一瞬、ブロリーは悟空に氣弾を放った。かわせないタイミングで迫るそれを、悟空は^{しゅ どう}手刀で弾き飛ばし、素早く方向を変えてブロリーに接近戦を挑む。

激しい攻防があった。ベジータとの戦いでは、ブロリーは体力にものを言わせ、攻撃をかわさず強引に反撃していたが、悟空に対してはほぼ対等の打ち合いをくりひろげていた。

技がおなじレベルなら、パワーに^{まさ}勝るブロリーが有利だった。

「がっ！」

体当たりを受け、弾き飛ばされた悟空に、ブロリーが両拳を合わせて振りかぶった。瞬時に悟空はブロリーの背後に回りこみ、かめはめ波の構えをとる。

超加速で脱出するブロリーに、悟空も加速して追いつがる。ふたたび激しい打ち合いが始まるが、長くは続かなかった。

ブロリーが防御を捨て、悟空に蹴りを入れる。もはやブロリーの攻撃は、^{スーパー}超サイヤ人のパワーで受け止められるものではな

かった。

姿勢を崩した悟空に、ブロリーがさらに襲いかかる。なんとか受け流していた悟空だったが、劣勢は明らかだった。

「！」

ブロリーの繰り出したパンチは、なんの細工もない真正面からの正拳突きだった。だが、それを止められない。

吹っ飛ぶ悟空に、ブロリーは気弾を手さらに向かっていく。反撃の拳をかわし、悟空の体に気弾を押しつけて、ブロリーは後方へ飛んだ。

「ああああああ!!」

気弾の爆発に弾き飛ばされた悟空の背後に、高速移動で回りこんだブロリーが出現した。そうして、振りあげた拳で悟空を真下に向かって叩きつける。

四つん這いで着地した悟空の周囲が、ズンと音を立ててクレーターのように沈んだ。

「だっ！」

頭上から突っこんでくるブロリーに、悟空は逆立ちして蹴りを見舞った。

空中で姿勢を崩したブロリーは、いったん距離をとって着地する。悟空もまた、ひと息入れるように離れて地面に降り立った。

ブロリーが、両腕を腰に回し、姿勢を低くしてうなりはじめた。次の攻撃に備えて、力をためているのだ。

ブロリーに向かって、空気が移動するのがわかった。それは体内のパワーに呼応して、その周囲で渦を巻いていく。

「おおお……あああああ！」

悟空はそのブロリーを見て、ニヤリとなった。

「へへへ……」

楽しくてしかたがなかった。悟空が技を見せれば、すぐにそれに対応して成長してくる。こんな相手は初めてだった。パワーだけなら、超サイヤ人ゴッドを超えている。スピードも技も、超サイヤ人のレベルでは、とてもかなわなくなっている。

それなら——。

「うおおおおお!!」

ブロリーが、空気を切り裂いて前に飛び出した。

「ふっ……」

悟空は素早く後退して、ブロリーとの距離を保ちながら、体内の気を変化させていった。

「はあああああああああっ！」

その気合いとともに、激しく噴き出していたオーラが、悟空のなかに吸いこまれるように消える。

動きを止め、ブロリーに正対した悟空の瞳は赤く染まっていた。同時に、髪の毛も燃えるような真紅に変わっていく。

ざあっと音を立て、赤いオーラが足もとから上に流れると同時に、悟空の周囲から激しい気の流れが完全に消えていた。

スーパー

超サイヤ人ゴッドに変身した悟空は、なんの構えも取らず、突進するブロリーに向き直った。



ブロリーはひるまなかった。

^{スーパー}超サイヤ人ゴッドは、ベジータとの戦いで一度目にしている。戦えない相手ではない。一度、ベジータを追いかんだ経験から、ブロリーのなかに自信が生まれつつあった。

そのまま勢いを殺さず、ブロリーは悟空のもとに突っこんでいった。

「があっ！」

獣の声をあげ、ブロリーがパンチを打ちこんだ。だが、悟空はそれにパワーでは応じなかった。

^{て ごと}手応えなく、パンチが地面に叩きつけられる。

なにをされたか、ブロリーには見えていた。悟空は、攻撃が命中するほんのわずか前のタイミングで身を引き、その力を地面に向けて流したのである。

「ぬううう！」

いらだちの声とともに、ブロリーは地面を打ち砕いていた。^{こお}凍った地面にヒビが入り、^{じ わ}地割れが生まれる。

悟空は後方に飛んで距離をおきながら、ブロリーに向かって叫んだ。

「おい、落ち着け！」

ブロリーは悟空をにらみつけ、^ほ吠えた。

「ぐおおおおおおお!!!」

^{け た}地面を蹴立てて、ブロリーが突進する。

「がああああああ！」

悟空はブロリーにじっと目をやったまま、^{び どう}微動だにしない。と、その全身から、^{かげろう}赤いオーラが陽炎のように立ちのぼっていく。

動こうとしない悟空に、ブロリーは振りあげた拳を構えて突進した。突風のように悟空の眼前に迫り、恐ろしいまでのパワーを乗せた拳を振りおろす。

「ぬあっ！」

「はあっ!!」

拳が届く寸前、悟空が鋭く^{すると}気合いを発しながら手を突き出した。同時に、ブロリーのパンチは、^{しば}見えない壁に阻まれたようにぴたりと止まっていた。

「ぐうっ……」

拳だけではない。ブロリーの体全体が、びくともしなくなった。見れば、全身に悟空のまといっている赤いオーラがからみついている。

「ぐうっ！ がああっ!!」

すさまじいパワーを集中して、ブロリーはこのいましめから^{のが}なんとか逃れようと身を震わせる。赤いオーラの^{しば}縛りつける力と、ブロリーのパワーがぶつかり合い、悟空の足が地面にめりこむが、それだけだった。

悟空は静かな表情のまま、ブロリーに語りかけた。

「オラたちはここで……この地球で平和に暮らしている」

ブロリーは、悟空をにらみつけ、全身の筋肉を盛りあがらせて前に出ようとする。恐ろしいまでの力の衝突に、周囲の地面

が割れ、盛りあがり、爆発したかのように氷や土砂が噴きあがった。

「まあ、いろいろ……あつたけどな……」

言いながら、悟空の脳裏^{のう り}に、いままでの戦いが思い出されていった。

ピッコロ大魔王^{だい ま おう}との戦い。

そして、実の兄ラディッツに勝つために、自分を犠牲^{ぎ せい}にしなければならなかったこと。

ベジータとの死闘、ナメック星でのフリーザとの決戦。

人造人間^{じん ぞう にん げん}たち、セルとの戦い。

魔人^{ま じん}ブウの異次元の強さ。

本当にいろいろなことがあった。絶体絶命^{ぜつ たい ぜつ めい}の危機もあったし、いまは仲間になっているベジータやピッコロたちとの出会いもあった。

悟空はブロリーに向かって両腕を広げ、笑いかけた。

「とにかくおめえは悪いヤツじゃねえ……オラにはわかるんだ」

ブロリーはじっと悟空を見返していた。抵抗が、わずかに弱まったように感じられる。

「こんなことはやめろ！ 悪いヤツらの言うことなんて、聞くことはねえぞ」

戦いのようすをながめていたフリーザが、悟空の言葉に反応して低く笑った。

「ふふふ……」

フリーザは気づいていたのだった。ブロリーの生い立ち^{お た}が、けっして悟空の言うようにはさせないだろうということに。

ブロリーはゆっくり目を閉じた。そうして、なにかを考えるようにじっと沈黙する。

ふたたび目を見開いたブロリーの表情は、ほんのわずかやわらいだように見えた。

一瞬、息を抜きかけた悟空は、しかし、続いて押し寄せたすさまじい衝撃に表情を変えた。

「ぐうう、がああああ!!」

さっきまでビクともしなかった金縛り^{かな しば}が、ブロリーの力に押し負けはじめている。

「くっ！」

悟空は意識を集中し、拘束^{こう ぞく}する力をさらに強めていった。赤いオーラがブロリーを取り囲み、縛りあげる。

「がああ、ぐぐぐ……」

だが、そこまでだった。

「があっ！」

縄のように絡みついた悟空のオーラを、ブロリーは、絶叫^{ぜつ きよう}とともに引き裂いた。

ブロリーは、体が自由をとりもどしたことを確かめ、悟空に向かってパンチを放とうとする。同時に、全身から噴き出したオーラが、悟空の体に絡みついてきた。

「むっ」

それは、悟空がブロリーを縛っていた気と同じものだった。距離を取ろうと飛びあがった悟空は、足をつかまえられたことに気づいた。

「ぐっ……」

頭上から、ブロリーのパンチが降ってきた。絡みついたオーはたちまち全身をとらえ、悟空はその姿勢のまま身動きすることができなくなっていた。

悟空はすさまじい集中力を動員して、かろうじて首だけを動かした。ブロリーの拳が悟空の頬をとらえたのは、まさにそのタイミングだった。

「ぐ!!」

その衝撃のおかげか、悟空の体に自由がもどった。悟空は頬にパンチを受けたままの格好で、力まかせにそれを押し返していく。

そうして、ブロリーの腕に自分の腕を絡みつかせ、反動をつけて一本背負いの要領で投げ飛ばした。

地震かと思わせる衝撃が、あたりに広がった。

「うわわわわ!!」

足もとを襲った激震に、ブルマがあわてふためく。ベジータに助けられ、空中に逃れると、氷の平原はさっき上空から見おろした時とはまったく違う風景に変貌していた。

ブロリーの戦いぶりは、ほとんど天変地異の類と一緒にあった。

「まあ、あらあらあら」

ブルマたちの横で、やはり空中に逃れたウイスが気楽な調子で笑っていた。

一方、フリーザの宇宙船も、その衝撃に大きく揺さぶられていた。

フリーザ自身は気にしていなかったが、キコノたちのように戦闘力がごく低い存在にとっては、そうは言っていられないようだった。

「フリーザさま、少し離れていいですか？」

戦闘に見入っていたフリーザは、キコノの声に振り返り、もう一度ちらとブロリーのほうを見やっからうなずいた。

「そのほうがよさそうですね」

それから、胸もとで抱えるように浮かべていたドラゴンボールを、キコノに向けて押しやった。

キコノは、ばらばらに飛んできたボールを受け止めきれなかった。こぼれたボールを、そばにいた人影がキャッチする。ブロリーを連れてきた飛行士たちだった。

キコノはフリーザに向かって叫んだ。

「ドラゴンボール、確かに^{あず}お預かりしました！」

不安定な足場からふわりと浮かびあがり、宇宙船が上空へと離れていく。

フリーザはそれを見送ってから、近くに立っているパラガスに顔を向けた。

「さて、これで心おきなく、あなたの息子の活躍が見られますね」

「え……」

呆然と振り返ったパラガスの顔は、青を通り越して真^ま白^{しろ}になっていた。

戦いは続いていた。かなりの高さから見ても、ブロリーの戦いぶりがどれほどかわかる。

チライは、ブロリーが放つ攻撃の輝きや、大地が揺れるさまを宇宙船の窓越しに見おろして、驚きを隠せなかった。

「あ……あそこまですごかったんだ……あいつ」

「……だが、ありやまともじゃないぞ……」

チライの隣で、やはりブロリーのようすを見ていたレモは、眉間にシワを寄せてそうつぶやいた。その腕のなかでは、ドラゴンボールが光を放っている。

「ああ……」

レモの言葉にチライがうなずく。その顔は、怒りとブロリーへの同情で複雑な表情を浮かべていた。

ブロリーの優勢は明らかだった。さっきまでは対等か、それ以上に見えたあのサイヤ人は、いまでは一方的にブロリーの攻撃を防ぐことしかできなくなっている。

だが、あれはチライたちの知る、穏やかで優しい青年ではなかった。

「あのオヤジのせいだよ」

「……ああ」

レモが相槌を打った。

「おとなしいブロリーを、強引に自分の思い通りの戦士に育てた結果だよ……」

チライは、パラガスが食堂でブロリーを止めた時のことを思い出していた。その前に、フリーザの前で父親があのリモコンを取り出した時のおびえ方を見れば、言うことを聞かせるためにどれだけあれを使って痛めつけられたか、考える必要もない。

「それが、キレたのか」

「なんてかわいそうなヤツだ……」

チライの目には、ブロリーが泣きながら戦っているようにしか見えなかった。

パラガスはおびえていた。ただだらしなく座りこみ、体を小刻みに震わせている。

「ああ……このままでは、わたしはブロリーに殺されてしまう……」

ブロリーの戦いを見るでもなく、パラガスは頭を抱えるようにして嘆き声をあげるだけだった。

「ああああ……終わりだ……」

そのようすを、フリーザは冷ややかに見おろすのだった。

戦いはすでに一方的だった。

悟空は、ブロリーのパンチを腹に受けて吹っ飛び、地面に体をめりこませていた。

そこに、追いついてきたブロリーが、足でさらに踏みつける。

「がああっ！」

かろうじて意識を保っていた悟空は転がって逃げるが、ブロリーの攻撃は執拗だった。

体の痛みにもうめきながら、何度も踏みつけてくるブロリーをかわし、悟空はなんとか姿勢を立て直す。

「はっ！」

悟空は、手のなかに気弾を作り出し、ブロリーにたたきつけようと飛びかかった。

だが、攻撃が届く前に、ブロリーの手が気弾ごと悟空の手をつかみ、握りつぶす。

「ぐわ！」

悟空は、ブロリーから身を離そうと後ろに飛んだ。

ブロリーは、そこで素早く悟空の足をつかみ、パワーにものを言わせて振り回しはじめた。右に、左にと地面に叩きつけられ、そのたびに悟空の絶叫が響きわたる。

さらに、ブロリーは悟空の頭をつかんで、近くにあった氷壁に突進した。ガン、と悟空の顔をざらつく氷の壁に押しつけ、絶叫しながら駆けだしていく。

悟空の叫び声とともに、氷の壁が一直線に削り^{けず}とられていった。そうして、氷の壁がとぎれたところで、ブロリーは悟空を力まかせに放り投げていた。

吹っ飛んだ悟空が、遠くに落ちるのが見えた。そのまま、二度、三度とはねて、ようやくあおむけになって動きを止める。

ぼろきれのように地面に転がった悟空の前に立って、ブロリーは天を仰ぎ、雄叫び^{あお お たけ}をあげた。
「があああああ!!!」

フリーザは、その悟空のさまを見て、心楽しげに笑みを浮かべた。
「おやおや、このフリーザさまの出番がありませんねえ……」

『^{そん}孫!!』

ピッコロの声を聞いたような気がして、悟空の意識が暗闇の底から浮かびあがる。

うつすらと開いた目には、すぐそばで^{どう もう}癡猛な叫び声をあげるブロリーの姿が映っていた。
『なにがあつたんだ？ この気は、フリーザだけじゃないな……』

ふたたびピッコロの声が聞こえた。

『……あ、ああ、まあな』

心の中でそう答えながら、悟空は体の感覚がもどってくるのを感じていた。
『取りこみ中のようだな……』

悟空は、空気を求めて口を開き、すっかり縮^{ちぢ}んでいた肺^{はい}を無理やりふくらませた。新鮮な空気が流れこみ、呼吸が再開する。

『そういう、こと』

『とんでもない気だ……』

気を探^{さぐ}って、ブロリーの存在に気づいたのだろう。聞こえてきたピッコロの声には、驚きと同時に、悔^{くや}しげな響^{ひび}きがあった。
『オレが行っても、かえってジャマか』

悟空はゆっくり身を起こしながら、ピッコロに言った。

『そのまんま、待機^{たい き}してくれ……』

ブロリーの雄叫びが止まった。起きあがる悟空に驚きの表情を向け、それから身を低くして構えをとる。
『ヤバくなったら、そっちに瞬間移動する』

ピッコロにそう言いつつ、ふらふらと立ちあがる悟空に、ブロリーはどこかうれしげな表情を浮かべた。

やはり、ブロリーもサイヤ人なのだった。戦いは恐ろしく、嫌^{いや}なことだったはずなのに、いまは、悟空がふたたび立ちあがったことによりこびすら感じている。

戦うことこそがすべて——それが、自らを戦闘民族と呼ぶサイヤ人の天性とでもいうべきものだった。

『おまえがそんなこと言うなんて、相当の相手だな……』

口を開こうとして、悟空は腕に走った苦痛に顔を歪めた。そうして、力のない笑みを浮かべ、声に出してこう言った。

「へへへ……じゃあな」

悟空は、まっすぐブロリーを見あげ、笑みを浮かべたまま自分の道着に手をかけた。すでにボロボロになっていたそれを無理やり引きちぎり、脱ぎ捨てる。

そうして、悟空は、渾身の気を練りはじめた。

「おおお……」

超サイヤ人でもなく、超サイヤ人ゴッドとも違う、さらに異質で攻撃的なパワーが、悟空を包みこんでいく。

「りゃああああ!!!」

悟空の髪が青く染まり、同時に、青白いオーラが衝撃波とともに周囲に広がっていく。

サイヤ人の神ともいえる、赤いオーラをまとった超サイヤ人ゴッド。それがさらに限界を超え、次元の異なる力を手にしたものの。

悟空が変身したのは、その超サイヤ人ゴッド超サイヤ人——あるいは超サイヤ人ブルー——と呼ばれる姿だった。

ブロリーは、悟空が新たな姿に変身するのを見届けてから、楽しげにも見えるようすで身構えた。

悟空が顔をあげる。青く輝く瞳が、まっすぐにブロリーを見据えた。

次の瞬間、恐ろしいパワーを秘めたふたりのサイヤ人は、地響きを立てて激突した。その衝撃で地面は大きく割れ、ひと抱えもある岩が小石のように舞いあがった。

激しい攻防の末、ブロリーはふたたび悟空の足をつかんでいた。そのまま、おなじように足を持って地面に叩きつける。

だが、悟空はけろりとした顔で、ブロリーに向けて気弾を放っていた。至近距離でけた違いの威力を持つ気弾を受け、ブロリーは悟空の足を放して吹っ飛んでいった。

遠ざかるブロリーめがけて、悟空は地面を蹴り、すさまじいスピードで飛びあがった。

ブロリーは追ってくる悟空に、無数の気弾を放って迎撃する。

だが、悟空は気にもせず、まっすぐそのなかに突っこんでいった。すぐさま、空中に無数の爆発が広がっていく。

「だりゃー！」

無数の気弾を突き破り、悟空がまっすぐ飛び出してきた。

空中で待ち構えるブロリーを、悟空の拳が直撃する。負けずにブロリーもパンチを返し、そして、悟空は殴られるままに、さらに殴り返した。

らちがあかない打ち合いにしびれを切らせたか、ブロリーが大振りのパンチを叩きつける。悟空はそれを受け、力をそらせて、そのままの流れでブロリーの巨体を両腕で抱えこんだ。

なんとかそれを引きはがそうと、ブロリーが悟空の背中を殴る。だが、どれほどの力をこめようとも、悟空の腕は外れなかった。

悟空はブロリーの体を抱えたまま、地上へと一気に降下した。そのまま地面を突き破り、地下深く潜っていったふたりは、地底を流れる溶岩のなかに飛びこんでいく。

溶岩のなかでも戦いは続いた。ブロリーが手^のを伸ばし、悟空の首をつかむ。悟空はブロリーの手首をつかみ返し、大口を開けて思いきり噛みついた。

「ぐああ！」

悲鳴をあげるブロリーは、悟空から手を振りほどき、苦しまぎれの蹴りを放ってきた。

悟空はそれをやすやすと見切り、逆にブロリーの足をつかみ、振り回した。

「うおりゃー！」

悟空に放り投げられたブロリーは、そのまま地下の天井を突き破り、地上へと飛び出していった。

後を追う悟空が地上に飛び出す。はるか上空で、巨大な気^{かたまり}の塊を頭上に作り出したブロリーが、それを待ち構えていた。

「があああっ!!」

ちょっとした山ほどの大きさの気弾が、悟空に向けて放たれた。

悟空は恐れたようすもなく、その巨大な気^{かたまり}の塊を受け止めた。だが、その勢いに押され、地面の上で大爆発が起こる。

爆発は地面を打ち砕き、地底を流れる溶岩を噴き出させた。

氷の平原が、一瞬で燃える大地に変わっていた。

そのただなかに、悟空が立っていた。ダメージを負^おったようすはない。

ブロリーが吠^ほえ、戦いが再開した。



爆発の余波^{よは}は、フリーザたちのところにも襲いかかっていた。

「が……ぐ、うわっ！」

叩きつけた突風に耐えきれず、パラガスが吹き飛ばされていく。

フリーザは素早く障壁^{バリアー}を張り、横目でパラガスのあわてる姿をながめるだけだった。

近くにあった岩にしがみついた格好で、パラガスは呆然と顔をあげた。

遠くでは、ブロリーと孫悟空がなおも戦っていた。

彼らが拳を打ちつけるたび、空気^{めいどう}が鳴動し、山が崩れ、大地が割れる。そして、それはおさまる気配がまったくなかった。

「も……もしかしたら、ベジータ王の言ったことは、正しかったのか……」

パラガスは恐怖に顔を歪めながら、絞り出すようにそうつぶやいた。

スーパー

超サイヤ人ブルーの力は、ブロリーのそれを少しずつ上回りはじめていた。

悟空の放つ打撃を、ブロリーは受け止めきれない。一方、ブロリーの攻撃は悟空に見切られ、空^{から}振りすることが多くなって

いた。

「がああ!!」

悟空のパンチが、ついにブロリーをまともにとらえていた。

空中で姿勢を崩すブロリーに、悟空が連続で攻撃をしかけた。体当たりから、なおも反撃を試みようとするブロリーに裏拳うらけんを打ちこみ、ひるんだところをゼロ距離で気を炸裂さくれつさせる。

「はああああ!!」

吹き飛ばされたブロリーは、溶岩の流れる山肌に叩きつけられ、周囲をクレーターのように陥没かんぼつさせた。

フリーザは、死んだような目で岩に背中を預けているパラガスを、肩越しに振り返った。

「今度こそ、これ以上はないのですか？」

「は……はい……」

「なるほど……」

フリーザはブロリーのほうに目を戻しながら、悟空が超サイヤ人スーパーに覚醒かくせいしたナメック星でのことを思い出していた。

あの時、悟空のそばにいたクリリンという男を殺してみせたことが、直接のきっかけになったはずではなかったか。

フリーザはもう一度パラガスに目をやって、それから邪悪じやあくな笑みとともにつぶやいた。

「試ためしてみましようか」

フリーザはパラガスに向き直り、まっすぐ指先を心臓に向けた。

気配に気づいて、パラガスがぼんやりと顔をあげた。一瞬遅れてフリーザの意図いとに気づき、あわてふためきながら逃げ出そうとする。

「な……あ、あああ！」

フリーザの指先が、閃光を放った。

口を開きかけたまま、パラガスの表情が凍りつく。胸のあたりにこげた穴あを開け、力を失ったパラガスの体は、ぐったりと前のめりになった。

フリーザは満足げにそれをながめてから、くると振り返り、咳払いせきばらをしてからブロリーに向かってこう叫んだ。

「ブロリーさん!! これを見なさい!!」

自分を呼ぶ声に、悟空と戦っていたブロリーが振り返る。

「ブロリーさん！ お父さまが、殺されてしまいました!!!」

わざとらしく、大げさなしぐさで、フリーザはぐったりとなったパラガスを指さしてみせた。岩に背中を預けていたパラガスが、ずりたおりと横に倒れていく。

最初、自分の見たものがなにを意味するのか、ブロリーは理解することができなかった。

死は知っている。バンパの大ダニや、バアたちと戦って倒せば動かなくなる。バアは好きだから、そんなことはしなかったが。

だがそれが、パラガスにも起きることだと理解するのに、ずいぶん時間がかかった。ブロリー以外の人間にとっては、ほんの瞬またたくほどの時間だったが。

「ああ……」

ブロリーが目を見開いた。

その体が細かく震え、取り巻くオーラが乱れはじめる。

ブロリーにとって、ずっと一緒にいた父だった。首輪の罰は恐ろしかったし、バアをいじめてほしくなかった。訓練は厳しかったし、強くなってもほとんどほめてくれなかった。

それでも、パラガスはブロリーがただひとり、頼ってきた父親だった。

ブロリーのなかで、なにかが弾けた。

「があああああああーっ！」

ブロリーの周囲に、恐ろしく濃密で恐ろしく強い気が集まっていく。見る間に、それは信じがたい濃度まで高まり、そして、爆発した。いや、爆発したかに思われるほどの力を、周囲に解き放った。

「！」

衝撃を受け、悟空の体が吹き飛ばされる。なんとか姿勢を立て直し、距離を置いて着地した悟空は、ブロリーのいた場所から、巨大なオーラの壁が立ちあがるさまを見た。

天を衝くほどにそびえ立ったその柱のなかに、ゆっくりと浮かびあがる影があった。

もちろん、それはブロリーだった。だが、それはいままでとは明らかに違うものだった。

押し寄せる強烈な波動に、悟空の体がビリビリと震える。

空高く舞いあがったブロリーのまわりに、引き寄せられるようにオーラが集まっていく。やがて、それはブロリーを包む球体となった。

たたきつける嵐のような暴風のなか、ブロリーのようにすを見守っていたフリーザは、子供のように歓喜の声をあげた。

「やった!! 成功しましたよ！」

だが、フリーザはまだ気づいていなかった。自分が、なにを起こしてしまったのかということに。

ブロリーの絶叫は続いていた。緑の光を放つオーラのなかで、逆立った髪の毛が、金色に変わっていく。

それからブロリーは首を動かして、腫のない目で悟空をねめつけた。

「がっ！」

ブロリーを取り巻く球体が、収縮したように見えた。と、次の瞬間、球体が弾け、無数の気弾が周囲に向けてばらまかれた。

悟空は、自分に向かってきた気弾を、後ろに飛んでかわす。直後、その周囲で、いっせいに爆発が起こった。

離れた場所に立つフリーザにも、爆撃のような気弾が降りそぐ。

「ふふふ……」

満足げな笑みをもらし、フリーザは暴風のように力を振るうブロリーを見あげていた。

さらに、今度は明らかに悟空を狙って、雨のように気弾が降りかかってきた。

悟空は腰を落とし、手刀でそれらをすべて弾き飛ばす。

「ぐあああーっ！」

ブロリーが吠える。同時に、その周囲を取り巻くオーラの球が、その大きさを増していく。

悟空は、地面を削りながら迫る巨大な球体の前から、飛びあがって空中に逃れた。そのすぐ後を、球体から飛び出したブロリーが追う。

「いいですねえ……そんな顔を、待っていましたよ」

だが、そうつぶやくフリーザの顔からは、なぜか笑みが消えていた。どこかいらだたしげな表情で、フリーザはその戦いを見つめるのだった。

「なにをグダグダやっている！ バカめ!!」

ブルマたちのそばで、悟空の戦いを見守っていたベジータは、いらいらとそう言って飛び出していった。

追いつかるブロリーから必死で逃げる悟空のそばに近づくと、ベジータは叫んだ。

「一対一にこだわっている場合じゃないだろう！」

「悔しいが……そうらしいな」

悟空がそう答えると同時に、ベジータが一気に青いオーラを身にまとう。

「ええやあっ！」

スーパー

超サイヤ人ブルーとなったベジータは、悟空とともに反転してブロリーに立ち向かった。

連携のとれた動きで攻撃する悟空たちに、ブロリーは互角の戦いをくりひろげた。

拳を繰り出す悟空の足をつかみ、振り回しながら、ベジータの蹴りをかわして振り返る。

なおも攻撃しようとする悟空たちに、ブロリーは周囲に無数の気弾を作り出し、ふたりに向けてそれを放った。至近距離で気弾を受け、ベジータの戦闘服がはじけ飛ぶ。

その場をなんとか逃れたベジータと悟空は、なおもブロリーが放ってくる気弾をかわしながら目を合わせた。

「やるぞ、ベジータ！」

ふたりは地面すれすれを飛んで、追撃してきた気弾をやり過ごす。だが、さらに大量の気弾が、ベジータたちの頭上から襲いかかった。

「くそつたれがあっ！」

か そく げん そく

加速と減速を繰り返し、必死でブロリーの攻撃をかわし続けた悟空とベジータは、背中合わせで技の構えを取りながら、急ブレーキをかけ、振り返った。

「ギャリック砲！」

「かーめーはーめー……」

ふたりが構えた両手のひらの間に、強烈な気が高まっていく。

「はあっ!!!」

気合いの声と同時に、悟空とベジータの放つ合体した気功波が、ブロリーに向かったのびていった。

ブロリーは、両手に作り出した気弾を突き出し、真正面から悟空、ベジータ渾身の気功波を受け止め、消しとばした。

その衝撃で、地面を覆った溶岩が猛然と噴きあがる。

悟空とベジータは、襲いかかるブロリーをかわしつつ、手近な崖に向かって上昇していった。

「!?」

崖の上には、高みの見物を決めこんでいたフリーザが立っていた。

DRAGONBALL **S**SUPER



そのフリーザの目の前を、悟空とベジータが通り過ぎていく。それに一瞬遅れて、ブロリーの巨体があらわれた。

ブロリーは、じっとフリーザに目を向け、悟空たちを追おうとしなかった。

「おっ、お待ちなさい！ わたしはフリーザですよ!!」

まるでその言葉が合図になったかのように、ブロリーが問答無用の勢いでフリーザに襲いかかった。体当たりと同時に胸から発せられた気弾が炸裂する。

「うわああああ!!」

吹き飛ばされたフリーザは、なんとか反撃を試みるものの、ブロリーに一方的に殴られるばかりだった。

そのようすを後ろ目に見ながら、悟空はベジータの手を取った。

「ベジータ、いまだ、こっちに！」

「なっ、なんだ」

とまどうベジータをつかんだまま、悟空は額に指を当て、瞬間移動でその場から消えた。



「む！」

次に悟空たちがあらわれたのは、ピッコロが修業していた切り立った高い山の上だった。

出現するなり地面に倒れこみ、はあはあと息を切らせる悟空とベジータに、振り返ったピッコロがたずねてくる。

「おいっ、いったいなにが起こっているんだ！」

悟空と重なるように倒れていたベジータが、いまましげに悟空の手をもぎ離す。

「えい、離せっ！」

悟空はベジータとともに体を起こしながら、見おろすピッコロを振り返った。

「急ぐんだ、話はあとで——ピッコロ、仙豆持ってねえか？」

ピッコロは即座に答えた。

「いや、持ってない」

悟空は少しの間考えてから、ベジータのほうを向いた。

「おいベジータ、フュージョンって技、知ってつか？」

「フュージョン？」

座りこみ、ブロリーへの対策を考えていたらしいベジータは、悟空の言葉に顔をあげた。

「ああ、そういえば、トランクスから聞いたことがある——」

そこで、ベジータの顔色が変わった。

「くだらない動きをして、合体する技か!？」

「ああ！ フュージョン、するぞ！」

悟空の見たポーズを見て、ベジータが陰悪な表情を浮かべ、立ちあがった。

「ふざけるな！ キサマと合体なんて、するか!!」

「三〇分間だけだ！ 前にもポタラで合体したじゃねえか。ポタラはここにねえし、フュージョンするしかあいつに勝てねえぞ」

「合体はやむをえんとして——」

悟空の言葉はその通りだった。だが、ベジータは顔をしかめながら、心底イヤそうに言った。

「こんな、こんな、こんな動きを、オレにしろって言うのか！」

心底イヤそうに言いながら、ベジータは、フュージョンのポーズを意味するらしい珍妙な動きをして見せた。要するに、ベジータにとって、フュージョンの動きはひどく屈辱的だと言いたいらしい。

悟空は正しいポーズをやってみせながら、いたって真面目に答えた。

「これじゃねえと勝てねえ！ 地球がなくなっちゃうかもしれないぞ」

ベジータは腕を組み、背を向けた。

「フン！ だったら、それも運命だ」

「愛するブルマが、死んじまってもいいのか？」

痛いところを突かれて、ベジータの表情がひきつる。頬を紅潮させながら、ベジータは肩越しに答えた。もう、やけそだった。

「は、恥ずかしいことを言うな……チィ……わ、わかった、早く教えろ！」

フリーザは切り立った崖に押しつけられ、ブロリーのパンチの連打を受けていた。

何発もパンチを受け、壁がフリーザを中心に大きくくぼんでいく。

一方的だった。反撃を試みても、そもそもフリーザの攻撃がまったく通用しない。スピードも、パワーも、全部ブロリーのほうが上だった。

苦痛よりも、その事実のほうがフリーザには屈辱だった。

「ぬうああああああつ!!」

フリーザの体が、突然黄金に輝きはじめた。金色のオーラがバリアーのように広がり、ブロリーの体を押しやっていく。

「よくもこのわたしに、ここまでやってくれましたね……」

全身を金色に染めたフリーザが、ブロリーの目の前に降り立つ。

「そんなあなたには、このゴールデンフリーザの威力を、思い知らせてやりましょう！」

不敵な笑みを浮かべ、両腕を広げて構えを取ったフリーザが、その言葉とともに前へ飛び出した。

「フュ——ジョン！」

呆れ顔のベジータの前で、悟空とピッコロがポーズの手本を見せていた。

「ハッ！」

最悪なのは、道化^{どうけ}としか思えない腕の動きからの横歩きだった。それだけでも十分だったが、最後に両手の指を合わせてふたりで輪を作る仕草をする必要があるのだ。

「な、なんという恥ずかしいポーズだ……」

顔を引きつらせるベジータに、悟空の声が飛んだ。

「これがフュージョンだ。時間がないんだ、さあ、練習してみろ！」

ベジータは屈辱に顔を歪め、一歩、二歩と後ずさりながら固く目を閉じた。

「どうした、ベジータ」

悟空のお気楽な声が響く。

「くっ、死んだほうがマシだ……」

結果的に、それがフリーザに必要以上の苦難を招くことになった。

そもそも、ベジータはフュージョンをなめきっていた。

「フュ————ジョン、ハッ!!」

見つめるピッコロの片眉が、ピクリと動いた。

ポーズの完成と同時に、悟空とベジータの姿が溶け合うようにして消え、光とともに人影があらわれる。

「ヘヘッ！ これで最強だな!!」

だが、そこにいたのは、ただのデブだった。ぶくぶくとした体は感触がよさそうだったが、それ以上の取り柄がまるで見えなかった。

「ダメだ！ 指が合っていない!!」

ピッコロの指摘に、悟空とベジータの合体した太いのは、たじたじとなった。

「三〇分後にもう一度だ」

「いっ!?」

フュージョンは非常に難度の高い技だった。わずかでも呼吸やポーズが合わなければ、たとえ合体できてもまともな姿になることはできない。そして、三〇分間は、合体を解くことができなかった。

そう、つまりしくじれば、三〇分間はなにもすることがないのだ。

さっきに比べれば、多少はマシになったかもしれない。

ゴールデンフリーザのパンチは、まともに入れば少しはプロリーの動きを鈍らせられたし、渾身の一撃を放てば、そのまま受けないでかわすようにはなっている。

とはいえ、それだけのことだったが。

「ぎゃあああああああああ！」

フリーザのサンドバッグ状態は続いていた。

とはいえ、プロリーの攻撃をまろに食らいながら、三〇分以上耐え続けていること自体は、驚きに値するだろう。さすがフリーザ。宇宙の帝王を名乗るだけのことはある。

そして、悟空とベジータのフュージョンをものにする修業は、三〇分のインターバルを終えて、再開されていた。

「フュ————、ジョン！ ハッ!!」

今度出現したのは、まともに立っていることもできないような、ガリガリのやせっぽちだった。

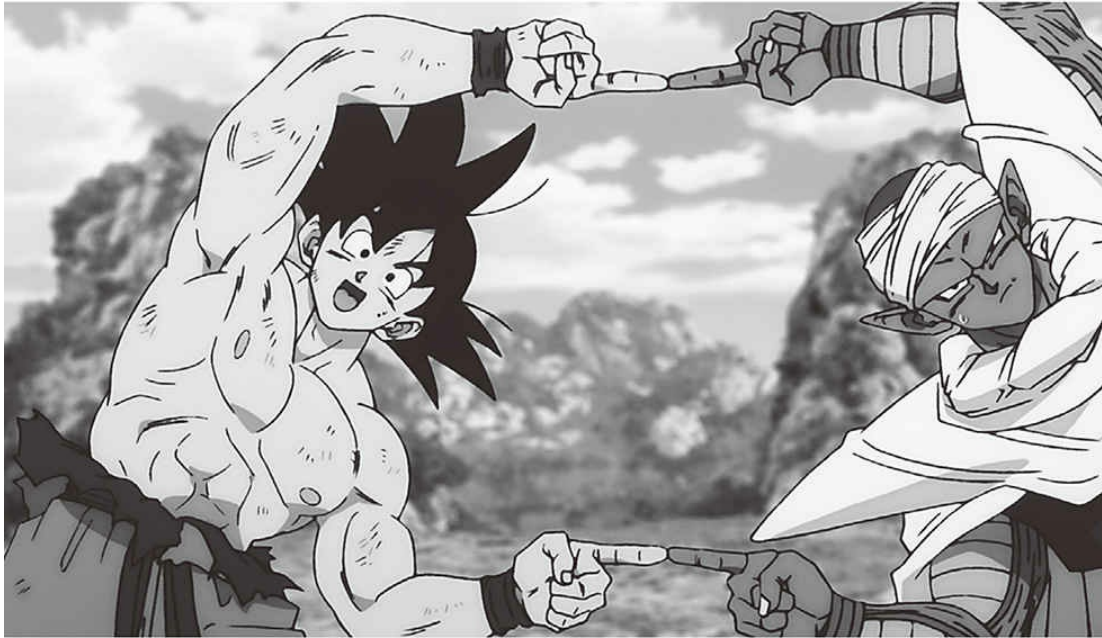
ピッコロの冷酷な指摘が飛ぶ。

「全然ダメだな。ふたりの角度が微妙に違う。また三〇分後だ」

そういうわけで、フリーザの戦いは、一時間以上に及んでいた。

さすがのフリーザも、そろそろ体力が尽き^つようとしている。プロローはといえば、無限の体力があるとでもいうように、変わらないパワーで攻撃を続けていた。

DRAGONBALL SUPER



「うおおおおお！」

ブロリーのパンチをまともに食らい、フリーザは絶叫とともに吹っ飛んでいた。

「がああああああ!!」

きりきりと空中を舞って、フリーザは背後の岩山に叩きつけられた。

「フュ—————ジョン、ハアツ!!」

「ぬっ！」

ピッコロの目が、悟空たちの動作を厳しく見つめる。

ふたりの体が光のなかに消えていき、そして、渦を巻くように絡み合ったふたつの光が、人の形に変わっていった。

とてつもない気が生まれ、押し寄せる。それを見て、ピッコロは満足げに笑った。

たたずむ人影は完璧だった。無駄な気は放っていないが、内に秘められた力は、遠くに感じるブロリーのそれに負けないどころか、さらに上回っているように感じられる。

「よし、さっさと行って倒してこい！ えっと……」

そこまで言って、ピッコロは困った。

「な、なんて呼べばいい？」

「え……ポタラの時はベジットだっけ……じゃあ、えっと……」

悟空とベジータの重なった声で、彼は言った。ひどく危機感のない口調に、ピッコロがしびれを切らせる。

「もういい、早く行け！」

「そうはいかない。確かに名前があったほうがカッコイイかも。今度は、えっと……」

それから、彼は顔をあげ、不敵な笑みとともにこう言った。

「ゴジータだ！」



其之六

サイヤ人超決戦

DRAGONBALL SUPER





ブロリーはそれ以上向かってこなかった。フリーザに、抵抗^{ていこう}する力もなくなったと感じたのだろう。

うなり声とともにオーラを噴^ふき出^だし、まったく関係のない方向へ飛び出していった。

「ぐう……すばらしい……なんというすばらしい戦^{せん}闘^{とう}力^{りき}」

間違いなく、いまあのブロリーに勝てる存在はいなかった。これだけ痛めつけられたからこそ、わかる。

あれは、フリーザにとって強力な武器になる存在だった。

そのフリーザの目の前に、突然出現するものがあつた。逆^{さか}立^だった髪^{かみ}の毛^けに、どこか見覚えのある顔立ちには、孫^{そん}悟^ご空^{くう}を思^{おも}わせるものがあつたが、明らかに別の人間だった。

「な、なんですか、あなた？」

「ふん、オレはゴジータ。悟^ご空^{くう}とベジータが合^が体^{たい}したんだよ」

「合体……？」

（げんそうに聞き返すフリーザに、ゴジータが続けた。）

「おまえは、長いこと死んでたから知らないだけだ。ふたりの強^たさを足^たしただけじゃないぞ、さらに大幅アップだ」

D RAGONBALL SUPER



「ひ……卑怯^{ひきょう}な！」

フリーザの言葉に、ゴジータは呆れ顔^{あき}で答えた。

「おまえ、よくそんなことが言えるな」

ゴジータは額^{ひたい}に指を当て、そのまま姿を消した。

ブロリーが次の相手に選んだのは、ウイスだった。

不意^{ふい}をつくように、猛然^{もうぜん}と襲^{おそ}いかかったブロリーだったが、ウイスは、その攻撃^くを苦もなくかわしていた。

すばやく動いたわけでもなく、なにか特別な技^{わざ}を使ったわけでもない。それなのに、ウイスはごく普通に見える動きで、ブロリーにかすりもさせなかった。

「こっちですよー」

余裕^えの笑みさえ浮かべて、ウイスは、ブロリーからひらりひらりと逃げていく。

いきりたったブロリーが、うなり声とともにウイスを追い回した。

「はい」

悟空たちの苦労^{くろう}がなんだったのかと思わせる軽やかさで、うなりをあげるパンチをかわし、ぎりぎりブロリーの間合い^{まあい}の外に距離を取る。

ゴジータが、ふたりの間に割って入るように姿をあらわしたのは、その時のことだった。

「あら？」

「ウイスさん、あとはオレにまかせてくれ！」

素早^{すばや}く構え^{かま}をとるゴジータに、ウイスは不思議^{ふしぎ}そうな視線を向けた。

「あなたたち、合体なんてできるんですね」

近くで隠れて、ようすを見守っていたブルマが、声をあげる。

「あー！ フュージョンってヤツか!!」

ブロリーは、ゴジータを目にした瞬間、警戒するように動きを止めていた。低くうなり声をもらしつつ、ゴジータをにらみつける。

ベジータを思わせる構えをとりながら、ゴジータはブロリーに向かって叫^{さけ}んだ。

「来い！」

ドン、と地を蹴^けってゴジータが飛びあがる。それを追って、ブロリーが疾風^{しつふう}のように姿を消した。

ブロリーが、すさまじい勢^{エネルギー}いで 気弾^{きだん}を連発してくる。それを余裕でかわしながら、ゴジータは、ひらけた場所までやってきたところで振り返り、腰^{こし}に両拳^{りょうこぶし}をあて、構えをとった。

「いっちょいくぜえ！ はあああああ……」

金色にゆらめく気が、ゴジータの体^おを押^おし包^{つつ}む。ゴジータの気合いが高まるとともに、それは巨大な炎のように広がり、逆立つ髪の毛^{はな}が金色の輝きを放った。

「おおおおお！」

だが、ブロリーはひるまない。拳を振りあげ、さらに加速して突っこんでいく。

超^{スーパー}サイヤ人に変身した直後のスキを突かれ、ゴジータはブロリーの一撃^{ごういっ}を食らっていた。だが、吹っ飛ぶ途中で強引^{ごういん}に姿

勢を立て直し、反転^{はんてん}してブローリーに襲いかかる。

ゴジータの体当たりでブローリーは吹き飛んだが、やはり反転して向かってきた。

そのまま、至近距離^{しきん}での壮絶^{そうぜつ}な格闘^{かくとう}が始まった。どちらも、相手の一撃^{いげつ}で大地^{ちき}を砕くほどの打撃に耐え、すかさず反撃を繰り出していく。

すさまじい打ち合いの末に、ついにゴジータの蹴りがブローリーの腹をとらえていた。

大地に叩きつけられるブローリーに向けて、ゴジータの放った気弾が拡散しながら降りそそいだ。

雨のように叩きつける気弾に打ちのめされ、立ちあがろうとしたブローリーが体を揺らがせる。

だが、それも一瞬のことだった。ブローリーは、キッとゴジータを見あげ、バリアーのように気の壁をはりめぐらせて、気弾^{きだん}を弾きとばしながらふたたび舞いあがった。

さらに互角^{ごかく}の戦いが続いた。ゴジータは、凄絶^{そうぜつ}な打ち合いをくりひろげながらも、その顔に不敵^{ふてき}な笑みを浮かべていた。

ブローリーのパンチが決まり、ゴジータが吹っ飛ぶ。

それを利用して距離をとったゴジータが、腰^{こし}のあたりで両手を重ね、気功波^{きこうは}の構えをとった。それに反応し、ブローリーも気功波の構えを取る。

「はあっ!!」

「があっ!!」

異次元^{いりよく}の威力を持ったエネルギーが、ふたりの間で激突^{せんこう}した。閃光^{せんこう}がほとばしり、音のない爆発が広がった。

次の瞬間、ゴジータとブローリーは、異様な光^{いよう}の渦巻^{うずま}く空間^{くうかん}のなかにいた。

次元^{きようかい}の境界が、ふたりの放つエネルギーに耐えきれず、裂けてしまったのだ。

その異変も気につけず、ブローリーが突進する。さらに数発^{おうしゅう}の応酬^{おうしゅう}のあと、ゴジータの蹴りで吹っ飛ばされたブローリーは、空中で急ブレーキをかけ、体を震^{ふる}わせながら気合いをこめていく。

「うおおあああ!!」

爆発的な気の解放とともに、ブローリーの髪が緑がかった輝きを放ち始める。その気が、さらに大きく跳ねあがった。

だが、ゴジータは、それにもひるまず突っこんだ。

ブローリー^{ほお}の頬にゴジータのパンチが食いこむ。顔を傾けただけでそれを受け止めたブローリーは、固めた拳をゴジータの腹に打ちこんだ。

「うあっ！」

一瞬、動きの止まったゴジータに、ブローリーの蹴りがまともにヒットする。そのまま吹き飛ばされ、空間の壁に激突したゴジータに、追ってきたブローリーが拳を叩きこんだ。

きらめくエネルギーの破片^{はへん}をまき散らしながら、ゴジータがさらに吹き飛んでいく。

「だあーっ!!!」

気合いとともに、ゴジータの気^きが変質した。体を取り巻くオーラが、一瞬で金色から青に変わる。

超サイヤ人ブルーとなったゴジータの動きに、ブローリーは反応しきれなかった。頬に食らったパンチに今度は耐えきれず、姿勢^{くず}を崩して後方へと押しやられる。そこから反撃する間もなく、続けて二発、三発と打撃を受け、ブローリーの体は薄暗^{うすぐら}い地面に叩きつけられた。

すぐさま体を起こし、ブロリーはカッ^あと口を開け、気弾を放った。

一発をかわして飛びあがったゴジータを、さらに何十発もの気弾が^{つい}び追尾する。それを余裕でかわし、ゴジータは、お返しとばかりにおなじ気弾をブロリーに向かって放った。

「かああ！」

その攻撃をかいぐり、ブロリーはゴジータのもとへ向かう。ゴジータもまた、^{しょうげき}は衝撃波を残してブロリーに向けて飛んだ。

ふたりのパンチが激突したとたん、ふたたび空間に異変が起きた。異空間の光が砕け散るように消え、もとの世界の風景が戻ってくる。

ブロリーとゴジータは、距離を置いて地上に^お降りていた。

ブロリーは着地の勢いを殺しきれず、ずるずると滑^{すべ}ってようやく止まる。なんとか構えは取っているが、ハアハアと肩で息をしていた。

「へへへ……」

一方、ゴジータはまったく疲れたようすがなかった。身を低くして構え、相手の出方をうかがう。

戦いは、^{むか}終わりを迎えようとしていた。

チライとレモは、フリーザの船の通路を走っていた。

ドラゴンボール^{かか}を抱えたレモが、先をゆくチライを必死で追いかけて叫んだ。

「このままじゃ、ブロリーはやられるぞ!!」

チライは、足を^{ゆる}緩めず、レモを振り返った。

「あいつは父親のせいで、ただの戦闘マシンにされたんだ。戦いたくて戦ってるんじゃない！」

それからチライは前を向き、さらに足を速めて続けた。

「ブロリーは、ホントは^{やさ}純粋で心優しいサイヤ人なんだ。死なすわけにはいかないよ!!」

ブロリーは呼吸^{ととの}を整えると、絶叫^{ぜつきよう}とともに駆けだした。

「ごあああああ！」

もはや技もなにもなかった。ブロリーはゴジータの直前で地面を蹴り、ジャンプしてキックを繰り出した。

ゴジータは、それを滑るような足取りでかわし、やり過ごす。

^{から}ぶ空振りに終わったと知ったブロリーは、振り向きざまに下から気弾を投げつけた。

ゴジータはそれを、手のひらを滑らせて作り出した気のバリアーではね返す。

「ぐあああ!!」

自分の攻撃をもろに食らって、苦悶^{くもん}の声をあげ、ブロリーは爆煙を手で払いながらゴジータの姿を探した。その顔に、身をきりとひねって繰り出したゴジータの回し蹴りが叩きこまれる。

「ぬぐわあっ！」

大きく身をのけぞらせ、ブロリーが^ほ吠えた。

離れて着地したゴジータは、両手に気弾を作り出し、ブロリーめがけて走りだす。それを見たブロリーは、体内の力をかき集め、口から気功波を吐き出した。

デタラメに振り回されるすさまじいエネルギーが、周囲の地面を吹き飛ばす。ゴジータはそれを見切って軽々とかわしてから、ブロリーの背中に気弾を投げつけた。

壮絶な爆発がブロリーを包みこんだ。ダメ押しとばかり、ゴジータはさらに無数の気弾をブロリーへと撃ちこんでいく。

「ぐううう……があああああああ」

爆発の光を透^すかして、苦しみもがくブロリーの姿が映し出された。

「はあああああああっ！」

ゴジータは足を止めると、腕を差しあげ、さらに密度を高めた気弾を作りあげていく。

「どりゃっ!!」

ブロリーがゴジータを見た。そこに、ゴジータの放った一撃が襲いかかる。

すさまじい爆発とともに、あたりにブロリーの絶叫が響いた。

「ぐわあああああああ……」

ふうっと息をついたゴジータが、周囲を包^{くら}んだ暗闇に驚いて顔をあげた。

地上に置かれた七つのドラゴンボールが、まばゆい輝きを放っていた。そこから巨大な神龍^{シエン ロン}があらわれて、空へと昇^{のぼ}っていく。

「あ、あれは……」

フリーザが、驚きの顔で空を見あげた。

神龍^{シエン ロン}はその巨大な体で、とぐろを巻くように空に浮かびあがると、地の底から轟^{うごめ}くような声で、言った。

「どんな願いも、ひとつだけかなえてやろう……」

「で、どうすりゃいいんだよ」

チライは、キコノの背中に銃^{じゅう}を突きつけながら、すごみのきいた声でたずねた。

彼女とレモのふたりは、ボールを届けるふりをしてキコノを人質^{ひと じち}にとったのだった。

まさか、ふたりがこんなことをするとは考えていなかったのだろう。宇宙船を着陸させ、神龍^{シエン ロン}を呼び出すのにそれほど手間はかからなかった。

じっとおし黙^{だま}るキコノに、チライはいらだたしげに言った。

「早く言えよ！」

強く銃口^{じゅう こう}を押しつけられ、キコノが顔をしかめる。

「ぐぐぐ……」

「もういい!! 撃つ！」

「わ、わかった！ 言う！」

キコノはあわててメモを取り出し、目を通してから答えた。

「そ……そのまま願いを……言え……」

拍子^{ひょう し め}抜けした顔で、チライがつぶやく。

「なんだ、それだけかよ」

それからチライは一度目を閉じて、心のなかで願いごとをさらってから神龍^{シエン ロン}を見あげた。

「あたしの願いは！」



「ごおおあああああっ!!!」

すさまじい気合いとともに、ブローリーは自分を包みこむ炎を吹き飛ばした。

それから、ブローリーは^{どうもう}獰猛な声をあげ、ぐっと身を低くしてから、^{しょうげきは}衝撃波を残して前に飛び出していった。

それを見ても、ゴジータは動かなかった。ブローリーの蹴りが届く寸前、軽く飛びあがって、上からカウンターで蹴りを叩きこむ。

交差した腕でそれを受けたものの、^あがら空きの脇腹にゴジータの回し蹴りが直撃した。

吹っ飛ばされ、着地したところで、ブローリーが気功波の構えをとる。

放たれた巨大なエネルギー波を、ゴジータはわずかに半身を引いただけでやり過ごし、^{すばや}素早く飛びかかってブローリーを^{なぐ}殴り飛ばした。

DAGONBALL **S**UPER



吹っ飛びながら、ブローリーは広げた手のひらから連続で気弾を放った。ゴジータはそれを軽やかにかわし、ブローリーに連続でパンチを打ちこんでいく。

うずくまるブローリーから距離をとったゴジータが、両腕を交差させて気を高めていく。

押し寄せる圧力に驚いたブローリーは、残った力をかき集めて迎え撃つ姿勢をとった。

ゴジータとブローリーの拳圧が、まともに激突した。生じた衝撃で大地が割れ、溶岩が噴き出してくる。

そのなかを、悲鳴に似た叫び声とともに、ブローリーが飛ばされていった。髪の色は金色にもどり、その表情は苦痛に歪んでいる。

ゴジータは一瞬で追いつくと、十分に気の乗った拳をブローリーの腹に打ちこんだ。吹っ飛ぶブローリーに追いつかり、さらに一撃。さらに加速して、とどめとばかりに、叩きつけた拳越しに圧縮した気を流しこむ。

ゴジータの気に縛りつけられ、ブローリーの体が、ビリビリと震えながら宙に舞いあがった。

それを見あげたゴジータは、気合いとともに一気にブローリーの体内の気を炸裂させた。

「だあああああぁっ!!!」

ブローリーの体から噴き出した青白いオーラが、大爆発を引き起こした。

ブルマとともに避難した高台の上で、戦いの行く末を見物していたウイスたちのもとに爆風が押し寄せる。

「すばらしい！」

ウイスが賞賛の声をあげる。

「これで、決着がつくかもしれませんね」

ウイスの見つめる先では、ゴジータがかめはめ波の構えに入っていた。

ゴジータが、腰を落とし、両手を上下に重ねて腰のあたりに引き寄せた。

「か—————」

重ねた手の間に、輝く気の塊が生まれ、次第に大きさを増していく。

「め—————」

舞いあがる粉塵が風で払われ、その向こうによろよと立ちあがるブローリーがあらわれた。

「は—————め—————……」

完全に戦意を失って、ブローリーがおびえ声を発して後ずさる。

「あ……う……あ……」

「はあああああ—————っ!!!」

地を震わせて、ゴジータの練りあげたかめはめ波が放たれる。破滅的なパワーを秘めた輝きを前にして、ブローリーはただ震えることしかできなかった。

その時だった。

「ブローリーを！ もといた星に帰してやってくれー!!」

チライの願いを叫ぶ声が、あたりに響きわたった。

シエン ロン
神龍が身じろぎをしたと思った瞬間、ブローリーの姿が、その場からかき消える。

かめはめ波を撃ち終わったゴジータは、光となったブロリーが目の前から飛び去るさまを、驚きの表情を浮かべて見送った。

その光は、一瞬で長い距離を飛び越え、ゴツゴツとしたあばた面^{づら かく せい}の惑星に降りていった。

惑星の名は、バンパといった。

気がつくと、ブロリーはひどく見慣れた場所に、ひとりぼつん^{すわ}と座っていた。

あの、恐ろしい敵は、もういなかった。

あのイヤな白いヤツも、もういなかった。

全身が痛む。息ができないほど苦しい。

それでも。

^{なつ}懐かしい風景を見渡して、ブロリーは思った。

それでも、ブロリーは自由だった。



其^{その}之^な七

死^し闘^{とう}の先^{さき}は…

DRAGONBALL SUPER





巨大な神龍^{シエン ロン}は、チライを見おろし、言った。

「願いはかなえられた！　さらばだ」

神龍^{シエン ロン}は光となってボールにもどり、ボールは上空に浮かびあがって、輝きを残してバラバラに飛び去った。

尾を引いて消えていくドラゴンボールを見送って、ゴジータの口もとに笑み^えが浮かぶ。

同じころ、ゆっくりと明るさをとりもどす空を見あげて、チライはため息をもらしていた。

これでブロリーは助かったのだろうか。あの龍^{りゅう}の言葉は本当だったのか。

そこまで思ってから、チライは、自分の身に危険^{せま}が迫っていることに気がついた。後先^{あと さき}を考えず、フリーザが集めたボールを勝手に使ってしまったのだ。

さて、どうしよう。

『乗れ!!　チライ！』

突然頭上^{ひび}から響いた声に、チライが顔をあげる。そこに浮かんでいたのは、レモが乗る小型船^おだった。背の届く高さまで降りてきたその船に、チライはとっさに飛び乗っていた。

取り残されたキノコ^{ぼう ぜん}が呆然と見あげるなか、ふたりの乗った船は、あっという間に遠ざかっていった。

急速に加速しながら、頭上を飛び越える船があった。

フリーザは不機嫌^{ふ き げん}そうにそれを見あげ、指を突き出した。それからゆっくりと狙い^{ねら}をつけ、指先にパワーを集中し――。

「おっと」

横からのびた手が、フリーザの手首をつかんでいた。

ゴジータだった。

「……………」

フリーザは相手をにらみつけてから、顔をそむけ、目を閉じた。肌を覆った金色^との光は弾ける^{はだ おお}ようにして消え、同時に指先^{はじ}に集中していたエネルギーも消滅する。

「ふん……」

それからフリーザは、ゴジータの手を振りほどき、背を向けて歩きだした。

「また来ますからね」

それだけ言い残し、フリーザは宇宙船^{しゅうめつ}の方向へと飛び去っていった。

すでに日は傾^{かたむ}き、空は夕焼^そけに染まる時刻だった。

ビルスは、あぐらをかいだ自分の膝^{ひざ}の上でブラを遊ばせながら、氷の大陸がある方向に目をやった。

「うん……なんとかなったようだな」

ひと言^{こと}そうつぶやくと、ビルスは午後のまどろみのなかに戻っていった。

レモの操^{あやつ}る宇宙船は、地球を離れ、なおも加速を続けていた。

「悪かったね、あんたを巻きこんじゃったよ」

チライは操縦^{そうじゆうせき}席の後ろに立って、すまなそうな声を出した。

レモが振り返って小さく笑う。

「気にするな。フリーザ軍に入っ、いまのが一番スリルがあって楽しかった」

それからチライは、少し顔に不安をにじませながら、後ろを振り返るしぐさをした。

「追ってくるかな……」

「さあな……で、チライはどこに行くつもりだ？」

操縦席のレモを見ながら、チライは答えた。

「プロリーの星だよ」

「バンパか……」

「レモはこの星で降りる？」

「いや、オレもつき合うよ。どこにいても危険なのは同じだしな」

レモは操縦席のパネルを操作しながら、小さく肩をすくめた。

「強いプロリーの近くにいたほうが、まだ安心だろう」

言いながら、レモが障害物^よを避けるため、操縦桿^{かん}を倒す。

バランスを崩^{くず}しかけたチライが、あわててレモの座る席の背もたれにしがみついた。

「うわっと……じゃあ、途中で食料とかいろいろ買っていかなきゃな！」

氷の大陸での戦いから三日後のこと。

司令^{し れい}席でくつろぐフリーザに、データパネルを手にしたキコノが言った。

「やはりあのふたりは、プロリーと一緒にのようですね……」

パネルの上には、惑星^{わくせい}バンパの画像と、その上に点滅する光^{うっ だ}が映し出されている。

フリーザたちは、とある惑星の上空にいた。

外では、激しい戦^{せん とう}闘がくりひろげられていた。眼下^{がん か}の星は豊かだったが、抵抗も激しかった。もっとも、だからこそ侵略^{しんりやく}のしがいもあるというものだったが。

「しばらく、そのまま泳がせておきましょう」

答えながら、フリーザは目^とを閉じた。

「あのふたりに、プロリーの精神コントロールをまかせ、われを失うことなく、あのとてつもないパワーが出せるようになれば、それこそ最強の戦闘員になります」

キコノが不安げな声をあげた。

「うまくいくでしょうか……」

フリーザは目を開け、キコノを見おろした。

「そうであってほしいですねえ」

それからフリーザは外の戦いに目を向け、冷たい笑みを浮かべてこう言った。

「いくら、わたしががんばって戦闘力をあげても、敵は孫悟空とベジータのふたり……こっちだって、もうひとりくらい欲しいですよ……フフフ」



狩りから帰ったブロリーは、例の大ダニの脚をへし折って、粘液まじりの脚肉をチャイたちに差し出した。

「うそだろ……。こんなのを食べてたのか？」

そう言いながら、チャイは差し出した指先で粘液をとり、こわごわと口に含んだ。

「ぐっ……ま、まあ、苦いけど、飢え死ぬよりはマシ……って感じだな」

そう言いながら、レモに水を向ける。チャイの視線を受けて前に出たレモは、指先についた粘液をなめたとたん、体を折ってげええと音を立てた。

「……ダ、ダメだ、オレは」

「贅沢を言うんじゃないよ。買ってきた食料だけじゃ、五〇日ももたないんだからね」

ブロリーのケガはひどく、まだ治りきっていなかったが、それでも、それほど長くない期間のうちに、驚くほどのペースで回復しつつあった。

実際、レモとチャイがバンパに戻ってくるまでの間、ブロリーはこうやってたったひとりで生きていたのだった。

「——誰か来た」

レモとチャイがダニの脚肉に困り顔を向けていたその時、ブロリーは、住居にしている洞窟の出入口に顔を向けてそう言った。

「えっ？」

チャイが顔を向ける。光を背に、出入口に立つ人影があった。

「おーい、入っていいか？」

ひどくのんきな声だったが、フリーザ軍の追っ手ではないという保証はない。なにしろ、当のフリーザが、笑いながら平気で人を消すタイプである。

レモはあわてて腰をまさぐった。例のダニを警戒して、銃も準備してきたはずだった。

レモたちの答えも聞かず、その人影は洞窟のなかに踏みこんできた。

「あれ、誰だ？ おめえたち」

チライはようやく相手の正体^{しょうたい}に気づいた。最悪だった。

「お、おまえ！ 地球のサイヤ人……！」

「あ、そうか、ドラゴンボールを使ってた、フリーザ軍の！」

チライたちの目の前にいたのは、孫悟空だった。

「なにしにきた！」

レモはベルトに挟^{はさ}んであった銃を引き抜き、構えた。が、銃だと思っていたのは、工具のトンカチだった。レモは、顔をしかめてトンカチを投げすてた。

悟空はブロリーのすぐ目の前までやってくると、笑顔を浮かべて手をあげた。一瞬^{けい かい}、警戒^{けい かい}の表情を浮かべたブロリーだったが、悟空のようすを見て、すぐに顔をやわらげた。

「ブロリーの仲間だったのか」

レモはなおも警戒^{くず}を崩さず、強い口調で返した。

「なにしにきたって聞いているんだ」

「まあ、そうカリカリすんなよ。戦いに来たわけじゃ、ねえんだからさ」

チライが眉^{まゆ}をひそめる。

「じゃあなんだ」

「ひどい星だって聞いたからさ、いろいろ持ってきてやったんだ」

悟空はそう言って、手にしたナップザックを持ちあげて見せた。

それを見たチライは、身を乗り出しながら悟空をにらみつけた。

「よけいな世話だ、帰んな。だまされないからね」

「ハハハ……」

悟空は笑いながら、ナップザックから小さなケースを取り出した。ケースのなかには、上にボタンのついた小さなカプセルが三つ入っていた。

「これ、ブルマってヤツに頼^{たの}んで、もらってきたんだ」

悟空はカプセルのひとつを取り出し、ボタンを押して、チライたちに手振りをしながら言った。

「ちょっと、そこどいて。ほいっ」

悟空が、洞窟^あの空いている場所にカプセルを投げる。とたん、ボン、と煙が出て、そこにドーム型の家が出現した。

チライたちがそろって声をあげる。

「えっ」

「家のなかに、水とか食料とか、いろいろいっぱい入ってっから」

チライとレモが家のなかに入っていく。なかからレモの驚く声が聞こえてきた。

「おおー！」

悟空は小さな袋から手のひらに豆粒^{まめ つぶ}を落として、三人に見せた。

「あと、これ仙豆^{せん ず}ってんだけど、二粒やる。やべえ、死ぬって思った時に食うといい。病気は無理だけど、ケガとかならすっかり

治って、体力も満タンになるぞ」

話を聞いていたチライが、疑わしげな顔で悟空を見た。

「なにを企^{たくら}んでるんだ？」

「そんなじゃねえさ。元気に生きてろっただけだ」

チライとレモが眉をひそめて声をそろえる。

「はあ？」

悟空はブロリーを肩越しに振り返った。

「オラ、強いのは自信があったのに、もっとずっと強いブロリーがあらわれてさ、しかもおんなじサイヤ人だ。たぶんビルスさまより強いぞ。ビルスさまってのは、神さまなだけださあ」

ちょうどそのころ、ブルマの屋敷でビルスが大きなくしゃみをしていたことを、悟空が知るよしもなかった。

「とにかく、そんなスゴいやツに死なれちゃ、もったいねえだろ」

悟空の言葉の意味がわかったのか、ブロリーがすこしはにかんだ顔をした。

DRAGONBALL SUPER



「まあいいや、とりあえず元気だな」

それだけ言うと、悟空は洞窟の出入口に向かった。

それから、悟空は洞窟を出ると、ついてきた三人に手を振った。

「じゃ」

「え、宇宙船がない……おまえ、どうやって来たんだ」

驚くレモに、悟空は振り返り、笑いながら額^{ひたい}に指先を当てた。

「瞬間移動できるんだ。ブロリーの気^きを探してさ」

チライはまだ疑っているようだった。

「あんたの言ってること、やっぱ全然わかんないね」

悟空は笑顔を浮かべ、たずねた。

「また来ていいか？」

「言っとくけど、あたしたちはあんたの敵だからね。フリーザ軍はクビかもしれないけど、あんたの仲間になんてならないよ」

なおも疑わしげな目を向けてくるチライに、悟空は応^{こた}えた。

「そんなことはどっちでもいいさ」

「えっ？」

「オウは、たまにブロリーと戦わせてほしいだけだ。オウのほうから、教えてやりてえことなんかもあるしな」

「あんた、相当イカしてるようだね」
^{そう とう}

チライが苦笑^{く しょう}を浮かべて前に出る。

「なんでだ？」

きょとんと聞き返す悟空に、チライは笑って指でサインを作った。

「まあ、とりあえず礼は言うよ。サンキュー」

「おう。じゃあな、また来る」

悟空はチライにうなずいてから、ブロリーに向かってそう声をかけた。

「もう、ここにはいないかもしれんぞ」

レモがむっつりと言うと、悟空は瞬間移動のしぐさをしながら答えた。

「だいじょうぶ。そんなに遠くなきゃ探せる」

そうして、三人に背中を向け、悟空は洞窟の前にある切り立った崖^{がけ}に向かって歩きだした。

「あんた、名前は？」

チライの声に、悟空はすこし振り返って、額に指を当てながらこう言った。

「孫悟空……それと、カカロット」

DRAGONBALL **S**UPER



そして、悟空の強さを求める冒^{ものがたり}険は、まだまだ続く。

この先どんなお話が待っているのか？ それはまたのお楽しみ。

劇場版 CAST&STAFF

原作・脚本・キャラクターデザイン：鳥山明

声の出演

野沢雅子 [孫悟空]

堀川りょう [ベジータ]

中尾隆聖 [フリーザ]

島田敏 [ブロリー]

久川綾 [ブルマ]

古川登志夫 [ピッコロ]

草尾毅 [トランクス]

山寺宏一 [ビルス]

森田成一 [ウイス]

宝亀克寿 [バラガス]

水樹奈々 [チライ]

杉田智和 [レモ]

作画監督：新谷直大

音楽：住友紀人

美術監督：小倉一男

色彩設計：永井留美子

特殊効果：太田 直

CG ディレクター：牧野 快

製作担当：稲垣哲雄

監督：長峯達也

■初出
劇場版 ドラゴンボール超 クロリー 書き下ろし

この作品は、2018年2月公開の映画『ドラゴンボール超 クロリー』をベースしたものです。

鳥山明 Akira Toriyama

ねん う あい ち けんしゅっしん に ほん だいひょう まん が か ドクター せ かい てき だい まん が う だ つづ
1955年生まれ、愛知県出身。日本を代表する漫画家。「Dr.スランプ」「ドラゴンボール」など、世界的大ヒット漫画を生み出し続けている。

日下部匡俊 Masatoshi Kusakabe

ねん う とうきょう と しゅっしん かず おお さく りん て しょうせつ か だいひょう さく げきじょうばん ナルト あん さつきとうしつ ころ
1964年生まれ、東京都出身。数多くのノベライズ作品を手がける小説家。代表作は劇場版「NARUTO」シリーズ、「暗殺教室 殺すう」など。

ジャンプジェイブックスDIGITAL

[劇場版 ドラゴンボール超] プロロー

著者 鳥山 明・日下部匡俊

© 2018 A.Toriyama / M.Kusakabe

2018年12月31日発行

この電子書籍は、ジャンプジェイブックス「劇場版 ドラゴンボール超 プロロー」
2018年12月19日発行の第1刷を底本としています。

田圭子〔バナナグローブスタジオ〕

左藤裕介〔STICK-OUT〕

・葉佳余

・木晴彦

・株式会社 集英社

01-8050

・都千代田区一ツ橋2丁目5番10号

-3230-6080(読者係)

・株式会社ICE

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、インターネット上に掲載すること、および有償無償に関わらず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。なお個人利用の目的であっても、コピーガードを解除しての複製は、法律で禁じられています。